

茂利・宮の西遺跡II

2013年3月

兵庫県多可郡多可町教育委員会



莊嚴寺慶長銘鍋口



出土鑄型・溶解炉片

しげり みやのにし いせき
茂利・宮の西遺跡Ⅱ

2013年3月

兵庫県多可郡多可町教育委員会

序 文

1992年に川西北地区圃場整備事業にかかる埋蔵文化財調査が実施された結果、今回報告する茂利・宮の西遺跡が発見されました。

茂利・宮の西遺跡では、奈良時代終わり頃と室町時代頃の遺構・遺物が注目されます。特に、後者の室町時代の遺構・遺物群は、残されている梵鐘や鰐口にその名が刻まれている「仲山九郎兵衛」の活動拠点と関わりがあることが明らかとなりました。かつて『中町誌』等で推定されていた「仲山鑄物師」の存在は、曖昧な情報でしたが、今回の発掘調査及び整理事業の中で再認識されることとなったことは、今後の広域における鑄物師の研究においても新たな成果を提供したものと考えられます。

これらの新しい成果は、多可町の歴史だけでなく、周辺地域の歴史を組み直すことのできる資料となるものと期待されています。本書をはじめ、出土した資料が広く活用されることを期してやみません。

最後になりましたが、発掘調査及び整理調査にご協力いただきました、関係各位に厚く謝意を表す次第です。

2013年3月

多可町教育委員会

教育長 岸 原 章

例 言

- 1 本書は兵庫県多可郡多可町中区茂利に所在する、茂利・宮の西遺跡の発掘調査報告書である。茂利・宮の西遺跡は、『茂利・宮の西遺跡-(主)中柏原線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』として、兵庫県教育委員会の発掘調査成果が2010(平成22)年に刊行されている。このため、今回報告する調査区の成果との混同を避けるため『茂利・宮の西遺跡Ⅱ』として、今回刊行することにした。
- 2 調査は多可町教育委員会(旧中町教育委員会)が主体となり、宮原文隆が担当した。
- 3 発掘調査・整理作業・本報告書刊行は、文化庁の国庫補助金及び兵庫県教育委員会の県費補助金により実施した。
- 4 遺跡での遺構写真及び遺物写真は宮原が撮影した。
- 5 現地での個々の遺構等の実測は藤浦 薫・藤原 敏・宮原が行った。
- 6 遺物実測は早崎喜代美・松田優子・宮原、遺物の拓本は松田・安平千恵美、トレースは吉田衣里・早崎が行った。
- 7 本書で示す標高値は中町建設課BMを使用した値である。方位は原則磁北で示しているが、茂利・宮の西遺跡第2区本発掘調査分は座標北で示している。
- 8 遺構番号は、発掘調査時の番号をそのまま使用している。このため、遺構番号が欠番となるものが存在することをご容赦願いたい。
- 9 本書記載の土器実測図の断面は、弥生土器・土師器・土師質土器等-黒、須恵器・陶器-白、施釉陶器・磁器-網目とした。また、土器実測図において中心軸に沿って内外面の成形・調整表現が上下一直線にわたって欠する土器は、遺存率及び歪み等のため復元径に問題があることを示している。
なお、実測番号は、銭貨を含む金属製品には「F」、石製品には「S」、木製品には「W」をアラビア数字の前に付した。
- 10 遺物は番号を付し、図と写真の番号は一致する。遺物写真については、土器個別別写真は原則として縮尺をほぼ1/3としている。集合写真は任意の縮尺をとっている。
- 11 出土木製品の樹種同定は加東市教育委員会 森下大輔氏、石材鑑定は大河内中学校 橋元正彦氏に依頼した。
- 12 本書の執筆・編集は宮原が行った。
- 13 本報告に係る図面・写真・遺物等は、兵庫県多可郡多可町中区東山539-3 那珂ふれあい館にて保管している。

本 文 目 次

序 文 例 言

I はじめに	
1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	2
3. 調査方法、発掘期間、調査体制	3
II 茂利・宮の西遺跡確認調査	
1. はじめに	5
2. 茂利・宮の西遺跡確認調査の概要	5
III 茂利・宮の西遺跡第1区	
1. 井戸	10
2. 土坑	10
3. 溝	13
4. 柱穴群	14
IV 茂利・宮の西遺跡第2区	
1. 井戸	17
2. 溝	18
3. 土坑	24
4. 掘立柱建物及び柱穴群	32
5. 第2区小結	44
V 茂利・宮の西遺跡第3区	53
VI 総括	
1. 茂利・宮の西遺跡の性格	54
2. 茂利・宮の西遺跡の鋳物師	56

挿 図 目 次

I はじめに

- 第1図 多可町位置図
第3図 調査位置図

II 茂利・宮の西遺跡確認調査

- 第4図 T-9・21
第6図 T-32・42

III 茂利・宮の西遺跡第1区

- 第8図 第1区遺構図
第10図 土坑1
第12図 第1区出土遺物(2)
第14図 第1区出土遺物(3)

IV 茂利・宮の西遺跡第2区

- 第15図 第2区A遺構図
第17図 井戸1・2
第19図 溝出土遺物(1)
第21図 溝出土遺物(3)
第23図 土坑1・4・8・9
第25図 土坑出土遺物(2)
第27図 土坑28~31
第29図 土坑出土遺物(4)
第31図 P117・P111・P96
第33図 掘立柱建物出土遺物(1)
第35図 P141・P172・P174
第37図 P3・P53・P89・P91・P119
第39図 掘立柱建物8~11及び溝20
第41図 掘立柱建物出土遺物(4)
第43図 掘立柱建物出土遺物(5)
第45図 ピット出土遺物(1)
第47図 ピット出土遺物(3)
第49図 ピット出土遺物(5)
第51図 第2区出土遺物(2)

V 茂利・宮の西遺跡第3区

- 第53図 第3区遺構図

VI 総括

- 第55図 鑄造関係遺構配置図

- 第2図 周辺の遺跡分布図

- 第5図 T-22~24
第7図 確認調査出土遺物

- 第9図 井戸1
第11図 第1区出土遺物(1)
第13図 P3・P5・P11

- 第16図 第2区B遺構図
第18図 井戸1・2出土遺物
第20図 溝出土遺物(2)
第22図 溝断面図
第24図 土坑出土遺物(1)
第26図 土坑10・21~25
第28図 土坑出土遺物(3)
第30図 掘立柱建物1~4及び区画溝
第32図 掘立柱建物5
第34図 掘立柱建物出土遺物(2)
第36図 P54・P68・P157及び出土遺物
第38図 掘立柱建物6・7
第40図 掘立柱建物出土遺物(3)
第42図 P200・P326・P323・P349
第44図 P264・P277・P304・P376及び出土遺物
第46図 ピット出土遺物(2)
第48図 ピット出土遺物(4)
第50図 第2区出土遺物(1)
第52図 第2区出土遺物(3)

- 第54図 第3区出土遺物

- 第56図 茂利・宮の西遺跡周辺の小字名

表 目 次

遺物観察表
報告書抄録

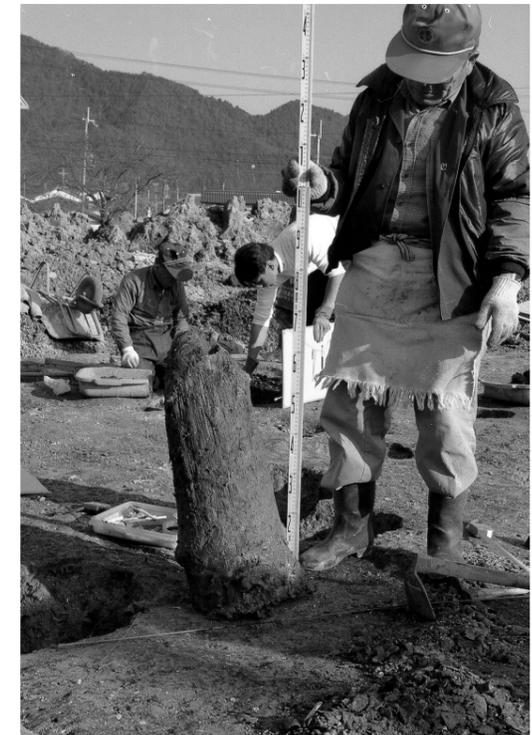
図 版 目 次

表紙 第2区掘立柱建物と区画溝

裏表紙 莊厳寺慶長銘鰐口 出土鑄型・溶解炉片

図版表紙

- | | | | | |
|------|-------------|--------------------|-------------|---------------------|
| 図版1 | 調査地全景 | (南西から) | (南東から) | |
| 図版2 | 確認調査(1) | T-21(南から) | T-22(南から) | T-22 P1 |
| 図版3 | 確認調査(2) | T-24(北から) | T-32(南東から) | T-42(北西から) |
| 図版4 | 第1区 | 井戸1 | 土坑1(北から) | 土坑1 土器出土状況 |
| 図版5 | 第1区全景 | (西から) | (北から) | |
| 図版6 | 第2区(1) | 井戸1 | 井戸2 | 溝1 断面 |
| 図版7 | 第2区(2) | 溝2 断面 | 溝4 断面 | 溝10・11断面 |
| 図版8 | 第2区(3) | 溝20断面 | 土坑24(北から) | 溝18断面 |
| 図版9 | 第2区(4) | 溝20土器出土状況 | 掘立柱建物1 P117 | 土坑25(南から) |
| | | 掘立柱建物4 P96 | 掘立柱建物5 P141 | 掘立柱建物5 P172 |
| | | 掘立柱建物5 P174 | 掘立柱建物9 P200 | 掘立柱建物10 P323 |
| 図版10 | 第2区(5) | 掘立柱建物10 P326 | P54 | P68 |
| | | P157 | P277 | P53 |
| | | P3 | P264 | P304 |
| 図版11 | 第2区(6) | 掘立柱建物1~4及び区画溝(西から) | (東から) | 掘立柱建物1~4及び区画溝(南東から) |
| 図版12 | 第2区(7) | 第2区B北側(東から) | | 第2区B南側(東から) |
| 図版13 | 第2区(8) | 第2区A全景(西から) | | 第2区A全景(東から) |
| 図版14 | 第2区(9) | 第2区B全景(南から) | | 第2区B全景(北から) |
| 図版15 | 第2区(10) | | | |
| 図版16 | 第3区全景 | | | |
| 図版17 | 出土遺物(1) | | | |
| 図版18 | 出土遺物(2) | | | |
| 図版19 | 出土遺物(3) | | | |
| 図版20 | 出土遺物(4) | | | |
| 図版21 | 出土遺物(5) | | | |
| 図版22 | 出土遺物(6) | | | |
| 図版23 | 出土遺物(7) | | | |
| 図版24 | 出土遺物(8) | | | |
| 図版25 | 出土遺物(9) | | | |
| 図版26 | 出土遺物(10) | | | |
| 図版27 | 出土遺物(11) | | | |
| 図版28 | 出土遺物(12) | | | |
| 図版29 | 出土柱根樹種写真(1) | | | |
| 図版30 | 出土柱根樹種写真(2) | | | |



とり上げられた P323 柱痕

I はじめに

1. 地理的環境

多可町は、多可郡内の中町、加美町、八千代町が合併して平成17年11月1日に誕生した新しい町である。兵庫県のほぼ中央で、北播磨地方の最北部に位置する。

多可町役場からは、南方の県庁所在地である神戸市まで直線距離で約50km、北方へは日本海側の海岸線（豊岡市）まで約70kmを測る。

町は東西約13km、南北約25kmを測り南北に細長く、面積は185.15km²を保有し、平成25年2月における人口は23,042人である。

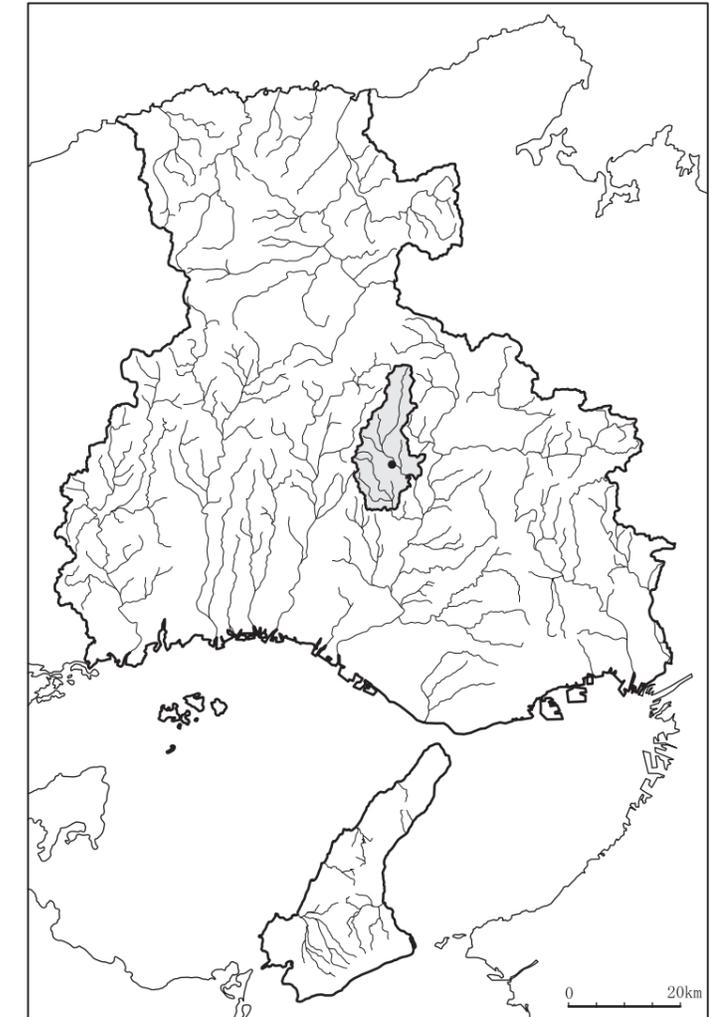
行政境は、北は朝来市・丹波市に、東は西脇市に、西は神埼郡神河町・市川町に、南は加西市に接している。

全体が北高南低の地形で、北部は千ヶ峰をはじめとする標

高900～1,000m級の峰から派生する山間部を加古川の支流である杉原川及び野間川が南流する。これらの河川によって、平野部は谷底平野を形成している。杉原川水系は中区・加美区、野間川水系は八千代区に該当する。気候は瀬戸内型に属するものの、冬季と夏季の気温格差がやや大きく、内陸的な様相を呈する。

主たる産業は山田錦を中心とする稲作農業、山間部の林業、播州織を中心とする繊維産業であり、地理的・歴史的環境を活かした新たな産業の導入・振興が模索されている。

杉原川中流域に位置する中区内の地理的景観を見ると、この杉原川によって北部平野、中央平



第1図 多可町位置図

野、安田平野の3つの平野部に大きく区分でき、本報告の茂利・宮の西遺跡は、中央平野の南西部に位置する。

これらの平野部をとりまく山塊は、北には標高692.6mの妙見山がそびえ、西側では山腹が緩斜面であるのに対して、東側・南側では急斜面が続く崖を呈している。

2. 歴史的環境

ここでは中区茂利を中心とした遺跡の概要を、振り返っておきたい。

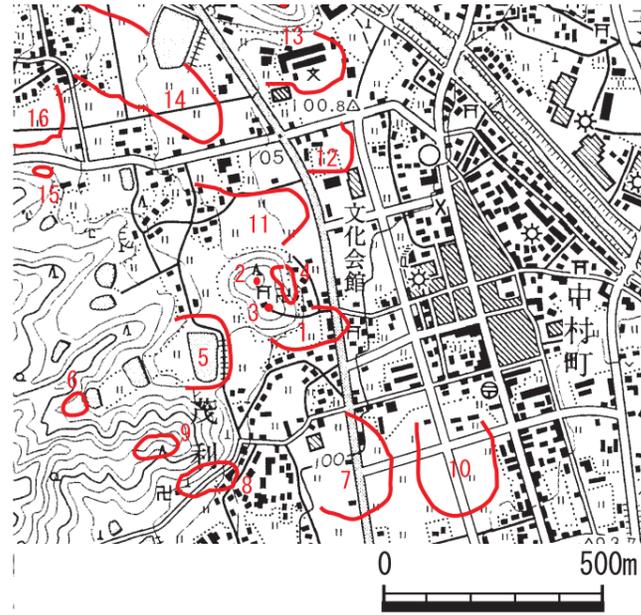
まず本報告の茂利・宮の西遺跡の北側に位置する独立丘陵上(丸山)には、古墳時代前期～中期の所産と考えられる丸山1号墳と丸山2号墳が存在している。丸山1号墳は35×25m、高さ2m以上の規模を有する円墳で周囲にテラスを巡らせるが、後世の改変が著しい。丸山2号墳の墳頂部には祇園神社が建てられている。かつて祇園神社建設時に石室内から鉄刀が発見されたと伝えられるが、墳頂部には石室の存在を示す痕跡は確認できず、鉄刀の行方も明らかでない。当古墳については、大きく削平を受けている可能性がある。また、この丸山の東斜面にはいくつかの平坦面が形成されており、山林寺院関係の遺構と考えられている。

南西の中山山麓には横穴式石室を主体部とする後期～終末期の茂利古墳群がある。径10m前後の6基の古墳が確認されている。

この茂利古墳群の位置する中山山頂部には、塚状の高まりが確認でき、川原石及び土器の散布が確認されている。古墳若しくは宗教関係の遺跡と考えられる。

丸山の西側谷間の字富山地には、縄文時代草創期の有舌尖頭器のほか古墳時代～中世の土器が散布している富山地池遺跡、谷奥に茂利中世墓群が位置している。

茂利・大將軍遺跡は、圃場整備事業によって確認された遺跡である。確認調査のみの限定された調査であるが、弥生時代後期後半の溝が検出されている。しかし主体となるのは中世を中心と



第2図 周辺の遺跡分布図

- | | | |
|-----------------|------------|----------|
| 1 茂利・宮の西遺跡 | 2 丸山1号墳 | 3 丸山2号墳 |
| 4 丸山遺跡 | 5 富山地池遺跡 | 6 茂利中世墓群 |
| 7 茂利・大將軍遺跡 | 8 茂利古墳群 | 9 中山山頂遺跡 |
| 10 安坂・城の堀遺跡 | 11 奥中・三内遺跡 | 12 軍勢遺跡 |
| 13 軍勢遺跡(中町中学校内) | 14 奥中・桜木遺跡 | |
| 15 旧天神社遺跡 | 16 奥中・前田遺跡 | |

した遺構群であり、近接する安坂・城の堀遺跡との関係があるものと推測されている。

茂利の南端の谷筋の田中大池を含む茂利・畑の堂遺跡では、古墳時代～平安時代の土器が採集されている。

茂利の北側の奥中地区内では、弥生時代終末期の数棟の竪穴住居跡が検出されている奥中・三内遺跡が隣接している。

近年、兵庫県教育委員会によって茂利・宮の西遺跡の一面に発掘調査が実施され、その成果が公表されている¹⁾。それによれば、14～16世紀にこの地で鉄鍋を含む鋳鉄物の工房が営まれていたことが示されている。今回の報告はこれを補強する事実を提供している。

上記の中区の中央平野を中心とする周辺の埋蔵文化財調査成果については、既刊の文化財報告書²⁾を参照願いたい。なお、町内全体の遺跡や文化財については、多可町文化財報告1～20、中町文化財報告1～34、加美町文化財報告1～10、八千代町文化財調査報告書第1～3冊の報告書を参照して頂きたい。

3. 調査方法、発掘期間、調査体制

調査方法

川西北地区の土地改良総合整備事業に伴い、多可町中区茂利地区を対象として事前に文化財調査を実施することとなった。確認調査は地形等を勘案して基本的に2×4mのトレンチを設定し、遺構や遺物の状況によって調査範囲を拡張し、遺跡の時期・性格の把握に努めた。

最終的に設定したトレンチ(試掘坑)は、42ヶ所である。確認調査の結果、12ヶ所のトレンチで遺構を確認した。そして、この地域の遺跡名称を、濃密に遺構が確認された小字名をとり、茂利・宮の西遺跡と命名した。

こうした調査成果を元に事業課と保存協議を行った結果、遺構を保存できない部分について、記録保存のために、茂利・宮の西遺跡本発掘調査第1～3区を実施した。

発掘期間

- ・茂利・宮の西遺跡確認調査 1992(平成4)年4月20日～5月20日
- ・茂利・宮の西遺跡第1区本発掘調査 1992(平成4)年10月30日～11月7日
- ・茂利・宮の西遺跡第2区本発掘調査 1992(平成4)年11月10日～12月26日
- ・茂利・宮の西遺跡第3区本発掘調査 1992(平成4)年12月26日～翌年1月6日

調査体制

発掘・整理調査ともに、文化庁の国宝重要文化財等保存整備費補助事業の採択を受け、多可町教育委員会(旧中町教育委員会)が主体となり実施した。

《発掘・整理作業》 発掘・整理担当 宮原文隆

補助員 早崎喜代美、藤浦 薫、藤原 敏

整理技術員 松田優子、安平千恵美

《発掘・整理作業従事者》

荻野浩三、大西 登、小林千代美、玉田 真、土田昌二、橋尾久雄、藤森竹二、真鍋 繁、丸岡栄一、迎山耕三、迎山敏二、吉田衣里、吉田昭三、吉田幸正、吉田正雄

《調査・整理作業協力者、協力機関》(敬称略)

岡田章一、小川真理子、桂 義一、岸本一郎、立花 聡、永井信弘、西田 猛、乗岡 実、橋元正彦、別府洋二、堀井隆海、松内 茂、森 幸三、森下大輔、

兵庫県教育委員会文化財課、兵庫県立考古博物館、多可町(旧中町役場耕地課)、荘厳寺

参考文献

- 1) 『茂利・宮の西遺跡』兵庫県文化財調査報告第370冊 兵庫県教育委員会 2010
- 2) 総括的なものとして、『中町の遺跡Ⅱ』中町文化財報告30 中町教育委員会 2004がある。

Ⅱ 茂利・宮の西遺跡確認調査

1. はじめに

1992(平成4)年度川西北地区圃場整備事業に先立ち、茂利字宮の西・字谷・字岸の上地区を中心とした埋蔵文化財発掘調査を実施した。

確認調査は42ヵ所(T-1～T-42)のトレンチ(約2×4mの規模が基本)を設定し、調査を実施した。調査は確認調査後に水田の植え付けを行うため、畦畔や水路の損傷を防ぐため手掘りで実施した。手掘りのため、暗渠等を確認した場合にはその部分の掘削を中断する手法をとった。この調査の結果、13ヵ所のトレンチにおいて、遺構を検出した。これらの確認調査の成果をふまえ、遺跡が保存できない部分について本発掘調査(第1～3区)を実施することとなった。なお、

遺跡名は遺構の密度が高い地区の字名「宮の西」をとり、茂利・宮の西遺跡とした。

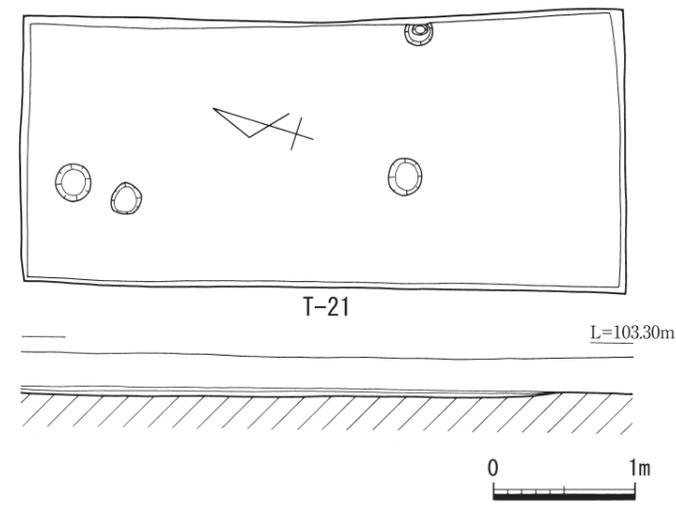
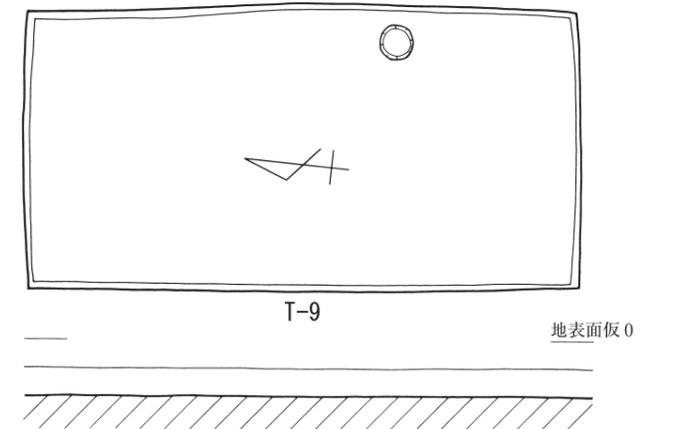
以下、確認調査の成果を報告する。なお、確認調査の結果、本発掘調査を実施した範囲と重複するトレンチは、本発掘調査成果に含めて報告する。

2. 茂利・宮の西遺跡確認調査の概要

調査対象地区内において遺構が検出されたトレンチは、T-9・T-10・T-18～T-25・T-32・T-40・T-42の13ヵ所である。このうちT-10は第1区、T-19・T-20・T-25は第2区、T-40は第3区と重複する。

T-9では、耕土直下で径約25cm、深さ約28cmの柱穴を1基検出している。柱穴内からの遺物の出土はなかった。

T-21は、耕土直下に若干の間層



第4図 T-9・21

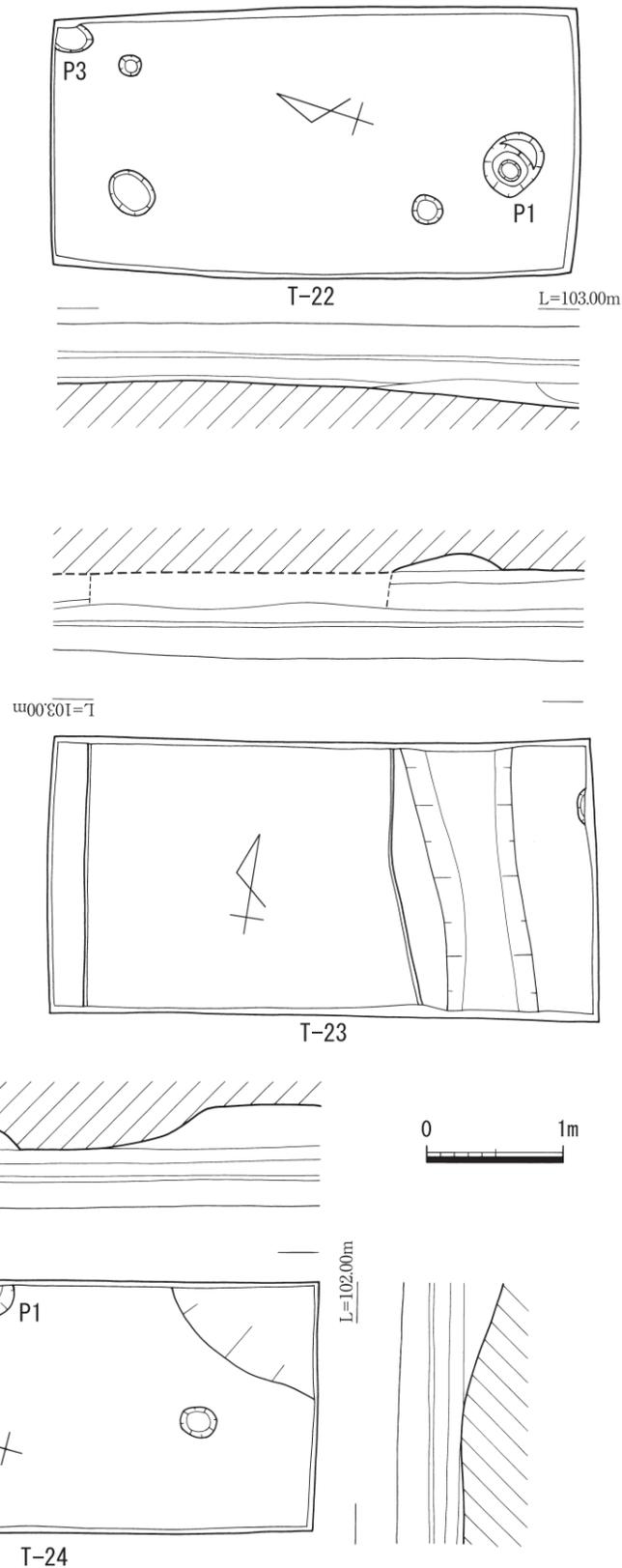


第3図 調査位置図 (S=1:2,500)

を挟んで柱穴を4基検出している。柱穴は径25cm以下で、深さは10～20cmを測る。柱穴内から遺物は出土しなかった。

T-22では耕土・床土直下に黄灰色土層が堆積し、トレンチ南方では地山面が緩やかに降下し、更に黒褐色粘質土層が堆積している。トレンチ内では大小計5基の柱穴を検出している。2段掘りのP1は径約45cm、深さは約30cmを測り、平安時代後期～末頃の体部に平行叩きを施した土師器甕(1)・須恵器山茶碗(2)が出土している。また、東北隅で検出された径約25cm、深さ約25cmのP3からは、土器細片が出土したが、時期は明らかでない。奈良時代後半頃の須恵器坏(3)は、包含層からの出土である。

T-23は、近代の35～40cmの盛り土によって、この圃場が拡張・均平化されている。表土下約60cmの地山面では、溝と柱穴を検出している。溝は南北に流路を有し、幅約60cm、深さ約10cmを測り、埋土は炭・焼土を多量に含む黄灰色粘質土である。この溝からは、中世中頃を中心とする土器(4～7)が出土している。土師器皿



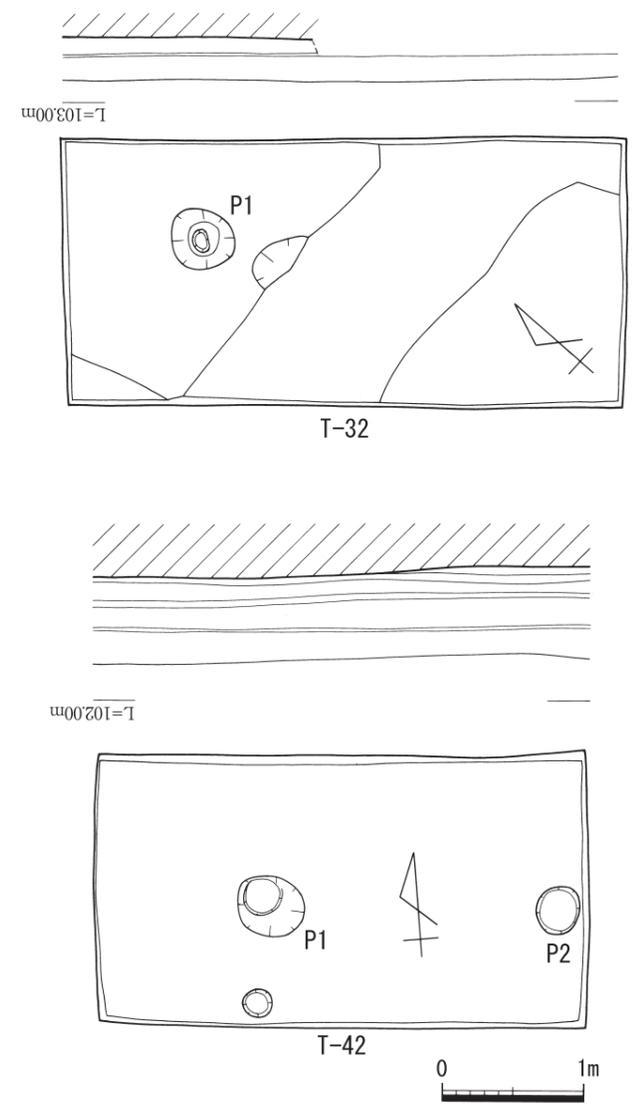
第5図 T-22～24

(4)は京都系土師器で、須恵器甕(7)の外面には羽状叩きが施されている。

T-24では、表土下約40cmで、柱穴と土坑を検出している。トレンチ東辺で検出されたP1は径約40cm、深さ約15cmを測る。埋土内から平安時代末～中世の土器細片が出土しているが、図化できなかった。南東隅で検出された土坑は埋土が黒褐色粘質土であるが、遺物の出土は皆無であった。

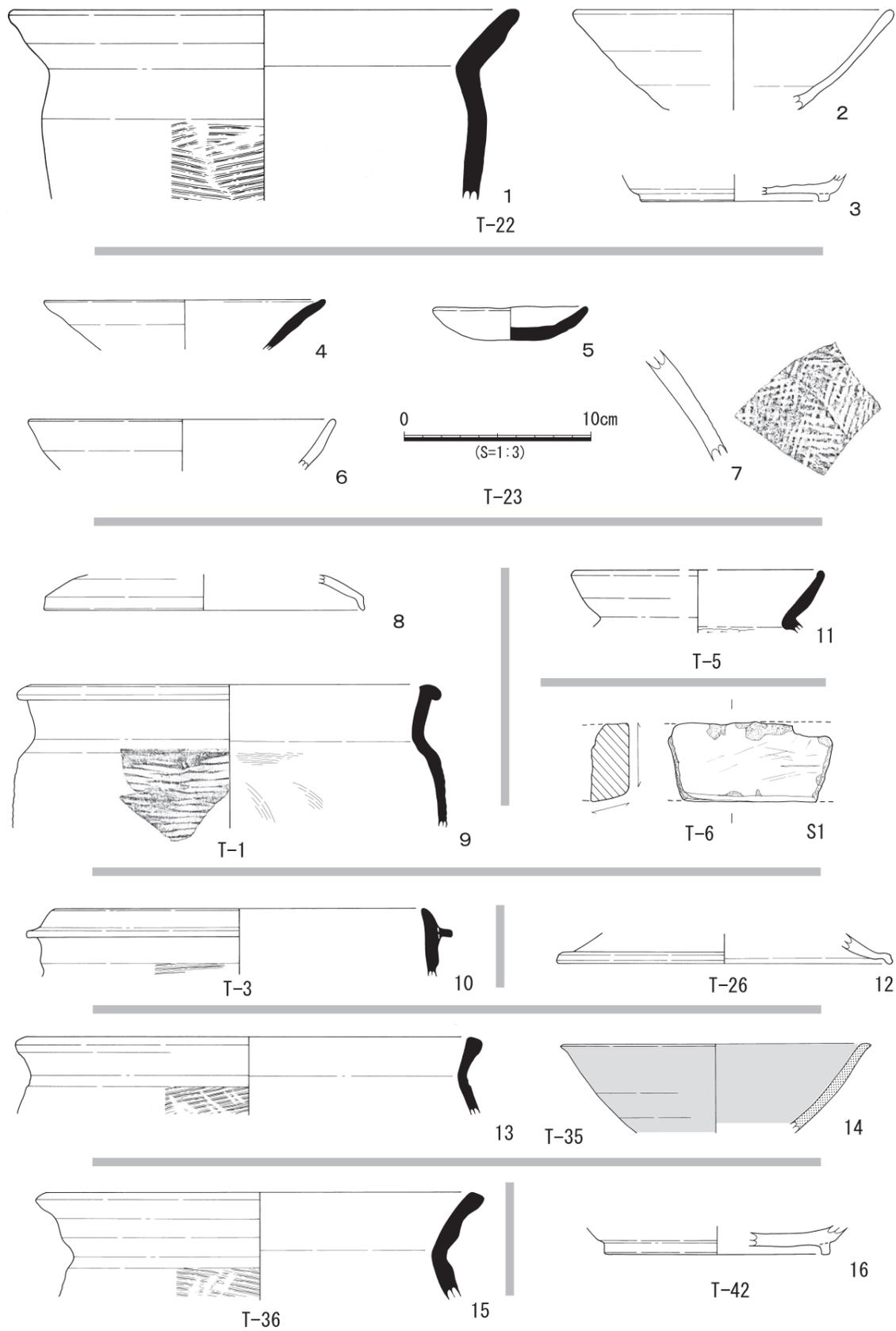
T-32は、ほぼ中央部を斜め縦断するように暗渠が確認されたため、それ以外の部分について掘り下げを行った。その結果柱穴2基を確認した。このうち掘り下げたP1は径約45cm、深さ約65cmを測る。柱穴埋土から土器細片1点が出土したが、時期は明らかでない。

T-42では、表土下約70cmで柱穴3基を検出している。P1は径約45cm、深さ約35cm、P2は径約30cm、深さ約25cmを測る。双方の柱穴内から中世を所産とする遺物が出土しているが、図化できなかった。なお、当トレンチでは奈良時代末頃の製塩土器細片が10点程度出土しており、注目される。



第6図 T-32・42

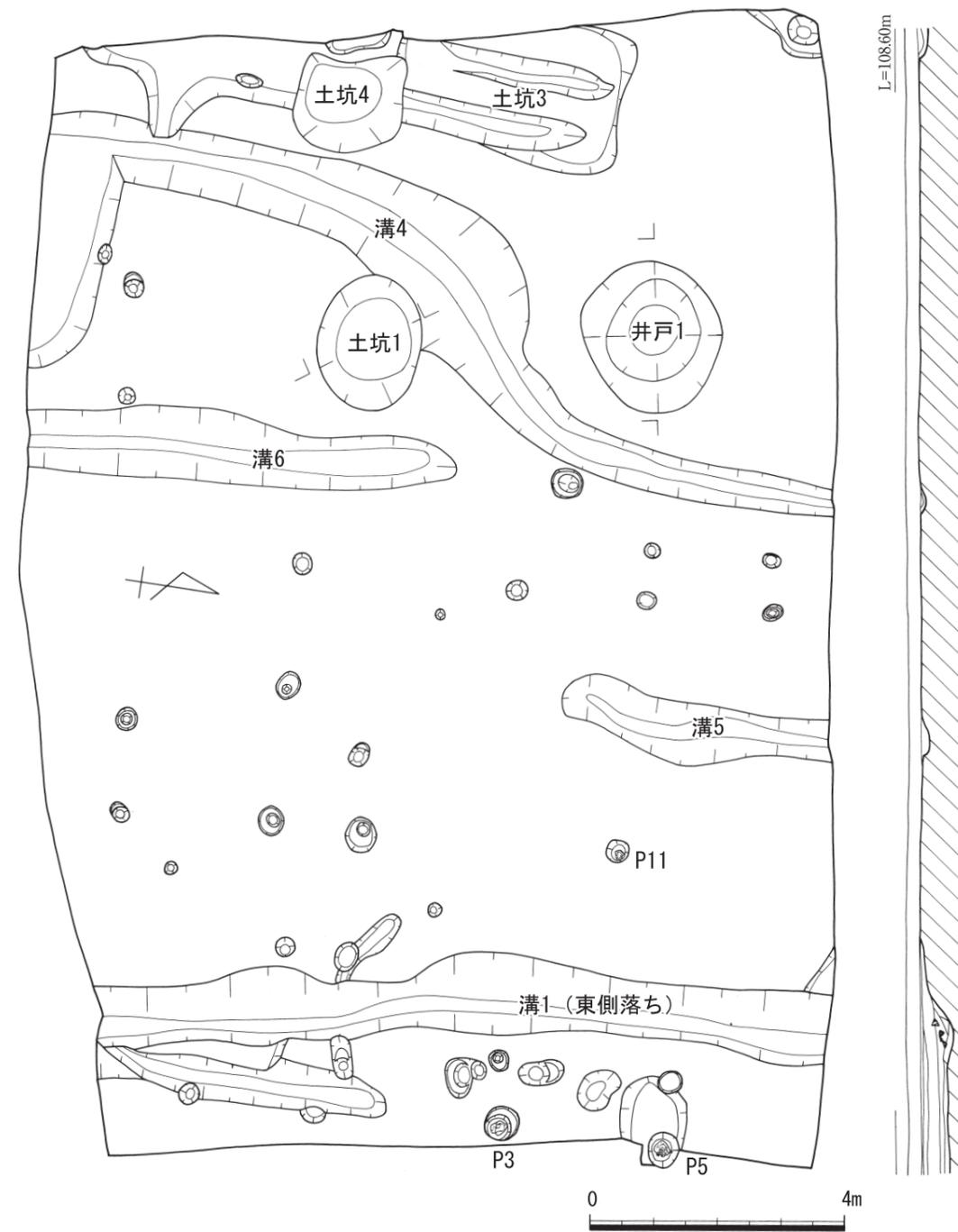
遺構の検出できなかった他のトレンチにおいても、一定量の遺物が出土している。T-5では小片であるが、古墳時代前期の土師器甕(11)が出土している。須恵器(8・12・16)は奈良時代後半の蓋坏である。砥石(S1)は凝灰岩製で、細かい条線が遺存している。



第7図 確認調査出土遺物

Ⅲ 茂利・宮の西遺跡第1区

茂利・宮の西遺跡第1区は、調査対象地区内の西端の富山地池の堰堤下に位置し、約12×18mの方形調査区で、面積は約220㎡である。調査区内は東端近くを南北に走る溝1を境に、地山面が約40cm下がっている。検出された遺構には、井戸・土坑・溝・柱穴等がある。以下、



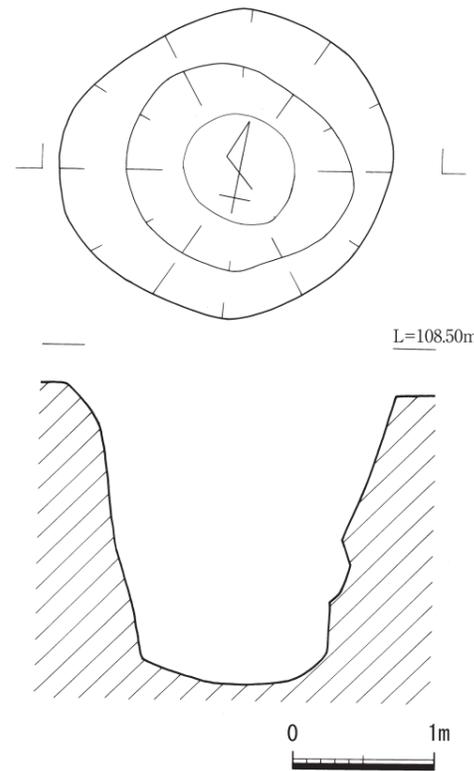
第8図 第1区遺構図

遺構毎に概要を記していく。

1. 井戸

調査区北西寄り、井戸1が検出されている。この井戸1の掘り方は円形で、径2.2×2.3m、深さ約2.1mを測る素堀の井戸である。掘り方の上方で2段掘り状を呈する。井戸堆積土は、検出面から約50cm程は浅黄色砂質土、その下層は黄灰色粘質土と明緑灰色粘質土のブロック層で30～80cmの礫を多量に含む。その状況から、礫土は意図的に埋め込まれたものと考えられる。

出土遺物には京都系土師器皿(1-1)、土釜(1-2・1-3)、備前焼すり鉢(1-4・1-5)、丹波焼甕(1-6・1-7)、曲物底板(1-W1・1-W2)がある。当出土遺物の中で備前焼すり鉢(1-4)と丹波焼甕(1-7)は土坑3出土遺物、丹波焼甕(1-6)は溝4出土遺物と接合することが確認できた。曲物底板(1-W1・1-W2)、漆器碗(1-W3 図版20)は、井戸底面より出土している。これらの出土遺物は、概ね中世中頃から後半の時期を与えることができよう。



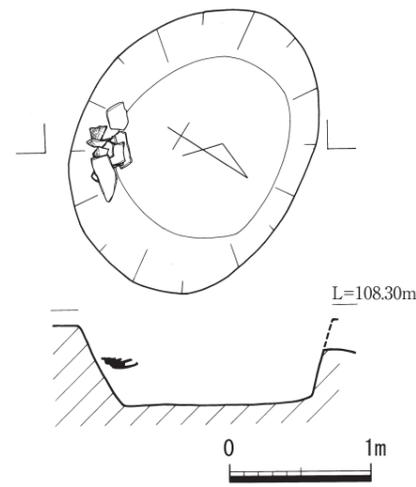
第9図 井戸1

2. 土坑

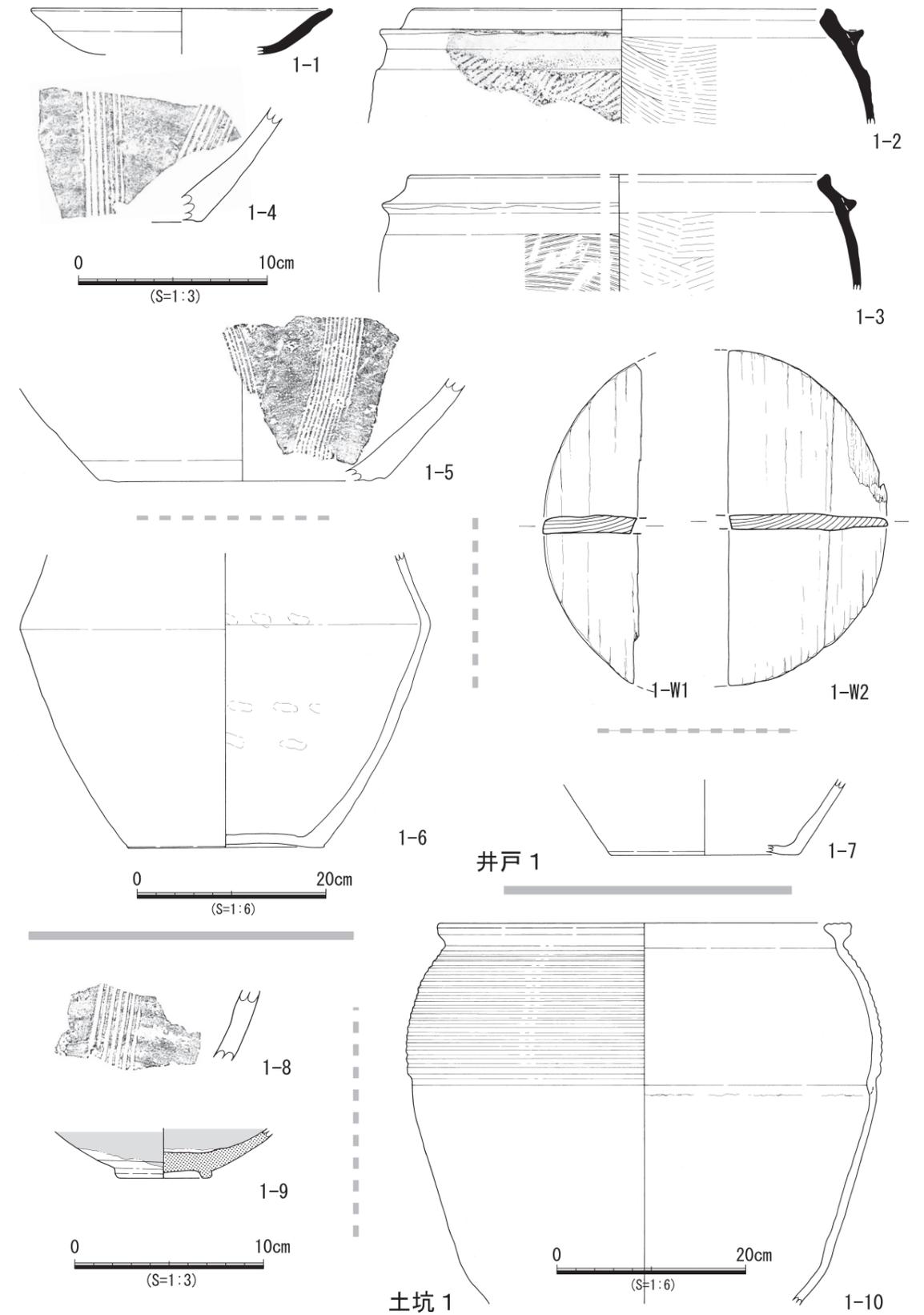
土坑1

井戸1の南方約2.5mに位置する土坑1は、1.6×2.0mの楕円形を呈し、深さ約60cmを測る。溝4と重複するが、土坑1の方が新しい。埋土から丹波焼甕(1-10)が折り重なるように出土している。丹波焼甕は口縁部を内面に肥厚させ、口縁部及び体部に多条の凹線を巡らせる。外面に赤土部を塗布している。

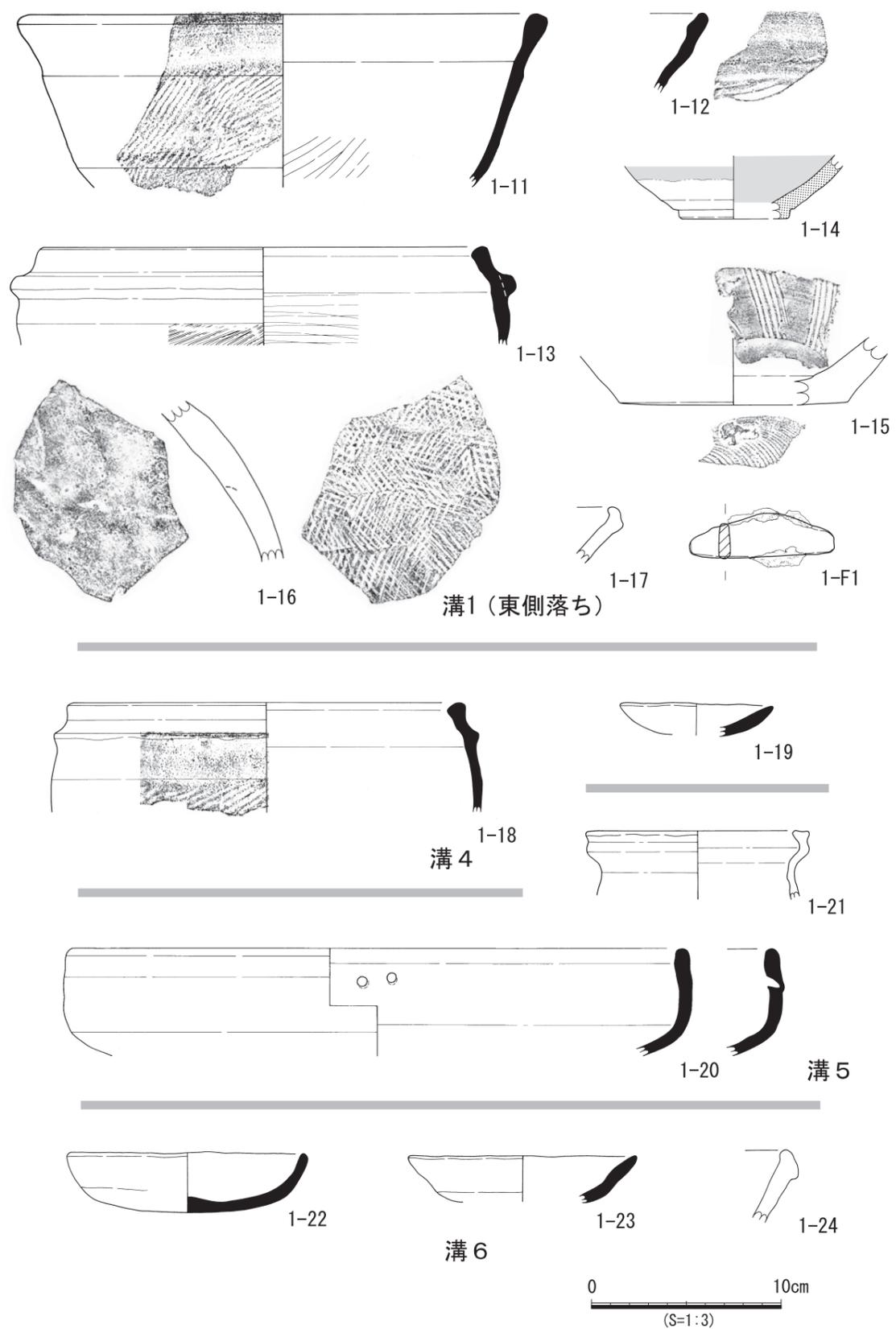
他に備前焼すり鉢(1-8)のほか、内外面に銅緑釉を施釉し、内面見込みを蛇の目状に釉剥ぎする肥前系陶器皿(1-9)が出土している。丹波焼甕及び肥前系陶器皿から17世紀後半～18世紀前半頃の所産と考えられる。



第10図 土坑1



第11図 第1区出土遺物(1)



第12図 第1区出土遺物(2)

土坑3・4

調査区の西端に位置する。土坑3は幅約2.2m、長さ約8m、深さ20cm以下の長方形気味の土坑である。このほぼ中央に1.4×1.7m、深さ約50cmの土坑4が重複している。両者の切り合い関係は明らかでない。出土遺物は中世と推定される土器細片が確認でき、また上述の通り井戸1出土遺物と接合関係にある遺物(1-4・1-7)が出土していることから、ほぼ同時期の所産であろう。

3. 溝

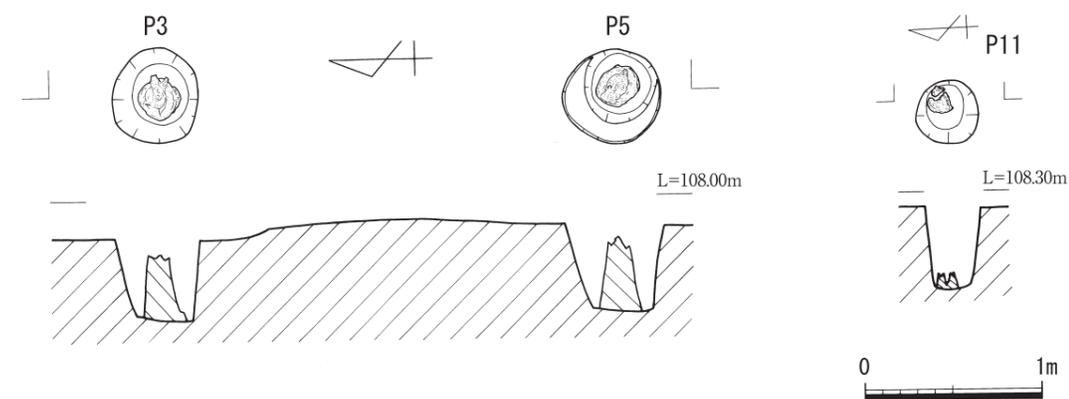
溝1は、調査区東端に位置し、南北に流路を有する。溝幅は0.9～1.3mで、西側上場から溝底までの深さは30～50cm、東側上場からの深さは10～15cmと浅くなり、段(東側落ち)に付随する溝となっている。

溝1埋土の灰色粘土からの出土遺物は皆無であるが、この東側落ちに堆積した土壌内からは中世中頃～後半を中心とする遺物が出土している。(1-11～1-13)は煮沸具の土鍋・土釜で、(1-14)は灰釉平碗で、須恵器甕(1-16)は外面に羽状叩きが施されている。用途不明鉄器(1-F1)は全長7.5cm、高さ2.3cm、最大厚0.6cmを測り、形状は火打金に似る。

溝4は井戸1の東側を取り巻くように南流する。幅0.5～2.0m、深さ20～50cmで南方ほど深い。埋土は上層に浅黄色砂質土、下層に褐灰色土である。出土遺物では中世中頃～後半の土釜(1-18)、土師器小皿(1-19)が図化できた。

溝5は調査区北辺からのびて幅0.6～0.8m、深さ約10cm、長さ約4mを測り、埋土は褐灰色砂質土である。出土遺物では18世紀頃の焙烙(1-20)、無釉陶器の火入れ(1-21)が図化できた。焙烙は内面から貫通しない2個一対の穿孔が施され、類例は姫路城跡¹⁾でも存在している。

溝6は調査区南辺からのびて幅約1m、深さ10～15cm、長さ約6.6mを測る。出土遺物では中世所産の土師器皿(1-22・1-23)、こね鉢(1-24)が図化できた。



第13図 P3・P5・P11

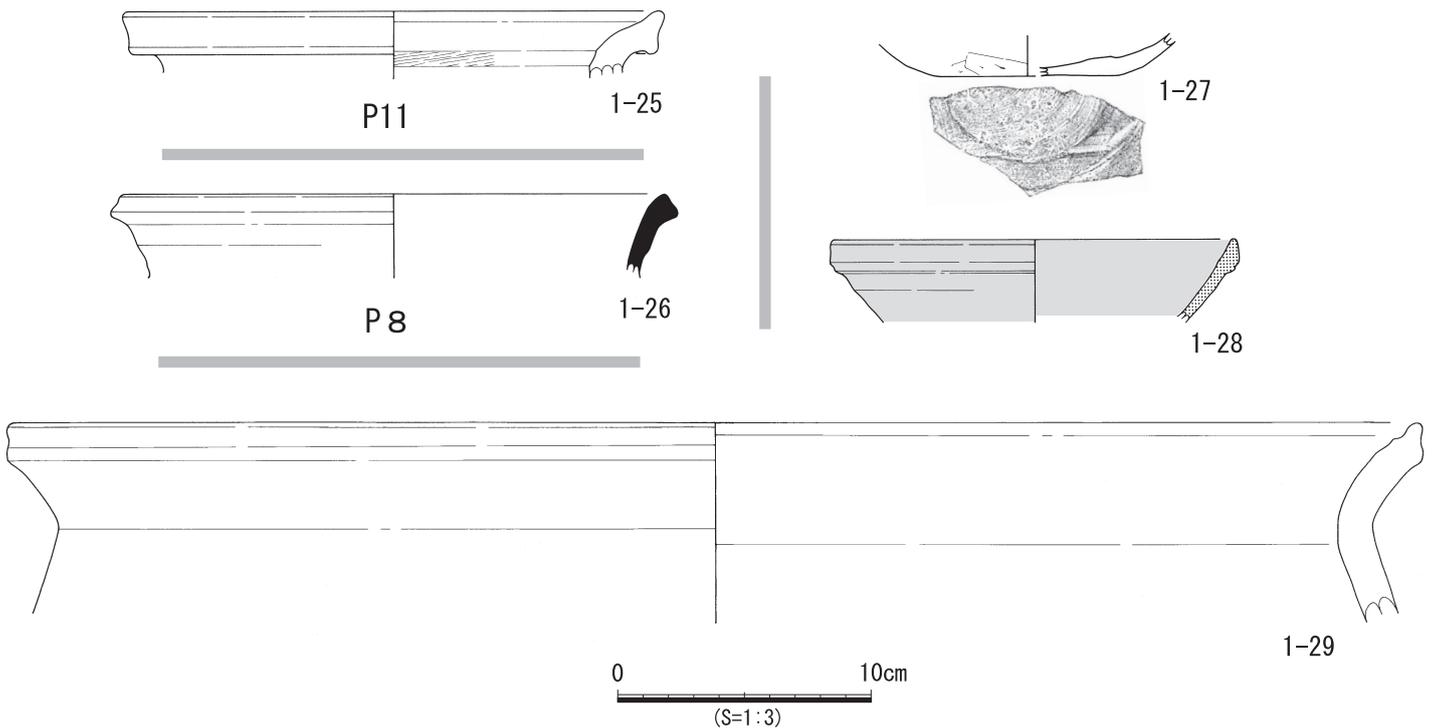
4. 柱穴群

調査区中央から東側を中心に 25 基以上の柱穴状遺構を確認している。東側落ち側に位置する P3 と P5 は径約 50 cm、深さ約 50 cm を測り、柱穴内に柱根が遺存していた。柱間が 2.6m で建物を確実に構成する柱穴と考えられるが、多くは調査区外に伸びる。P5 において中世の所産と考えられる土器細片が出土しているが図化できなかった。

P11 は径約 30 cm、深さ約 50 cm を測り、柱根が遺存する。埋土から須恵器甕 (1-25) が出土している。

出土遺物が確認できた柱穴では、いずれも中世と推定される土器片が出土している。P8 では土埴 (1-26) が図化できた。

第 1 区の遺構に伴わない出土遺物で図化できたのは、外面底側面に篋削りが施された須恵器山茶碗 (1-27)、白磁碗 (1-28)、須恵器甕 (1-29) である。

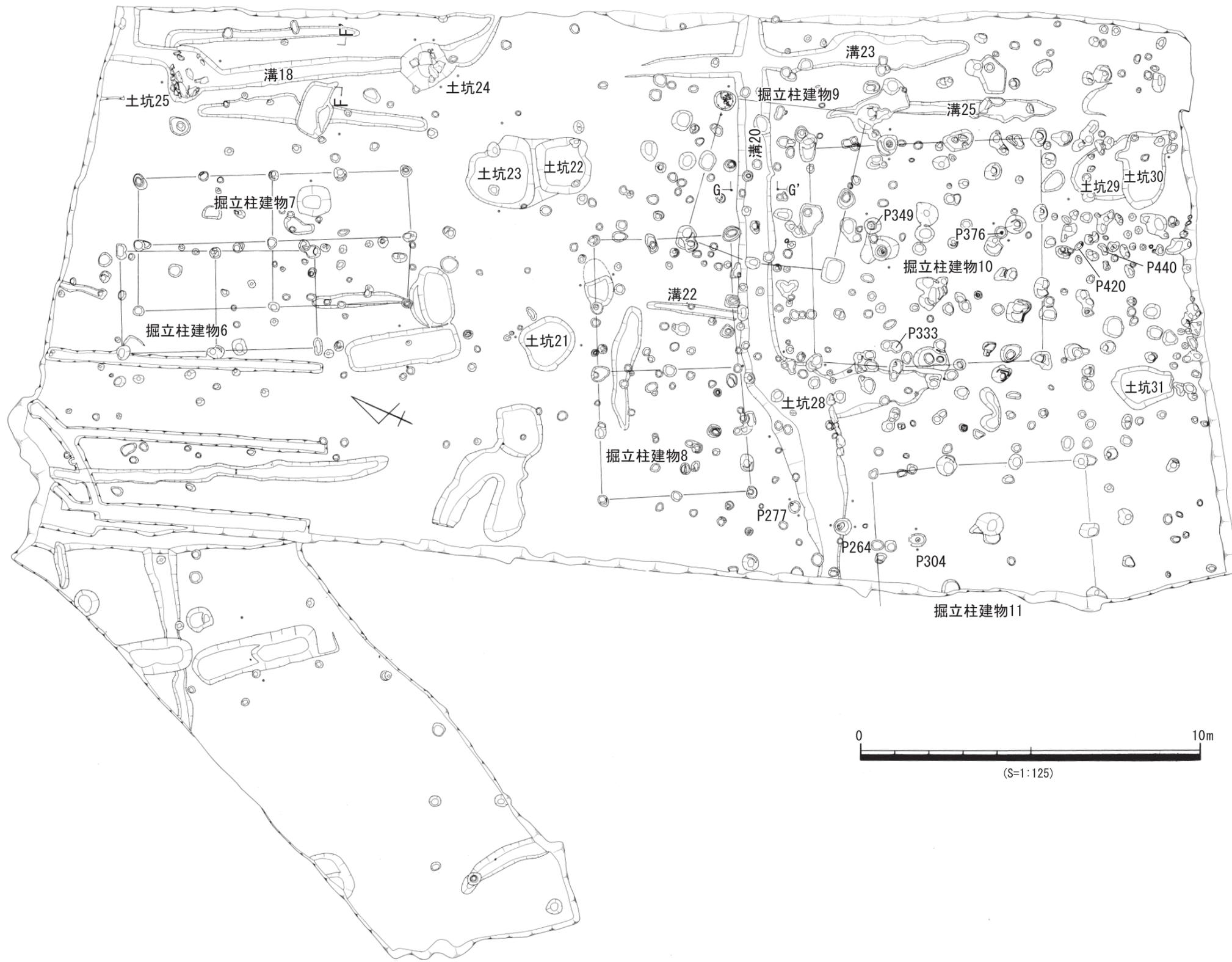


第14図 第1区出土遺物(3)

註 1) 第3区 SK05 出土焙烙 77 として記載されている。中川猛『特別史跡 姫路城跡 - 学校法人淳心学院整備事業に伴う発掘調査報告書 -』姫路市教育委員会 2007



第15図 第2区A遺構図



第16図 第2区B遺構図

IV 茂利・宮の西遺跡第2区

茂利・宮の西遺跡第2区は、不整形で東西に長さ約66mを測る第2区Aと、その東側に長方形気味で34×16mと南北に長い調査区第2区Bに大きく分けることができる。以下、主な遺構について概要を述べる。なお、遺構番号については煩雑さを避けるために、調査当時の番号を踏襲している。このため、遺構番号に欠番が生じることとなるが、ご了承願いたい。

1. 井戸

井戸1

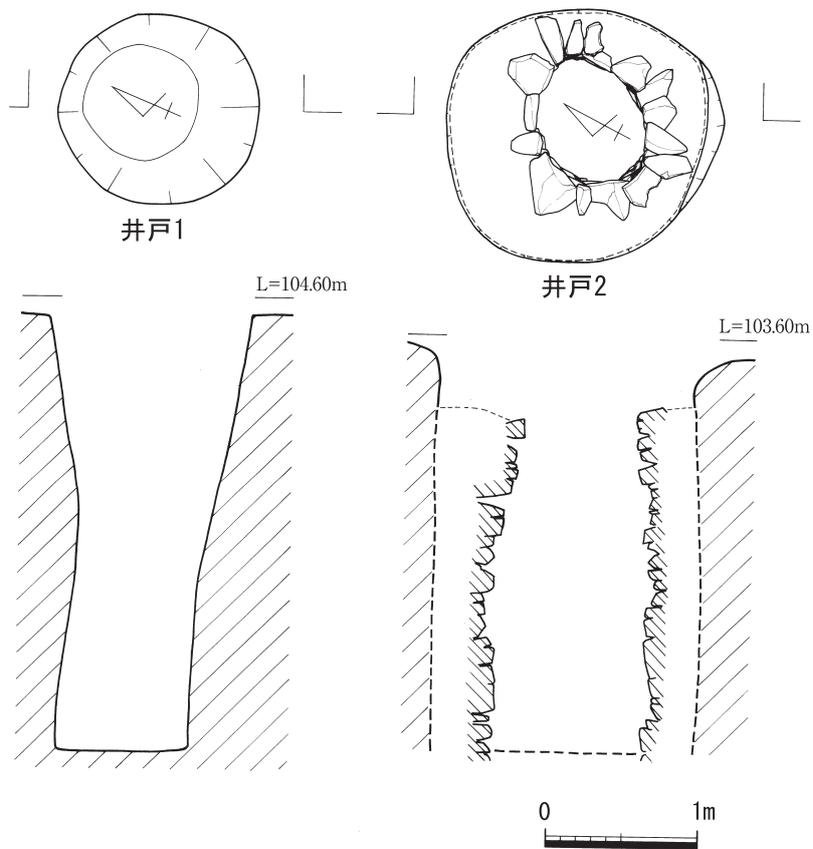
第2区Aの西端近くで、井戸1が検出されている。この井戸1の掘り方は円形で、径1.2×1.3m、深さ約2.95mを測る素堀の井戸である。井戸の検出面から約1.8mより下層には、オリーブ灰色粘土層が堆積する。

井戸1からの出土遺物は、土師器皿・小皿(2-1・2-2)、須恵器山茶碗(2-3)、残存長20cmで一方を削り込んで扁平に仕上げた用途不明木製品(2-W1)がある。(2-2・2-3)は井戸底面近くから出土している。出土遺物から中世前半の所産と考えられる。

井戸2

井戸2は、第2区Aの北辺中央付近に位置する。井戸の掘り方は円形で、径1.65×1.8mで、石積みの井戸枠が据えられている。調査は危険回避のため、検出面から約2.7mで中止した。

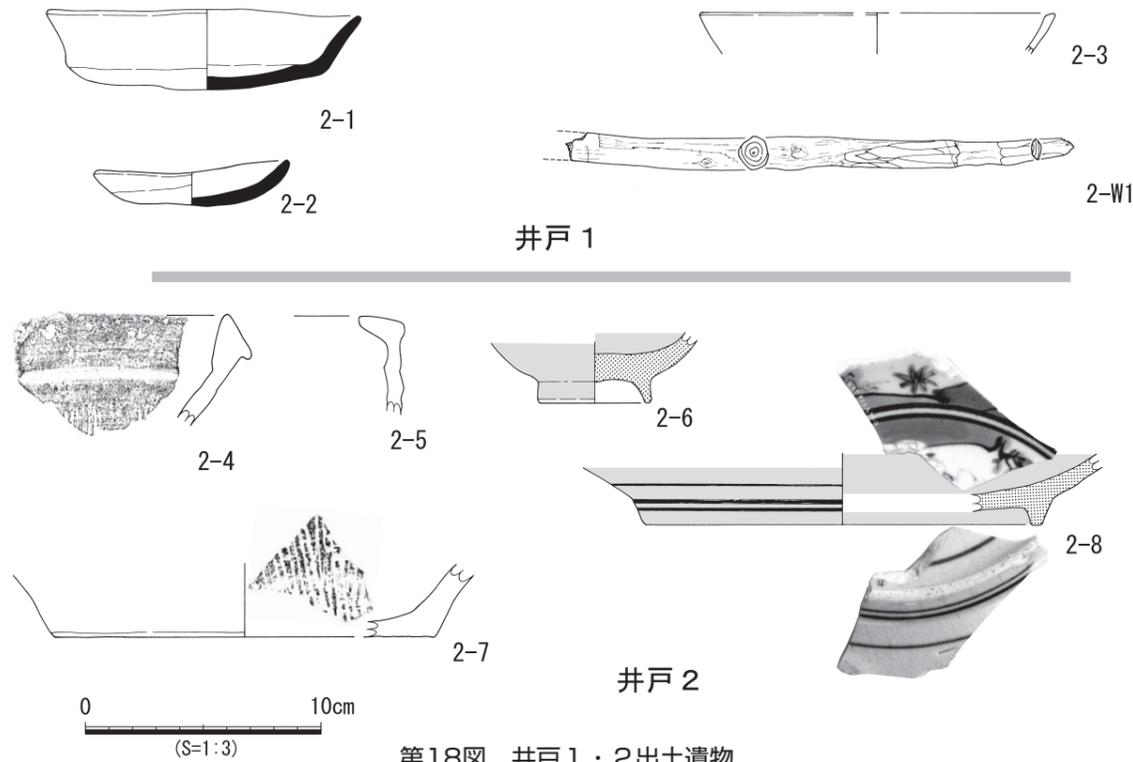
石組のプランは、検出面で0.7×0.9mの楕円形を呈する。0.2-0.5mの大きさの



第17図 井戸1・2

石材を積み上げており、石組上面から下約0.8mの範囲は山石、それより下約0.6m分は川原石、それ以下は川原石と山石を交えて積み上げており、一定の積み上げ工程を把握することができる。

17世紀後半～18世紀代の陶磁器(2-4～2-8)が出土している。



2. 溝

溝は第2区A及び第2区Bにおいて、25条以上を検出している。そのあり方は無秩序でなく、方向性があり、基本的に南北若しくは東西方向に流路を有している。

溝1

溝1は第2区Aで長さ約25m、最大幅2.2m、最深部0.5mを測り東西に流路を有する。第2区Bにおいても、約5m分についてその延長部分が確認できる。埋土は大きく2層に分層でき、上層が黒褐色粘質土、下層が黄灰色粘質土である。

遺物は京都系土師器皿(2-9～2-13)や土埴・土釜(2-14～2-16)等が出土しており、中世中頃を中心とする所産である。

溝2

溝2は第2区Aで、方形区画状を呈する溝で、東西の長さ約20m、折れ曲がった東辺の溝は長さ約7mで調査区外に伸びる。東西溝の東側では2条の溝が並列するようになっており、切り合い関係から内側の溝が新しいことが判明している。また、西辺の溝は土坑4と重なっている。

溝の最大幅は約90cm、深さ15～25cmを測る。埋土に炭・灰・焼土が多量に混じっている点が、この溝の性格を反映している。特に東西溝の西辺部分では、南から(区画内から)流れ込んだような炭の厚い堆積状況を確認できる。この溝2で囲まれた方形区画内には、掘立柱建物1～4が存在しており、建物を区画するための機能を有していたものと推測される。

遺物は皿類(2-20・2-21)、土釜(2-23～2-25)、瀬戸美濃系の灰釉陶器(2-27・2-28)等が出土しており、13～16世紀代の所産である。

溝4

溝4は第2区Aの溝が区画する内部を分割するように南北に流れる溝で、長さ約11mを測り調査区外に伸びている。最大幅1.0m、深さ10～20cmを測る。埋土は大きく2層に分層でき、上層が明黄褐色粘質土、下層が黄灰色粘質土である。溝2との交差部の堆積状況から、溝4の方が新しいことが理解できる。

遺物は土師器こね鉢(2-29)、白磁多角坏(2-30)等が出土しており、15世紀頃を中心とする所産である。

溝5

溝5は第2区A南辺に沿って検出された東西に走る溝で、溝2西流路及び溝4と重複する。西端は土坑4と重複し、東端はT字型を呈する。長さ約19m、最大幅約1.5m、深さ15～30cmを測る。溝4との新旧関係は、溝5が古いことが判明している。

遺物は土埴(2-31)、土師器小皿(2-32)等が出土しており、15世紀頃を中心とする所産である。

溝10・溝11

溝10と溝11は、第2区A南東部で東西に並行して検出された。双方の間は約20cmの距離しかない。

溝10は長さ約9m、最大幅約0.6m、深さ10～15cmを測る。埋土は黒褐色粘質土である。溝内からは、奈良時代末～平安時代初頭の蓋坏(2-33～2-36)が出土している。

溝11は長さ約10.5m、最大幅約1.1m、最深部の深さ約50cmを測る2段掘りの溝である。溝内には、褐灰色粘質土を中心とする埋土と地山がブロック状に堆積している。溝内からは平安時代末頃の土師器皿(2-37・2-38)、須恵器山茶碗(2-39・2-40)が出土している。

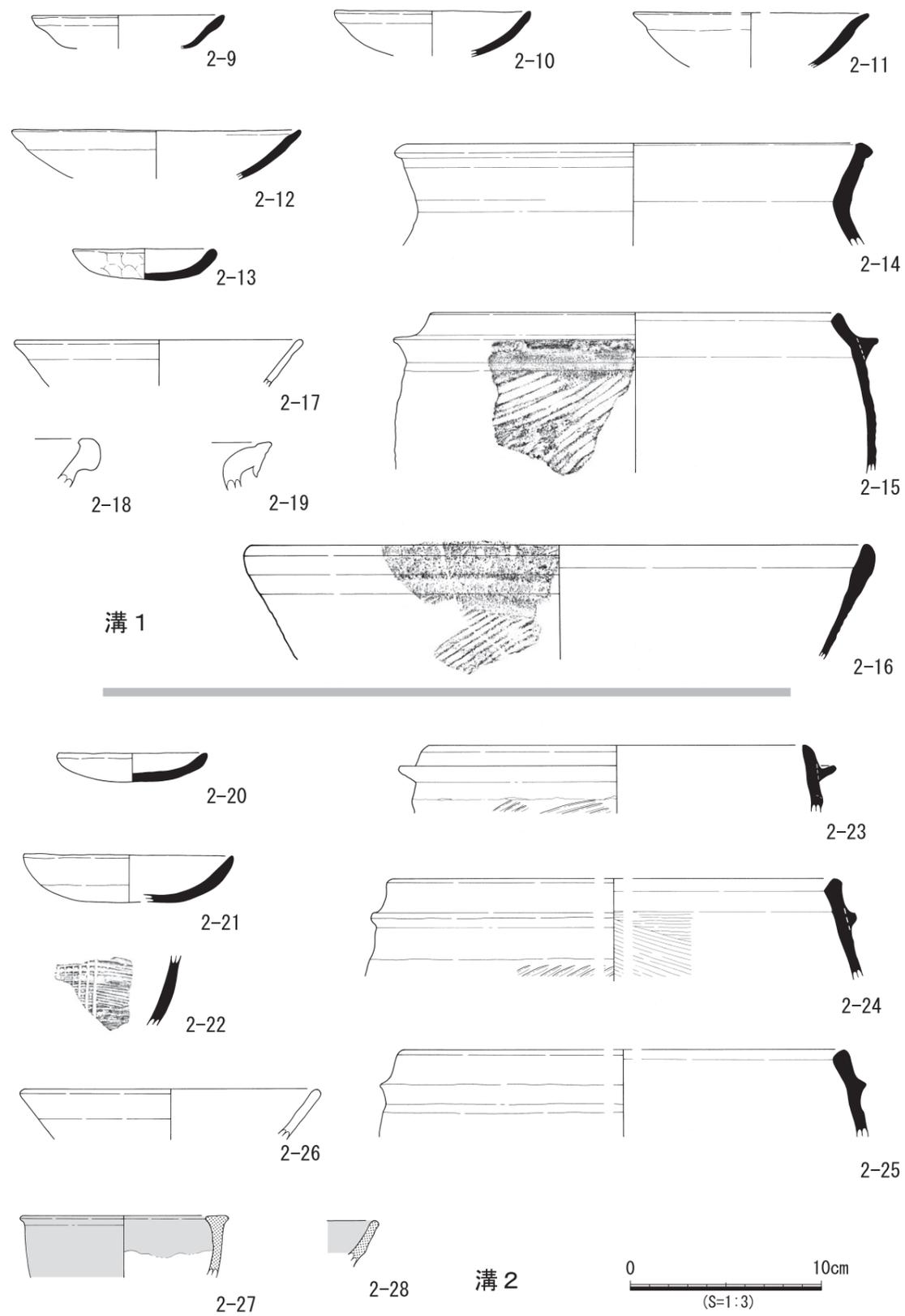
なお、溝10・溝11の検出作業時に、(2-41～2-46)の遺物が上面で出土しており、双方の溝に関係する遺物である可能性が高い。

溝12

溝12は第2区Aに位置し、溝2東辺の約2m東で南北に延びる細長い溝である。長さ約7.5m、深さは10cm未満である。出土遺物では青磁碗(2-47)が図化できた。

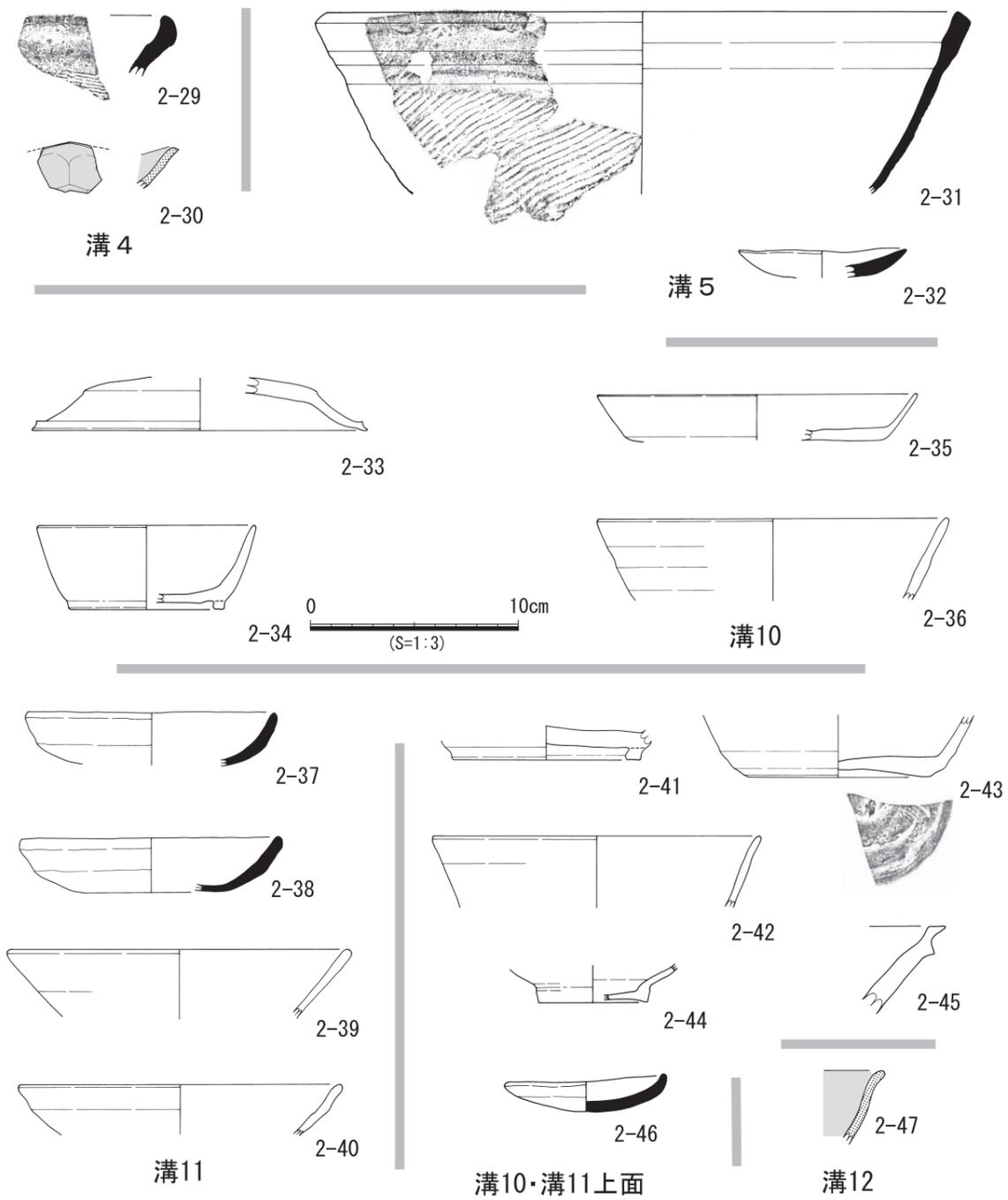
溝18

溝18は第2区Bの北東隅を南北に流路を有する溝である。長さ11m以上、幅0.4～0.6m、深さ約20cmを測り、埋土は上層が灰黄褐色粘質、下層が暗灰黄色砂質土が堆積し、特に下層にお

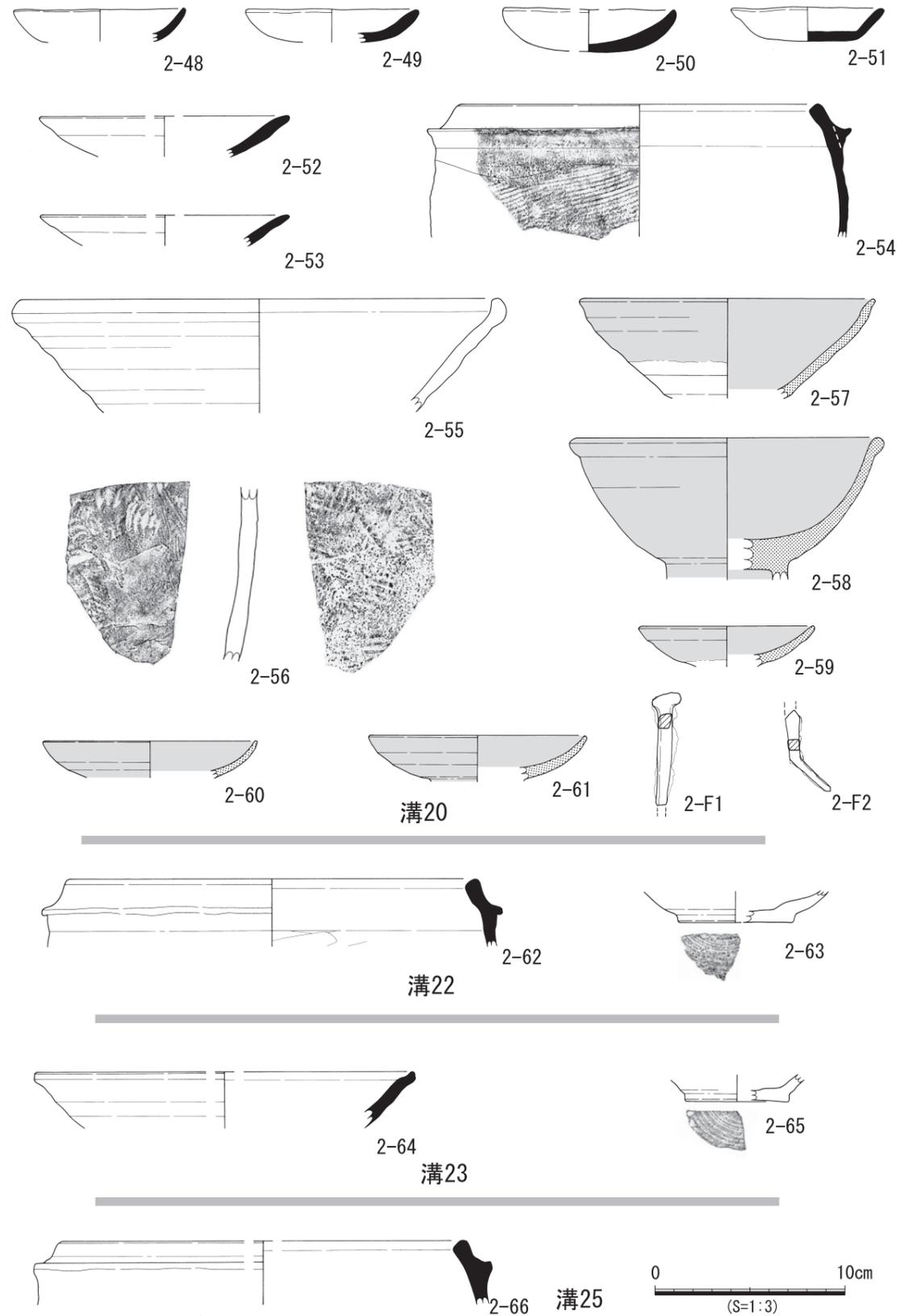


第19図 溝出土遺物(1)

いて多量の炭・焼土が包含している。溝の南側で土坑 24、北側では土坑 25 と重複し、埋土に炭や焼土を包含している点に共通点があるが、溝 18 との具体的な関係は明らかでない。出土遺物には鋳型片（図版 28 上）が多量に出土しているものの、土器は中世の所産と推定されるものが少量出土し図化できるものはなかった。



第20図 溝出土遺物(2)



第21図 溝出土遺物(3)

溝 20

溝 20 は第 2 区 B の中央よりやや南側を、東西に流路を有し調査区外に伸びる溝である。溝は東端で溝 23 と交差し、西寄りでは舌上に張り出す土坑 28 と接する。土坑 28 との境界部には 5 石の配石がなされ、その中には最大長約 50 cm の石も存在している。溝自体は長さ約 17 m 以上、最大幅約 1.5m、深さ 10 ~ 20 cm を測る。埋土は大きく 2 層に分層でき、上層が灰黄褐色土若しくは浅黄色土、下層が灰 (黄褐) 粘質土となり、上層と下層の間に灰・炭層が堆積している部分もある。

遺物は土師器小皿 (2-48 ~ 2-51)、京都系土師器 (2-52・2-53)、灰釉平碗 (2-57)、青磁碗・白磁皿 (2-58 ~ 2-61)、鉄釘 (2-F1・2-F2) 等が出土しており、15 世紀代を中心とする所産である。

溝 22

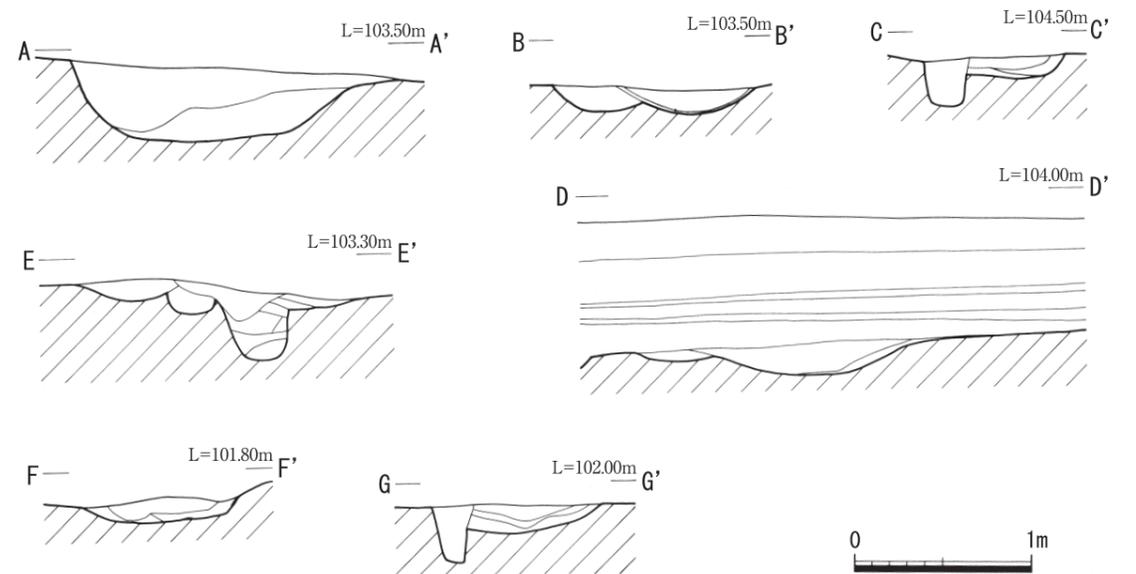
溝 22 は第 2 区 B に位置し、溝 20 のほぼ中央部から北に延びる溝である。長さ約 3.3 m、幅約 0.3 m、深さ約 10 cm を測り、埋土は褐灰色粘質土である。溝内から土釜 (2-62) と須恵器山茶碗 (2-63) が出土している。

溝 23

溝 23 は、第 2 区 B の東端近くを南北に走る溝で、溝 20 と交差する。長さ約 10m、最大幅約 1m、深さ 10 ~ 15 cm を測る。出土遺物では、手の字状口縁を有する京都系の土師器皿 (2-64) と須恵器山茶碗 (2-65) が図化できた。平安時代中期の所産と考えられる。

溝 25

溝 25 は第 2 区 B で、溝 23 の西約 1m を南北に流路を有する溝である。長さ約 5.5m、最大幅約 0.7m、深さ約 10 cm を測る。出土遺物では土釜 (2-66) が図化できた。



第22図 溝断面図

3. 土坑

土坑は第2区A及び第2区Bにおいて、30基以上を検出している。主な土坑について、以下概述する。

土坑1

土坑1は第2区Aに位置し、5.6×2.1mの不整形な長方形を呈し、深さは約20cmを測る。埋土は上層が暗灰黄色粘質土、下層が20cm大の礫を含む黄灰色粘質土である。

遺物は土釜(2-67)、土錘(2-68)、須恵器こね鉢(2-69)、丹波焼甕(2-70)、備前焼壺(2-71・2-72)等がある。備前焼(2-72)は、16世紀前半頃の所産と考えられる。

土坑4・土坑8

土坑4と土坑8は第2区Aの南西隅に位置する。土坑4は径約3m、深さ約35cmを測り、溝2と溝5と交差するが、有機的な関係があるかは明らかでない。遺物は中世と考えられる土器細片が出土しているが、図化できなかった。

土坑8は土坑4の東隣に位置し、0.8×1.6mの不整形な長方形を呈する。深さは約15cmを測る。出土遺物は少ないが、中世中頃の土師器小皿(2-73)が図化できた。

土坑9

土坑9は第2区Aの溝1の南際に位置し、2.3×2.5mの歪んだ円形を呈し、深さは約20cmを測る。埋土は上層が灰黄褐色粘質土、下層が黄灰色粘質土で若干焼土や炉壁片が混じる。出土遺物では、土釜(2-74)と18世紀後半の寿寿文の染付碗(2-75)が図化できた。

土坑10

土坑10は第2区Aで土坑9の南西約3mに位置し、溝2と重複している。1.8×3.5mの不整形を呈し、深さは約45cmを測る。丹波焼すり鉢(2-76)、18世紀後半頃の赤絵染付碗(2-77)、丸瓦(2-78)の近世所産の土器類のほか、石臼片(2-S1)が図化できた。

土坑21

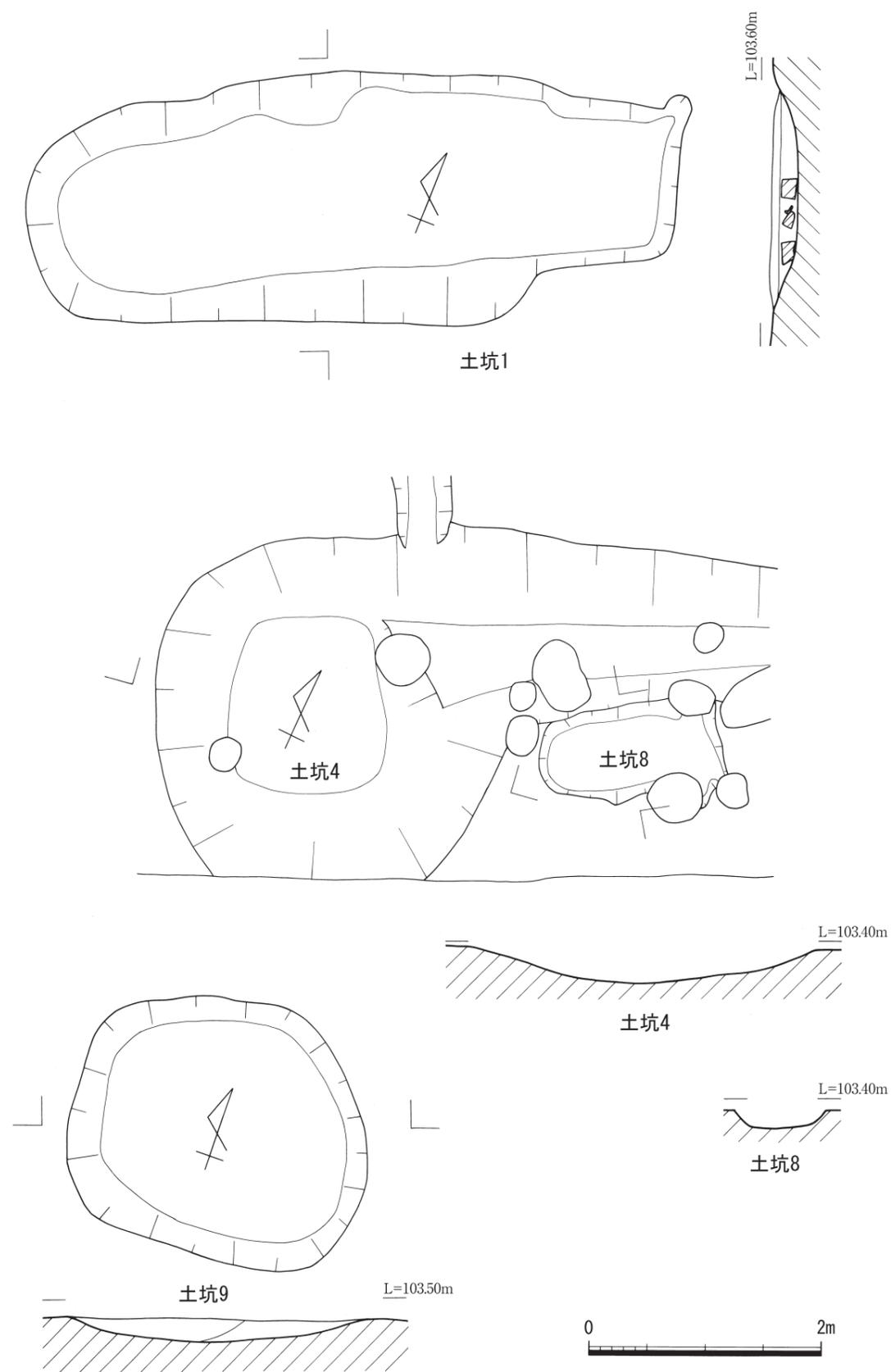
土坑21は第2区Bのほぼ中央付近に位置し、径約1.7mの不整形な土坑で、深さは約20cmを測る。埋土は浅黄色土と黄灰色土のブロック層で、中世の遺物が出土しており、16世紀代の端反りの白磁皿(2-79)が図化できた。

土坑22・土坑23

土坑22・土坑23は第2区Bの土坑21の東約3.5mに位置する。2つの土坑は隣接し、南側が土坑22、北側が土坑23である。

土坑22は一辺約1.7mの隅丸方形を呈し、深さ約20cmを測り、埋土は上層が浅黄色土、下層が黄灰色砂質土である。古代～中世の土器が少量出土しているものの、図化できたのは須恵器坏(2-80)である。

土坑23は径約2mの不整形な形で、深さは約30cmを測る。埋土は大きく3層に分層でき、1

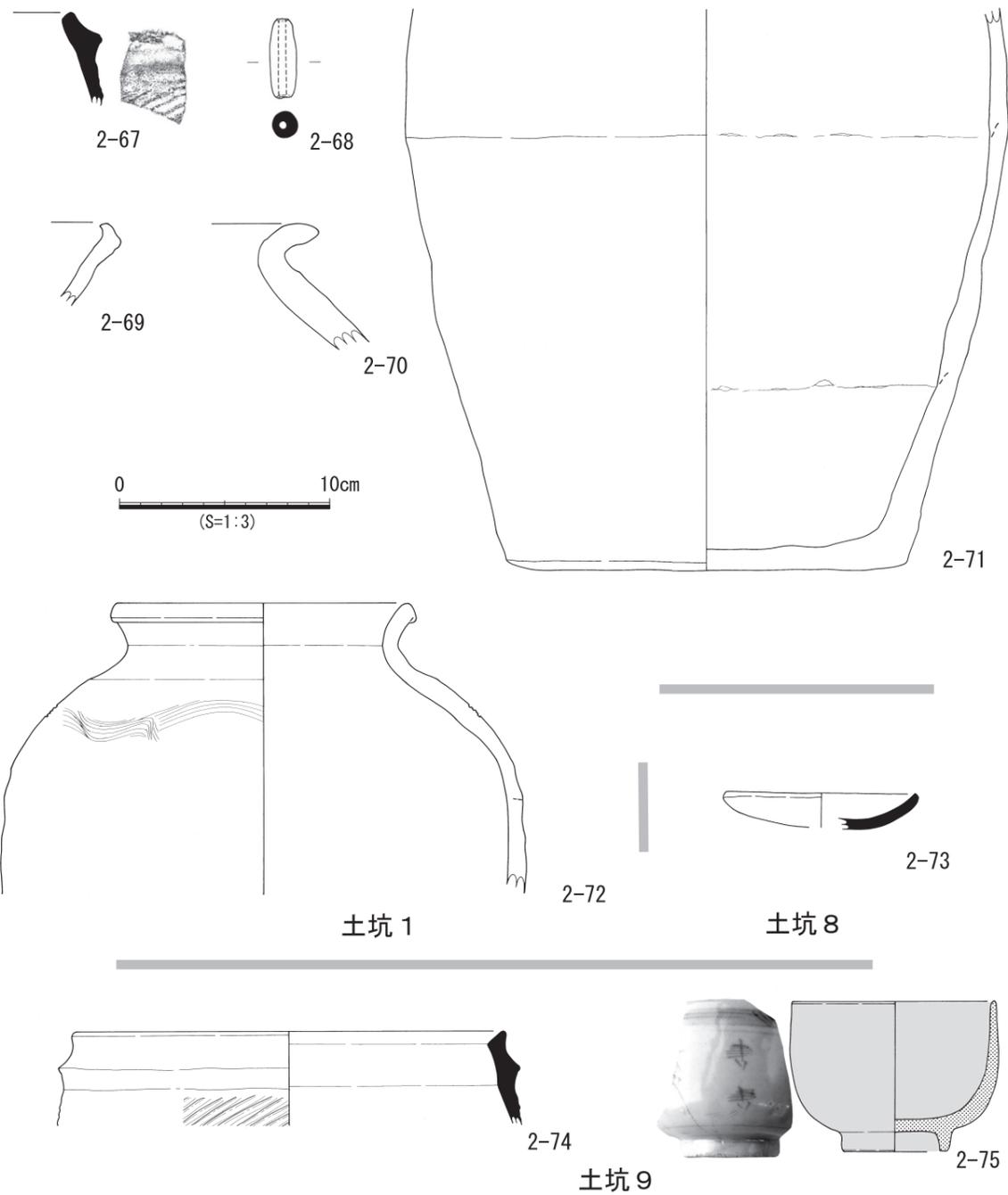


第23図 土坑1・4・8・9

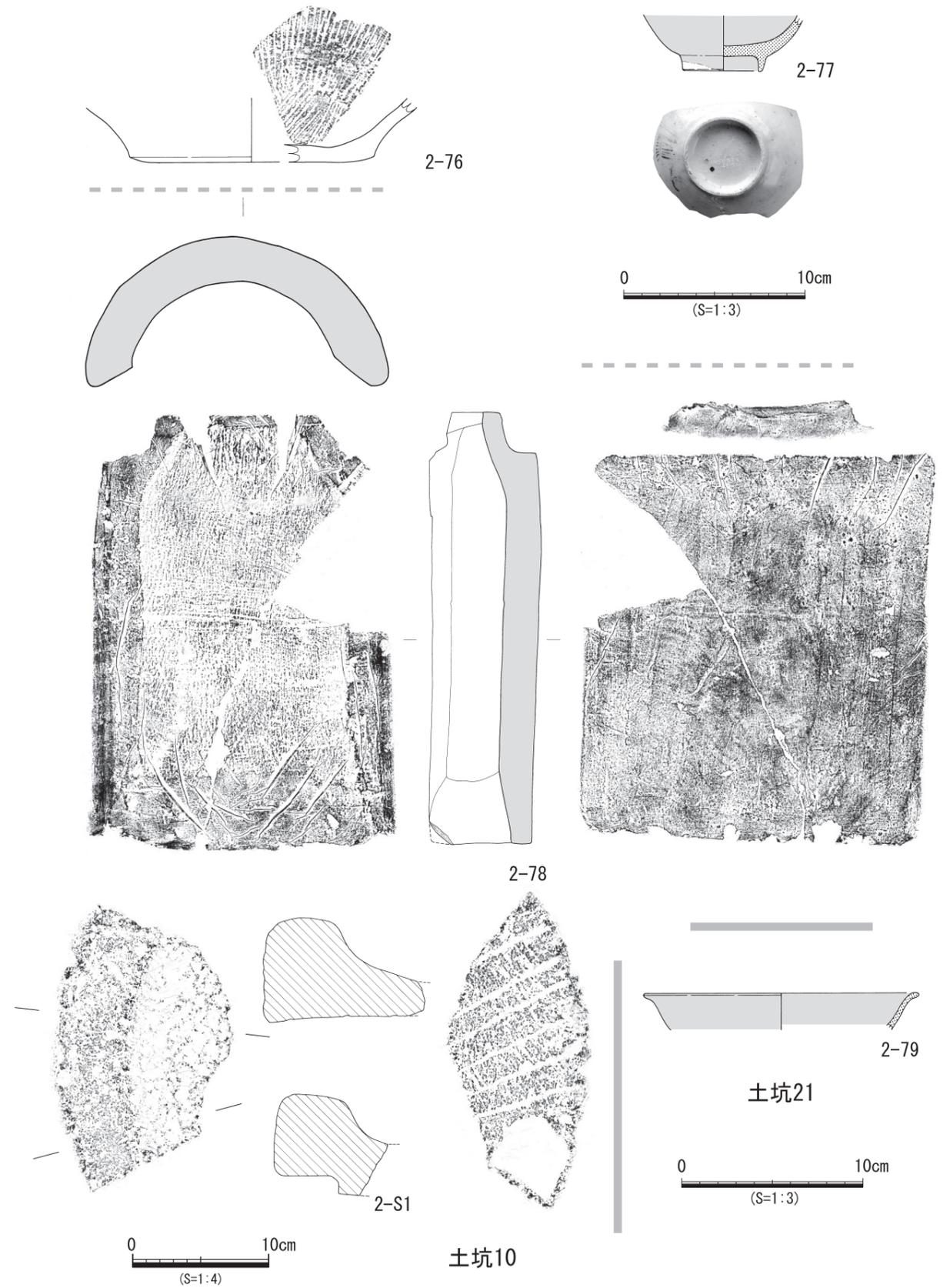
層は浅黄色土に灰黄色土が混じるブロック層で約 40 cm 大の石を含む。2層が灰黄褐色土、3層が土坑底面に薄く広がる灰色砂層である。遺物は中世土器数点と溶解炉片（図版 19 中右）が出土しているが、図化できなかった。

土坑 24・土坑 25

土坑 24・土坑 25 は第 2 区 B 北東隅に位置し、溝 18 によって繋がっている。南側が土坑 24、



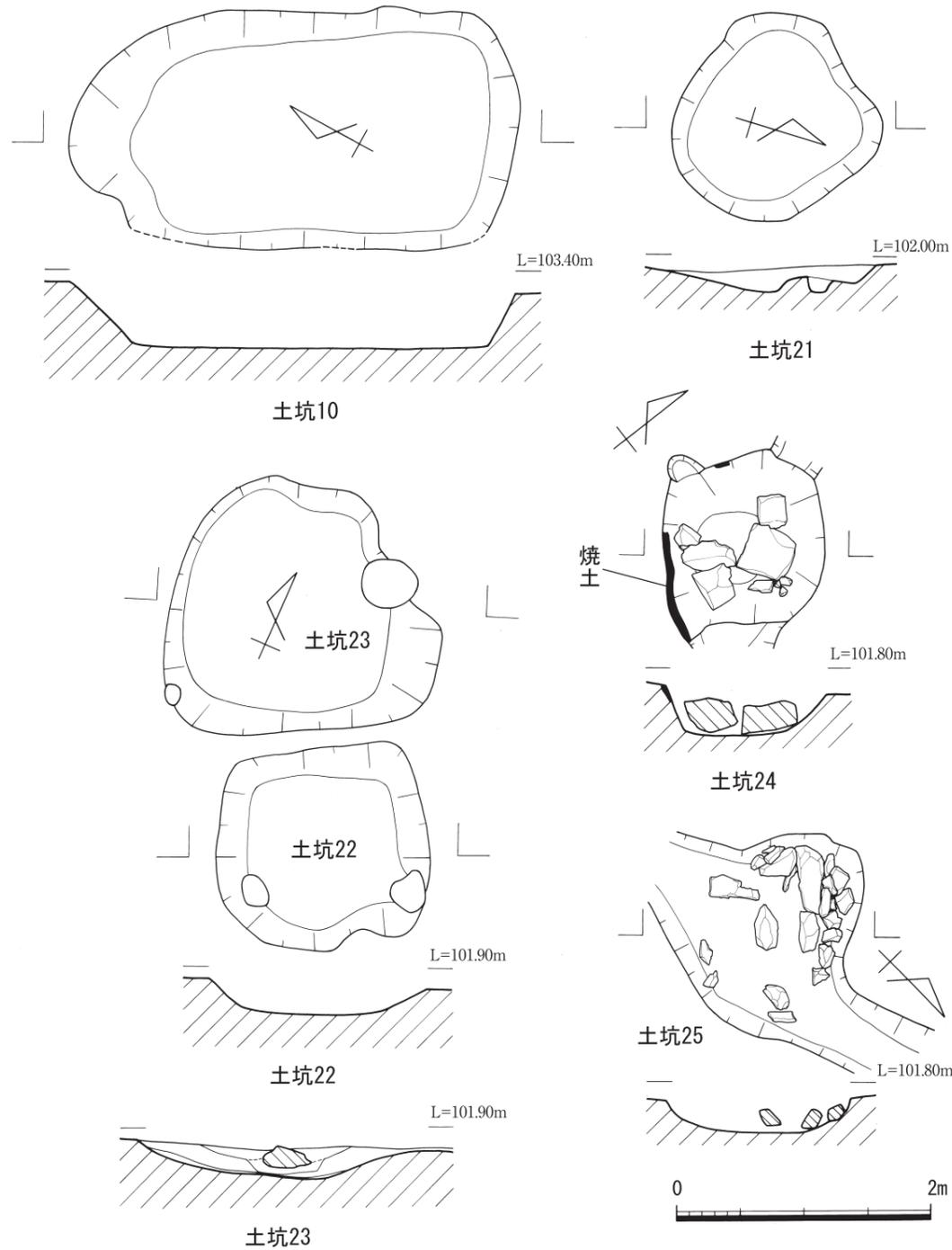
第24図 土坑出土遺物(1)



第25図 土坑出土遺物(2)

北側が土坑 25 である。

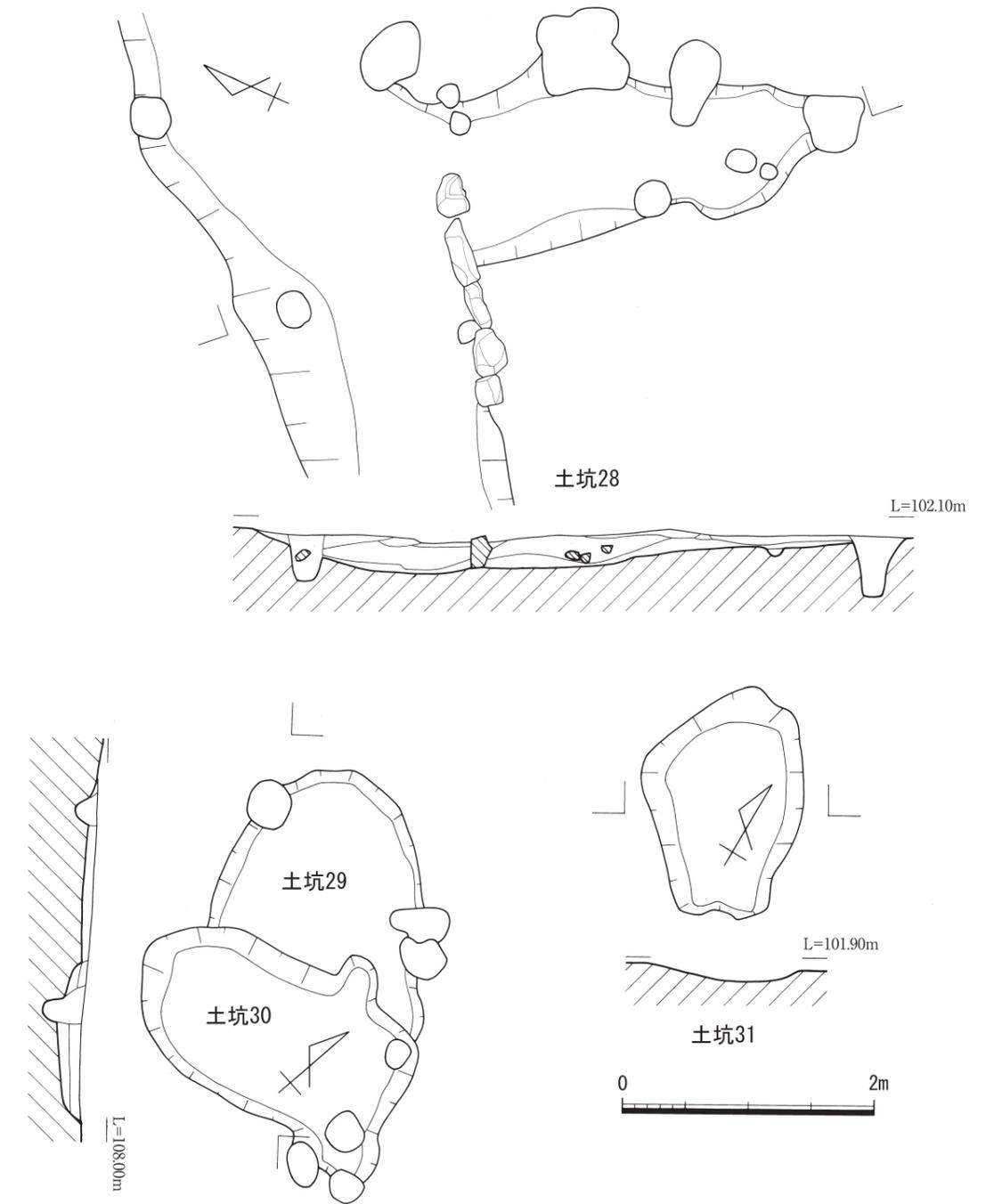
土坑 24 は一辺約 1.3m の隅丸方形気味の土坑で、深さ約 40 cm を測り、内部からは 20 ~ 40 cm 大の石が比較的多く検出されている。埋土には焼土・炭・灰等が集中して存在する部分があるものの、基本的に上層が黒褐色粘質土で、下層にかけて漸移的に灰色砂質土に変化している。ま



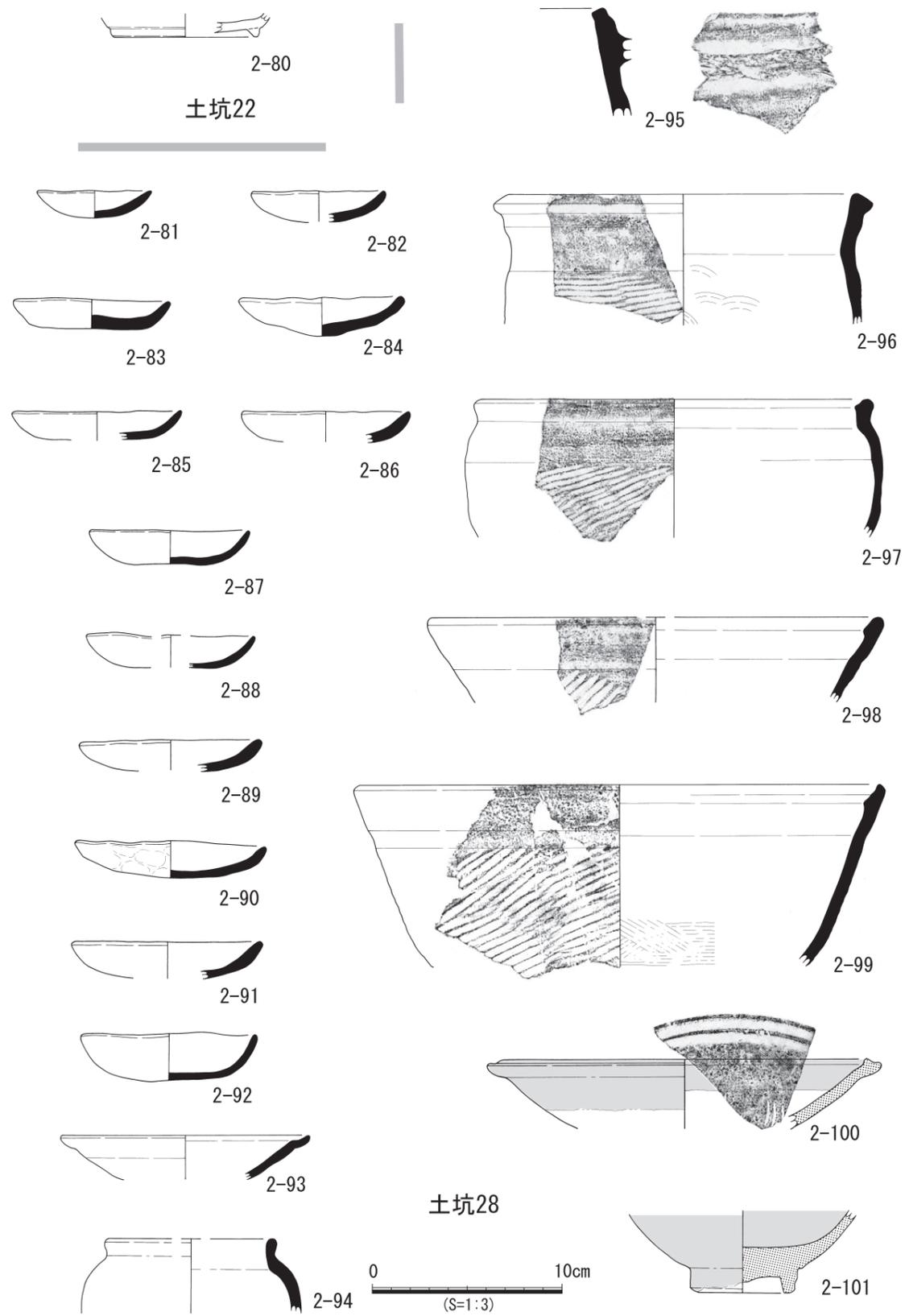
第26図 土坑10・21~25

た土坑法面に焼土が看取できる部分もあり、この土坑で火を使用した作業が行われたのは疑いない。一定量の鋳型片（図版 19 中右）のほかに、古代~中世の土器が数点出土しているものの、図化できなかった。

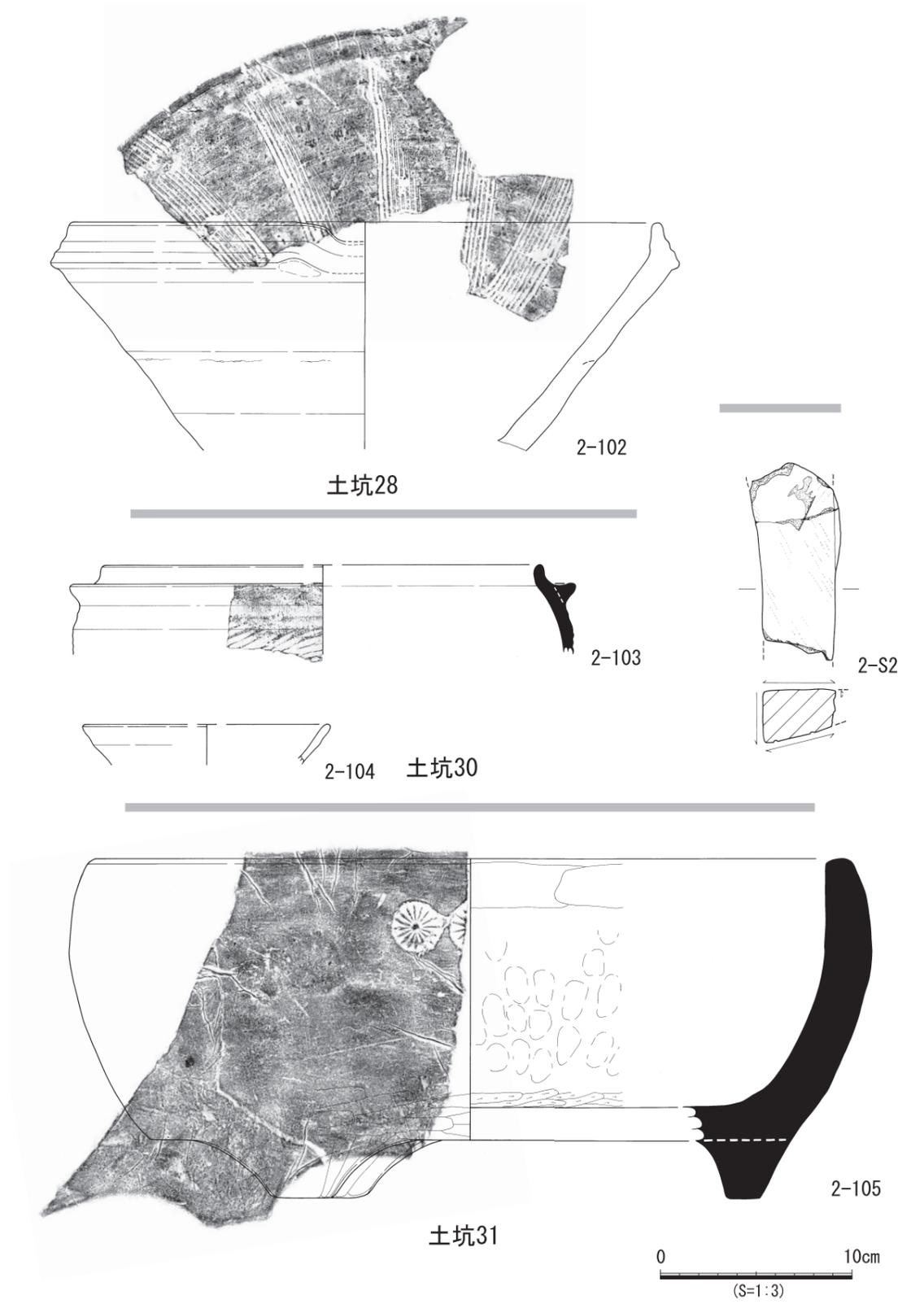
土坑 25 は径約 1.6m の不整形な形で、深さは約 25 cm を測る。土坑内には 15 ~ 50 cm の石が存在している。埋土からは溶解炉片が出土しているが、土器等の出土はない。



第27図 土坑28~31



第28图 土坑出土遺物(3)



第29图 土坑出土遺物(4)

土坑28

舌状を呈する土坑28は、第2区Bのほぼ中央の南を東西に流路を有する溝20と重複する。確認できた遺構の切り合い関係では、土坑28埋没後溝20が形成されたと考えられる。両遺構の境には、溝20に伴うと推定される配石が存在している。長さは径約3mで、最深部の深さは約25cmを測る。埋土は大きく3層に分層でき、1層は少量の焼土と炭・灰が混じる暗灰黄色土、2層は浅黄色土、3層は黒褐色粘質土で、多量の中世の遺物が出土している。

出土遺物は、ある程度まとまって出土している。土師器小皿(2-81～2-92)は外面が未調整のタイプ、(2-93)は京都系土師器皿である。土師器の大海形茶入(2-94)は貝野前遺跡¹⁾で類例が出土している。(2-95～2-99)は土埵等の煮沸具、(2-100)は灰釉陶器おろし皿、(2-101)は青磁碗である。青磁碗(2-101)は中世前半の所産であるが、備前焼すり鉢(2-102)の時期が示すように、概ね15世紀を中心とする所産であろう。

土坑29・土坑30

土坑29・土坑30は第2区B南東隅に位置し、双方の土坑は重複している。遺構の切り合い関係からは、土坑30が新しい遺構と判断できる。

土坑29は最大長約1.6m、深さ約10cmを測り、埋土は焼土・炭・灰が多量に混じる灰黄褐色土である。鋳型の一部と考えられる小片と平安時代末～中世の土器が数点出土しているものの、図化できなかった。

土坑30は径1.3×2.3mの楕円形気味の土坑で、深さは約20cmを測る。埋土は上層に少量の焼土・炭・灰が混じる暗灰黄色土、下層が暗灰黄色土に浅黄色粘質土がブロック状に混じる土層である。鋳型片とともに古代～中世の遺物が出土しており、土釜(2-103)、須恵器山茶碗(2-104)、2次焼成を受けた砂岩製砥石(2-S2)が図化できた。

土坑31

土坑31は土坑30の西約4.6mに位置する。径1.3×1.9mの不整形な土坑で、深さは約15cmを測る。埋土は浅黄色粘質土に灰色粘質土混じる。中世の遺物が出土しており、瓦質火鉢(2-105)が図化できた。

4. 掘立柱建物及び柱穴群

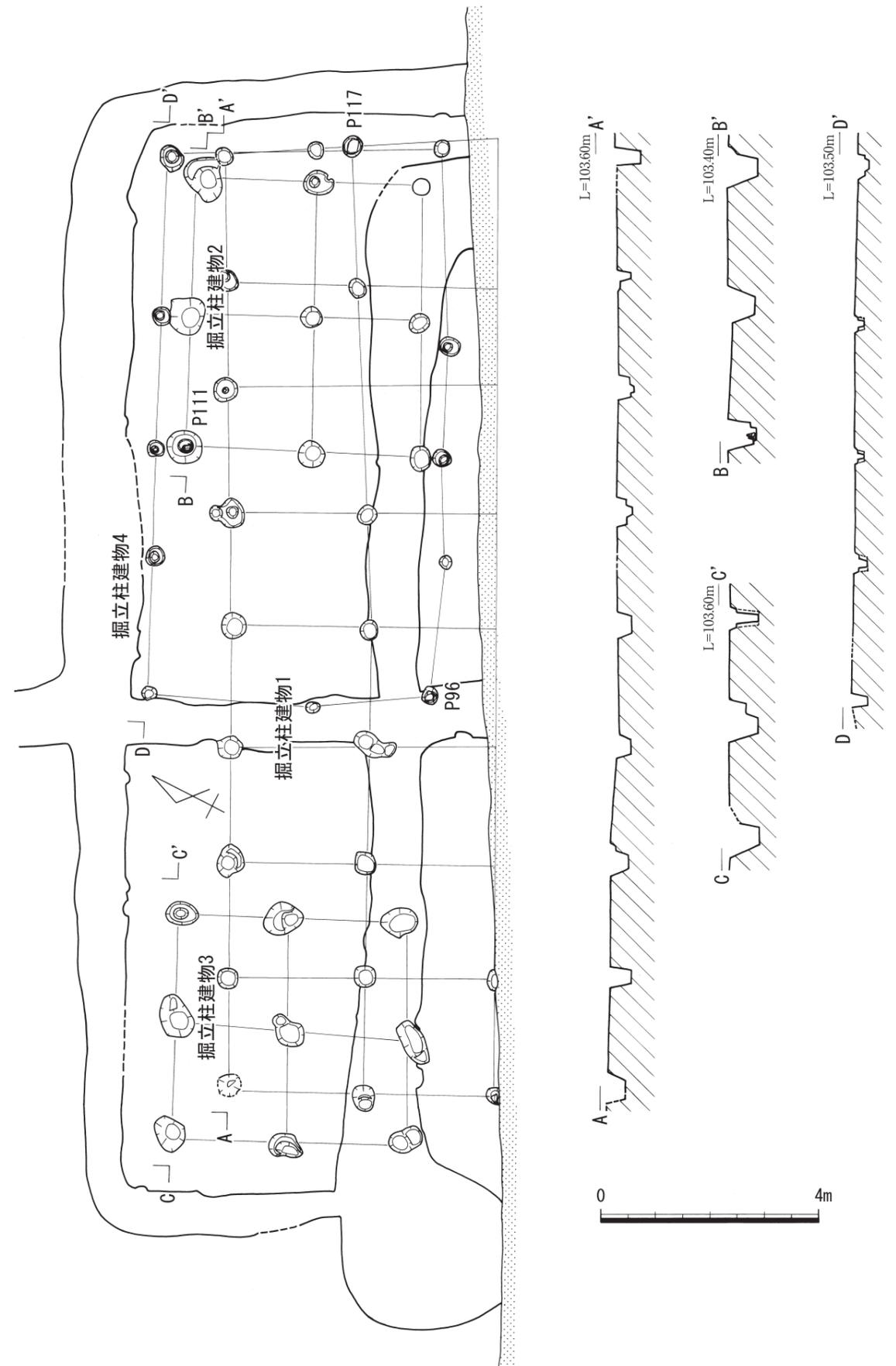
第2区調査区内では1,000基以上の柱穴を検出している。以下掘立柱建物を復元できた柱穴群と特徴的な柱穴について、第2区Aと第2区Bに分けて概述する。

【第2区Aの掘立柱建物と柱穴群】

掘立柱建物1～掘立柱建物4

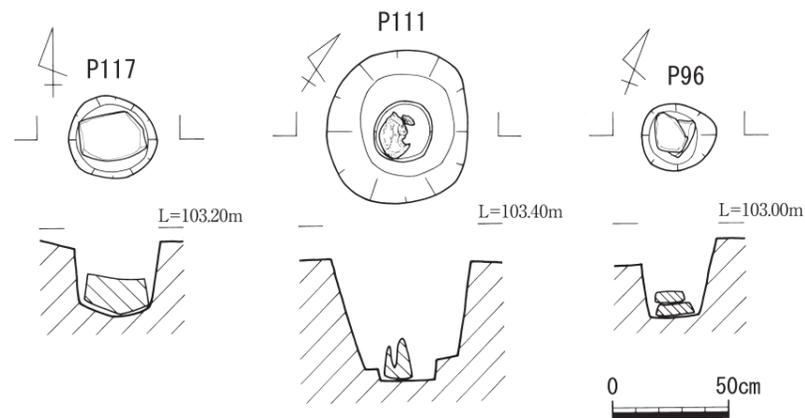
掘立柱建物1～掘立柱建物4は、溝2によって区画された範囲内に存在する。

掘立柱建物1は、2×8間(5.0×17.2m)以上の規模を有する長大な建物である。柱穴径25



第30図 掘立柱建物1～4及び区画溝

～50 cm、深さ10～50 cmを測る。P117の底部には、厚さ約15 cmの石が据えられている。各柱穴内から中世所産の土器が出土しているが、図化できたのは土師器皿(2-106)のみである。



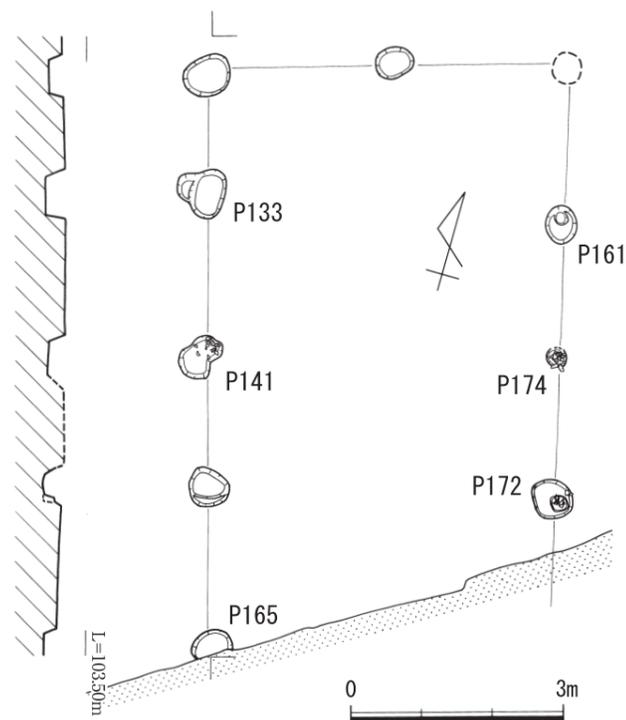
第31図 P117・P111・P96

掘立柱建物2は、溝2の区画内の東側に位置し、2×2間(4.3×5.0m)以上の規模を有する総柱建物である。柱穴径35～70 cm、深さ20～55 cmを測る。P111の底部には、柱材(樹種クリ)の一部が遺存していた。各柱穴内から中世所産の土器が出土しているが、図化できた遺物はない。

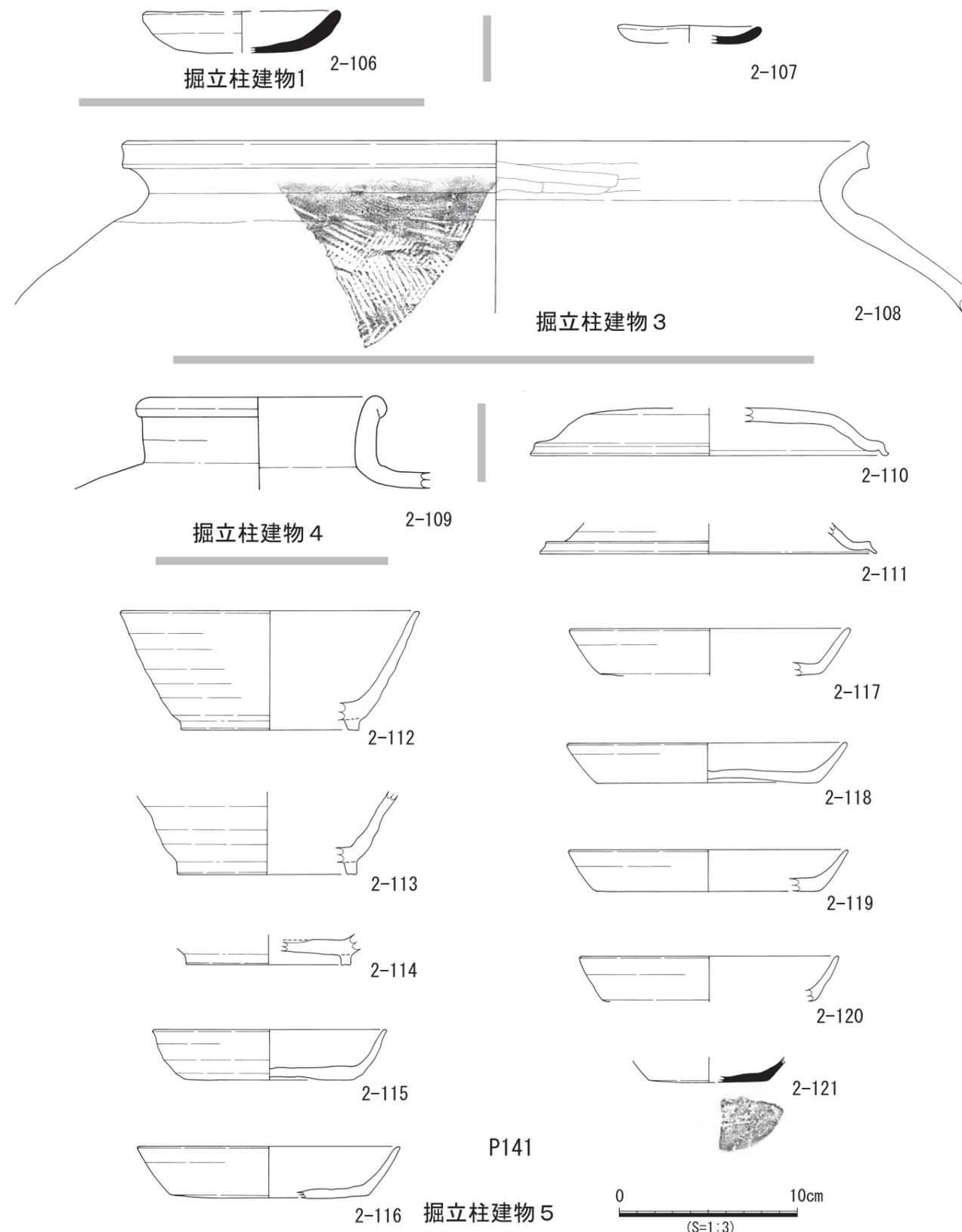
掘立柱建物3は、溝2の区画内の西側に位置し、2×2間(4.0×4.0m)以上の規模を有する総柱建物である。柱穴径40～80 cm、深さ10～55 cmを測る。多くの柱穴内から中世所産の土器が出土しているが、土師器小皿(2-107)、須恵器甕(2-108)が図化できた。

掘立柱建物4は、2×4間(5.0×9.8m)以上の規模を有する建物で、掘立柱建物1・2と重複している。柱穴径20～40 cm、深さ15～30 cmを測る。P96の底部には、扁平な石が2石重ねて据えられている。多くの柱穴内から中世所産の土器が出土しているが、図化できたのは備前焼壺(2-109)のみである。

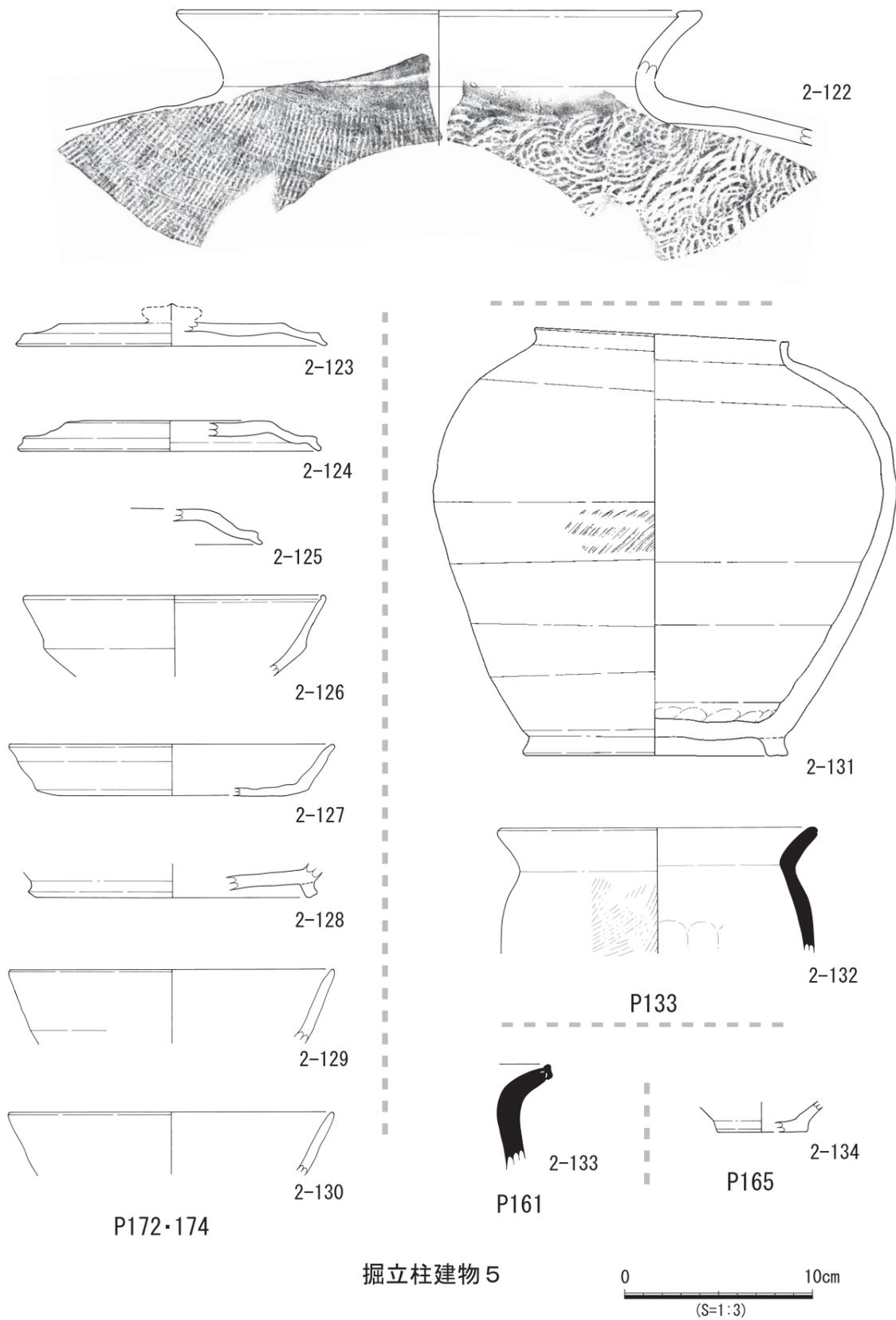
掘立柱建物5
掘立柱建物5は、2×4間(5.0×8.0m)以上の規模を有する建物で、第2区Aの東端に位置する。柱穴径50～70 cm、深さ10～35 cmを測る。これらの柱穴内からは比較的豊富に遺物が出土している。P141では蓋坏類(2-110～2-121)が出土し、P172とP174から出土した須恵器甕(2-122)の破片は接合関係が確認できる。P174ではほかに蓋坏類(2-123～2-130)が出土している。P133では直口



第32図 掘立柱建物5



第33図 掘立柱建物出土遺物(1)



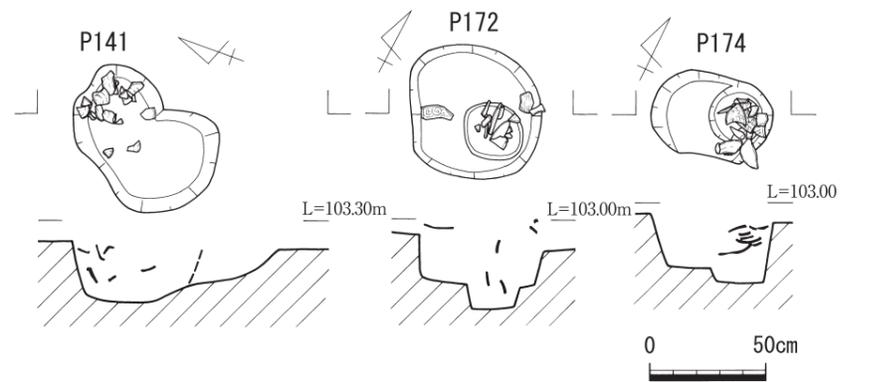
第34図 掘立柱建物出土遺物(2)

壺(2-131)と土師器甕(2-132)、P161で土師器甕(2-133)、P165では須恵器山茶碗(2-134)が出土している。

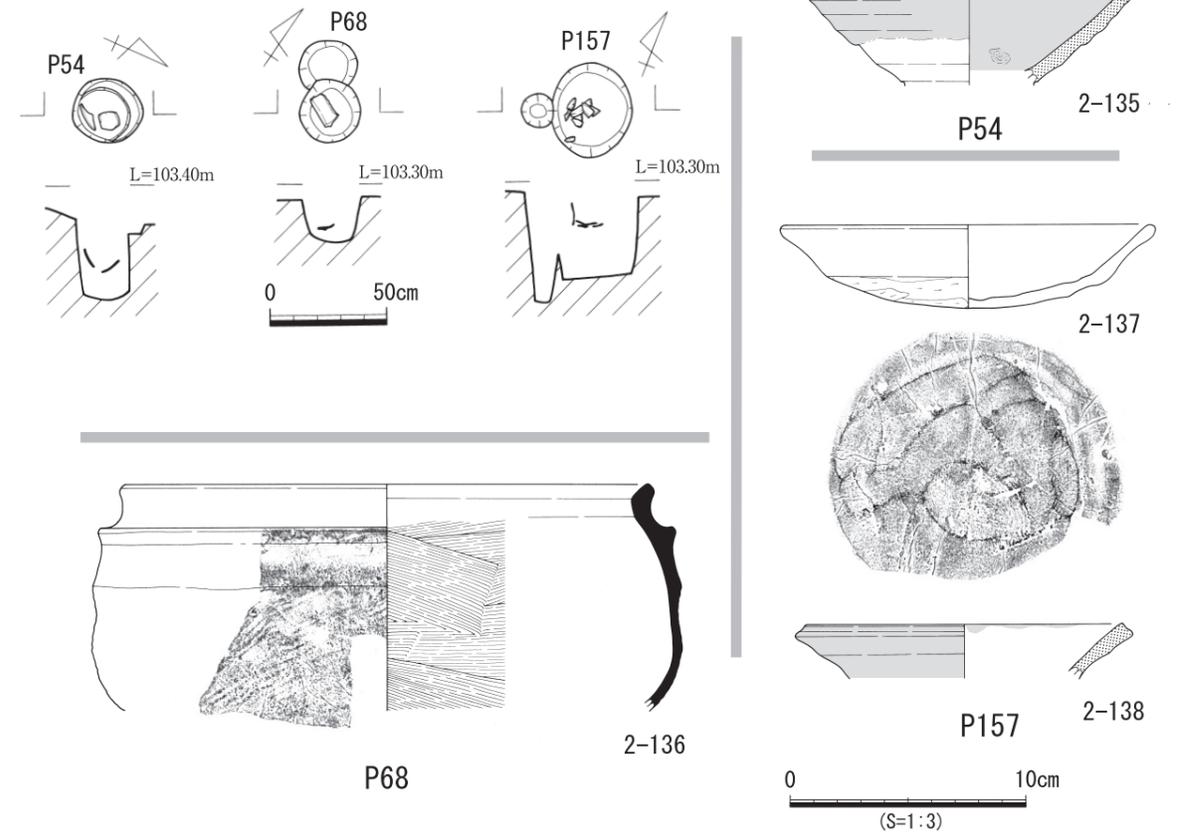
これらの遺物は山茶碗(2-134)が若干新しい特徴を呈するが、概ね奈良時代末～平安時代初頭の所産と考えられる。

P54は第2区Aの南西隅近くに位置し、溝5と重複している。径約30cm、深さ約40cmを測り、丹波焼甕片と灰釉平碗(2-135)が出土している。

P68はP54の北西約2mに位置し、溝5と重複している。径約25cm、深さ約20cmを測り、須恵器山茶碗細片と土釜(2-136)が出土している。



第35図 P141・P172・P174



第36図 P54・P68・P157及び出土遺物

P 157 は掘立柱建物 5 の西側に位置している。径約 40 cm、深さ約 35 cm を測り、須恵器山茶碗 (2-137) と瀬戸美濃系おろし皿 (2-138) が出土している。

山茶碗 (2-137) は、手持ち篋削りによって外面底部側面を削り込んでいる。中央部には削り残された回転糸切りが看取できる。この外面底部側面調整は、山茶碗が皿状を呈するようになる最終形態のものに時々観察できるが、その意味は明らかでない。外面底部側面を削ることによる安置時の安定化を意図したものでなく、器高の低減化でもないことを考慮すれば、この山茶碗製作工人の頭の中に意図された形態があり、それを表出するために行った技法と考えられる。

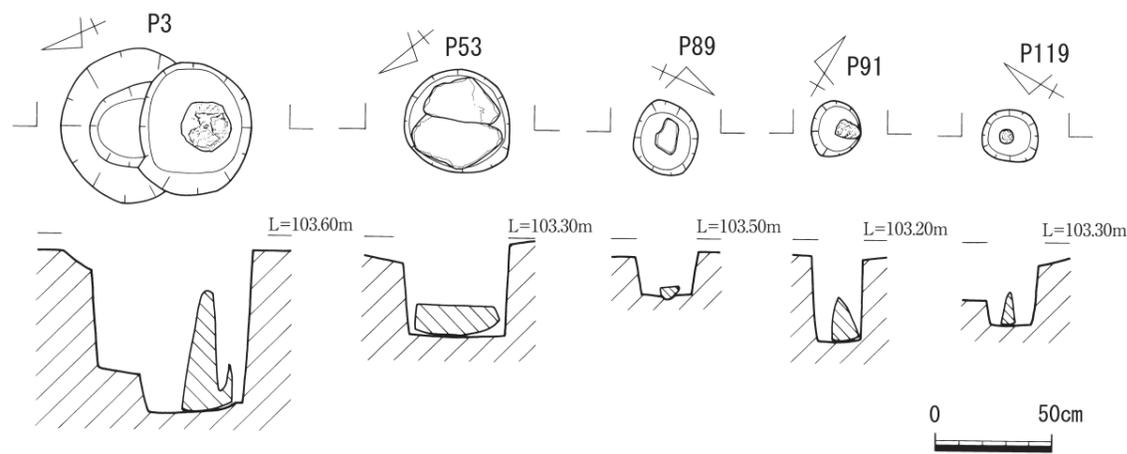
P 3 は、方形区画をなす溝 2 の北西近くに位置し、径 55 cm 以上、深さ約 70 cm を測る。底面に柱痕が遺存している。柱穴内から 16 世紀代の中国製の青花皿片が出土しているが、図化できなかった。

P 53 は、第 2 区 A 南西部の土坑 8 に隣接する位置にある。径約 45 cm、深さ約 40 cm を測る。底面に平石 2 石を配し、根石としている。柱穴内からは中世の所産と考えられる土器類が出土しているが、図化できなかった。

P 89 は、方形区画をなす溝 2 の北辺中央近くに位置し、径約 30 cm、深さ約 20 cm を測る。底面に根石として約 15 cm の石を据えている。柱穴内からの遺物の出土はなかった。

P 91 は、掘立柱建物 4 の南西隅近くで溝 5 と重複する。径 25 cm、深さ約 35 cm を測り、底面に柱痕が遺存している。柱穴内からは中世の所産と考えられる土器類が出土しているが、図化できなかった。

P 119 は、掘立柱建物 4 北辺中央近くで溝 2 と重複する。径 25 cm、深さ約 25 cm を測り、底面に柱痕が遺存している。柱穴内からの遺物の出土はなかった。



第37図 P3・P53・P89・P91・P119

【第 2 区 B の掘立柱建物と柱穴群】

掘立柱建物 6・掘立柱建物 7

掘立柱建物 6 と掘立柱建物 7 は、第 2 区 B の北寄り重複して位置する。

掘立柱建物 6 は 1 × 2 間 (3.0 × 5.8m) の規模を有する建物で、柱間が約 3m と広いことが特徴である。柱穴径 35 ~ 45 cm、深さ 20 ~ 55 cm を測る。柱穴内からは古代～中世の遺物が出土しているが、図化できなかった。

掘立柱建物 7 は 2 × 4 間 (3.9 × 7.9m) の規模を有する建物である。柱穴径 20 ~ 40 cm、深さ 20 ~ 45 cm を測る。柱穴内からは中世の遺物が出土しているが、図化できなかった。

掘立柱建物 8 ~ 掘立柱建物 11 第 2 区 B の南側で、一部重複しつつ掘立柱建物 8 ~ 掘立柱建物 11 が存在している。

掘立柱建物 8 は 2 × 4 間 (4.1

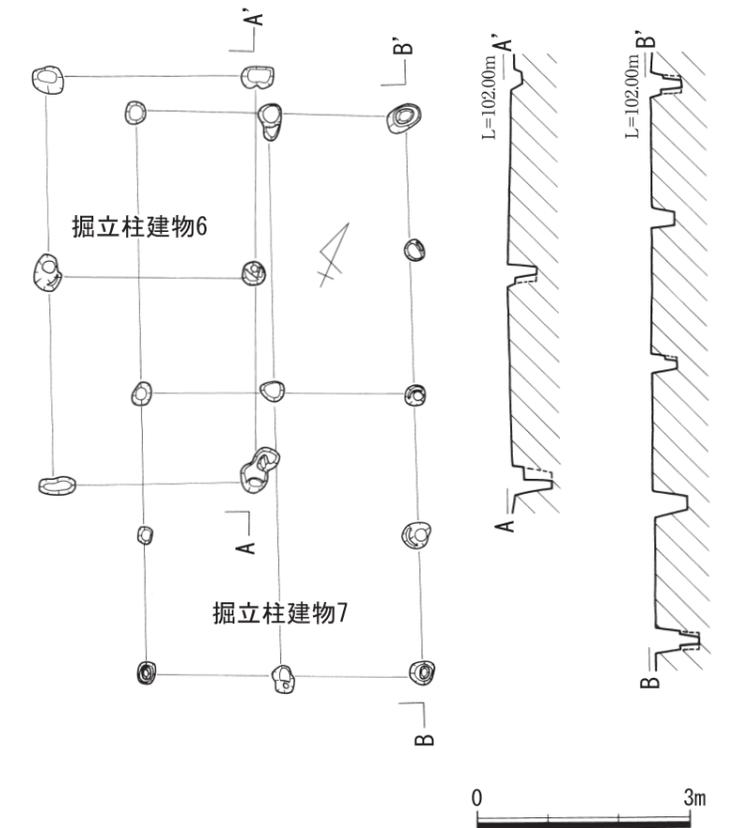
× 7.6m) の規模を有する建物である。柱穴径 25 ~ 50 cm、深さ 25 ~ 50 cm を測る。柱穴内からの出土遺物では、平安時代中期～後期頃の須恵器山茶碗 (2-139) と須恵器底部 (2-140) があり、図化できなかった遺物も概ね平安時代後半前後の所産である。

掘立柱建物 9 は北東隅で掘立柱建物 8 と重複している。2 × 2 間 (4.3 × 4.3m) の規模を有する建物で、東辺の中央柱穴が欠けている。柱穴径 30 ~ 70 cm、深さ 20 ~ 60 cm を測る。

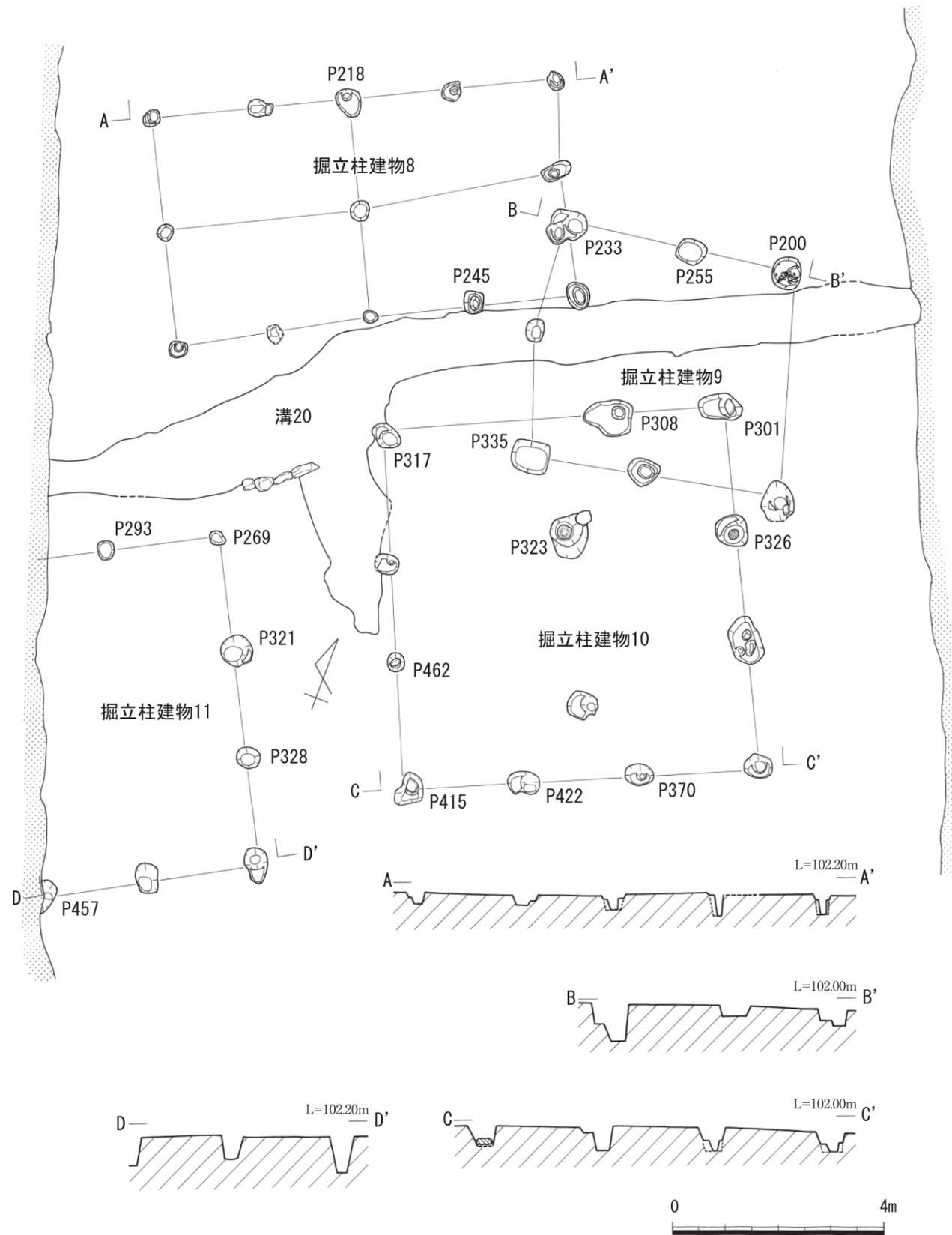
柱穴内からは比較的豊富な遺物が出土している。P200 では、土師器蓋 (2-141・2-142)、高坏 (2-143)、皿 (2-144・2-145) と須恵器蓋坏 (2-146・2-147)、P233 では製塩土器 (2-148) と須恵器坏 (2-149)、P255 では製塩土器 (2-150) と須恵器蓋 (2-151)、P335 では製塩土器 (2-152 ~ 2-154) の奈良時代末～平安時代初頭の土器が図化できた。他の柱穴内からも、多少の紛れ込みの土器が存在するが、概ね当該期の遺物が出土している。

掘立柱建物 10 は 3 × 3 間 (6.6 × 6.6m) のほぼ正方形を呈する建物で、溝 20 に近接して存在している。中央に 2 本の柱穴を配した建物を復元している。柱穴径 30 ~ 60 cm 程度、深さ 30 ~ 60 cm を測り、P326 と P323 では柱痕 (樹種ヒノキ) が遺存しており、後者の柱痕径は約 30 cm を測る太いもので、鋳型小片も出土している。

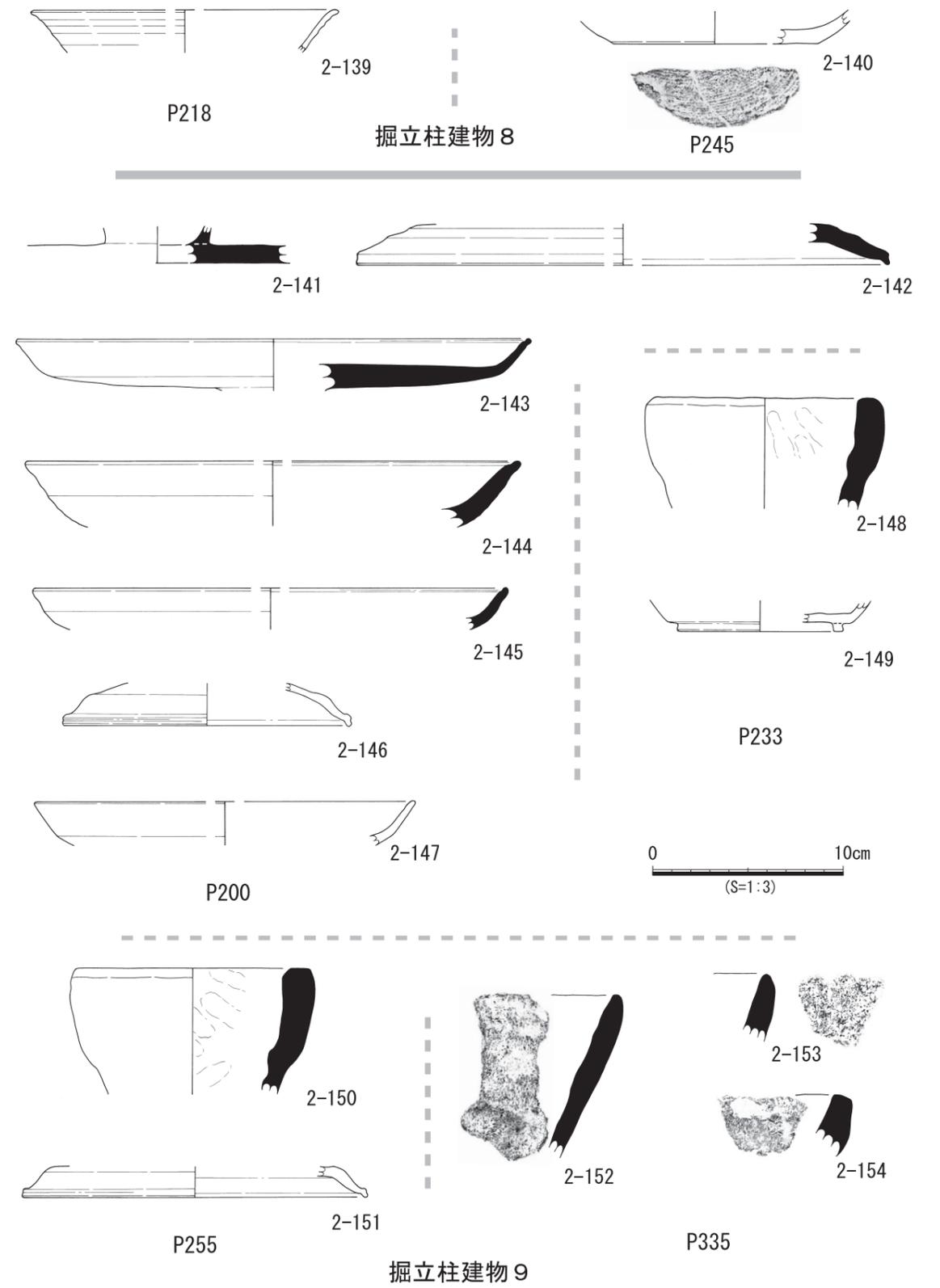
多くの柱穴内からは古代～中世中頃の遺物 (2-155 ~ 2-169) が出土しており、P326 では京都系土師器皿 (2-160) が確認できる。



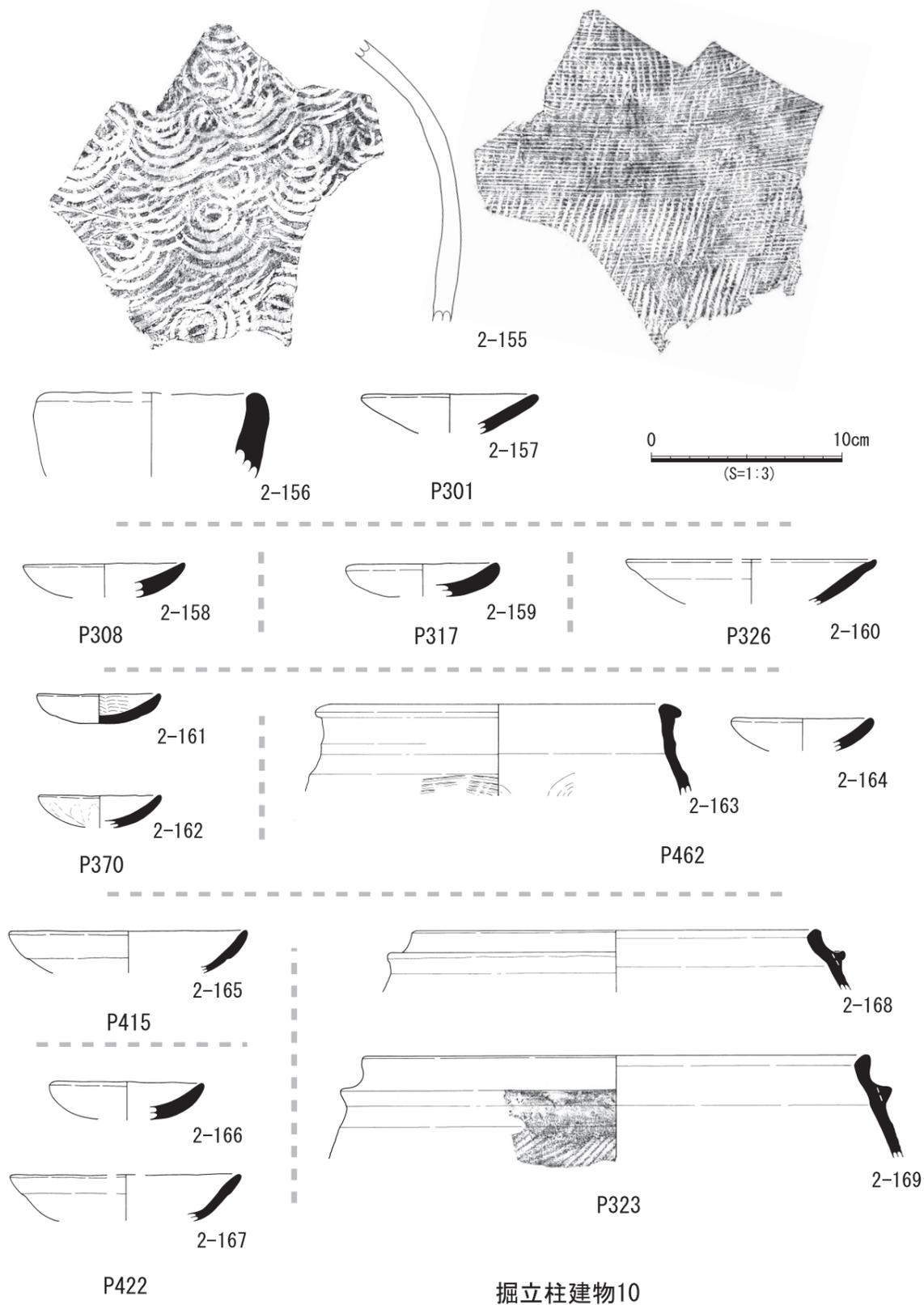
第38図 掘立柱遺物 6・7



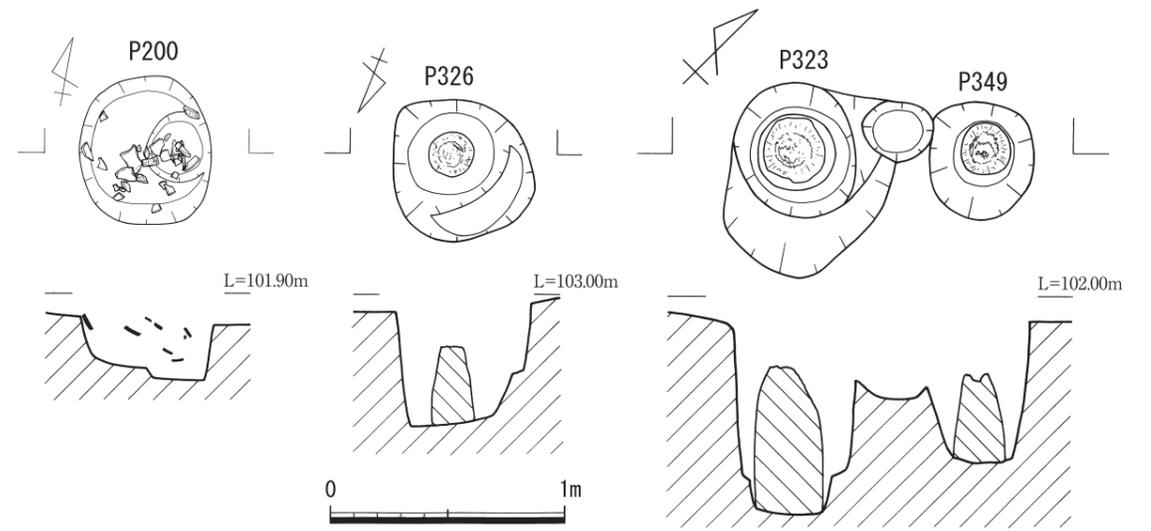
第39図 掘立柱遺物8~11及び溝20



第40図 掘立柱建物出土遺物(3)

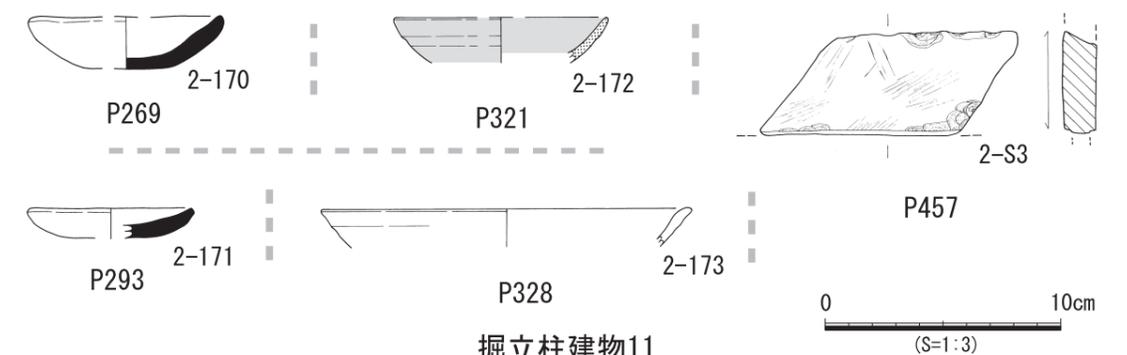


第41図 掘立柱建物出土遺物(4)



第42図 P200・P326・P323・P349

掘立柱建物 11 は 2 × 3 間 (4.0 × 6.1m) 以上の規模を有する建物で、掘立柱建物 10 の西約 3m に位置している。柱穴径 25 ~ 60 cm、深さ 25 ~ 70 cm を測る。出土土器では土師器小皿 (2-170・2-171)、白磁小皿 (2-172)、須恵器山茶碗 (2-173)、砥石 (2-S3) が図化できた。須恵器山茶碗 (2-173) は平安時代後期の所産で紛れ込みの遺物であろう。砥石 (2-S3) は凝灰岩製で、その断面には擦り切り技法により折りとられた痕跡を看取できる。



掘立柱建物11
第43図 掘立柱建物出土遺物(5)

P 349 は、掘立柱建物 10 と重複する位置に存在する (第 42 図)。径約 50 cm、深さ約 50 cm を測り、最大径約 30 cm の柱根 (樹種ヒノキ) が遺存している。

P 264 は、第 2 区 B の西方よりで溝 20 と重複して位置している。径約 50 cm、深さ約 80 cm を測り、中世中頃の京都系土師器小皿 (2-174) が出土し、柱根 (樹種スギ) が遺存している。

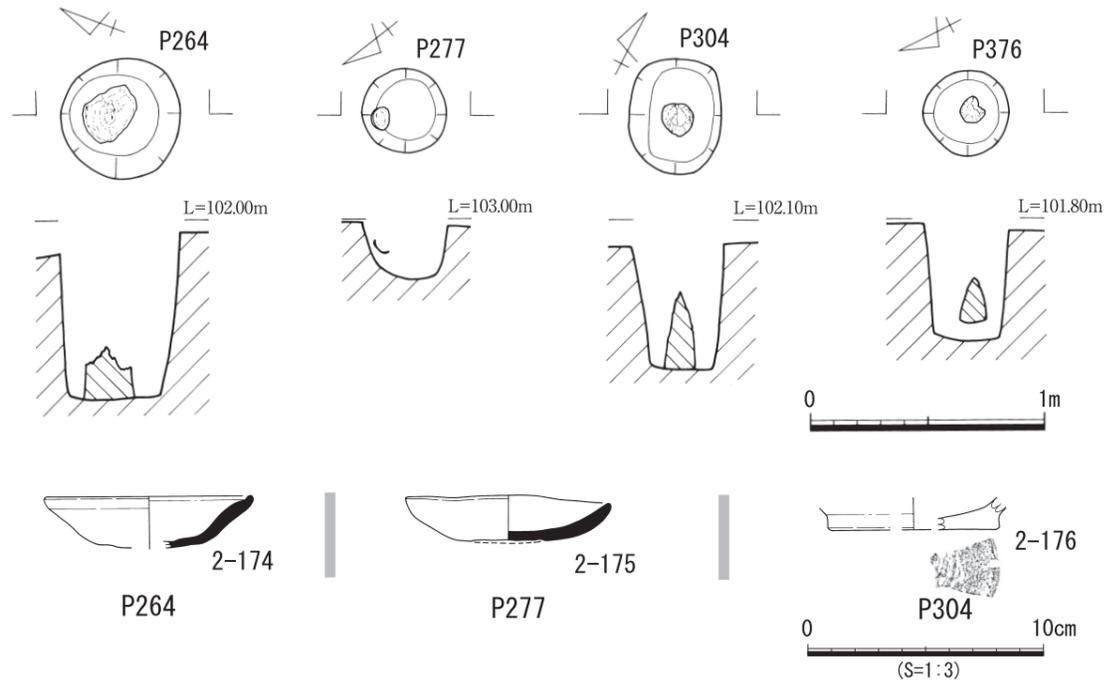
P 277 は、溝 20 を挟んだ P264 の北約 1.5m に位置している。径約 35 cm、深さ約 25 cm を測り、完形の土師器小皿 (2-175) が、埋土の中位より出土している。

P 304 は掘立柱建物 11 の敷地内に位置し、径約 40 × 50 cm、深さ約 55 cm を測る。柱穴内には径約 15 cm の柱根 (樹種ヒノキ) が遺存し、平安時代中頃の底部篋切り調整の須恵器山茶碗

(2-176) が出土している。

P 376 は掘立柱建物 10 の敷地内に位置し、径約 35 cm、深さ約 45 cm を測る。柱穴内には柱根(樹種ヒノキ) が遺存している。埋土内から土器は出土しなかった。

P 333 は掘立柱建物 10 の敷地内に位置し、径約 40 cm、深さ約 15 cm を測る。この柱穴内から多量の鋳型片(底型か?・図版 28 下) とともに、15 世紀代と推定される東海系鉄釉香炉(2-323) が出土している。



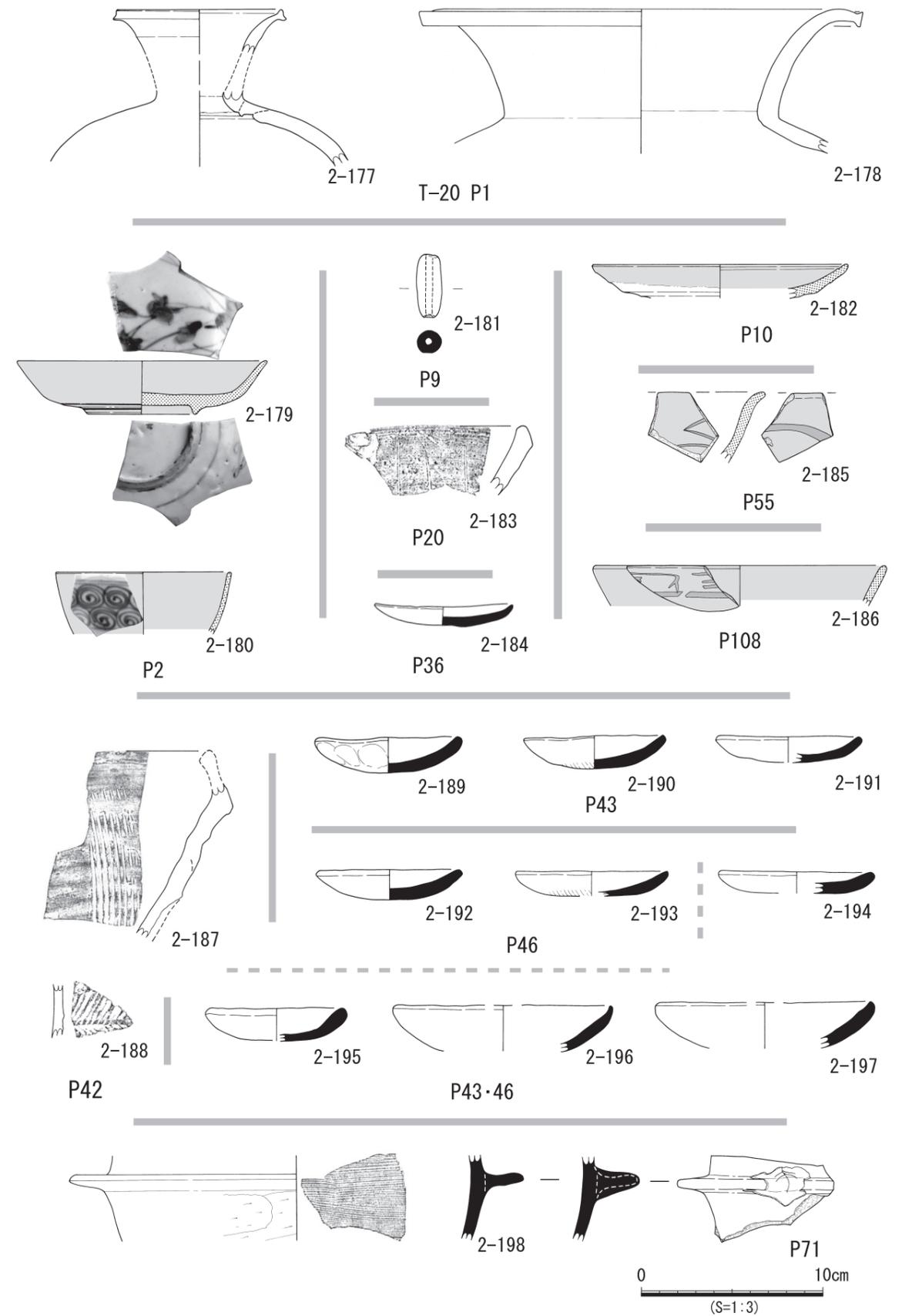
第44図 P264・P277・P304・P376及び出土遺物

5. 第2区小結

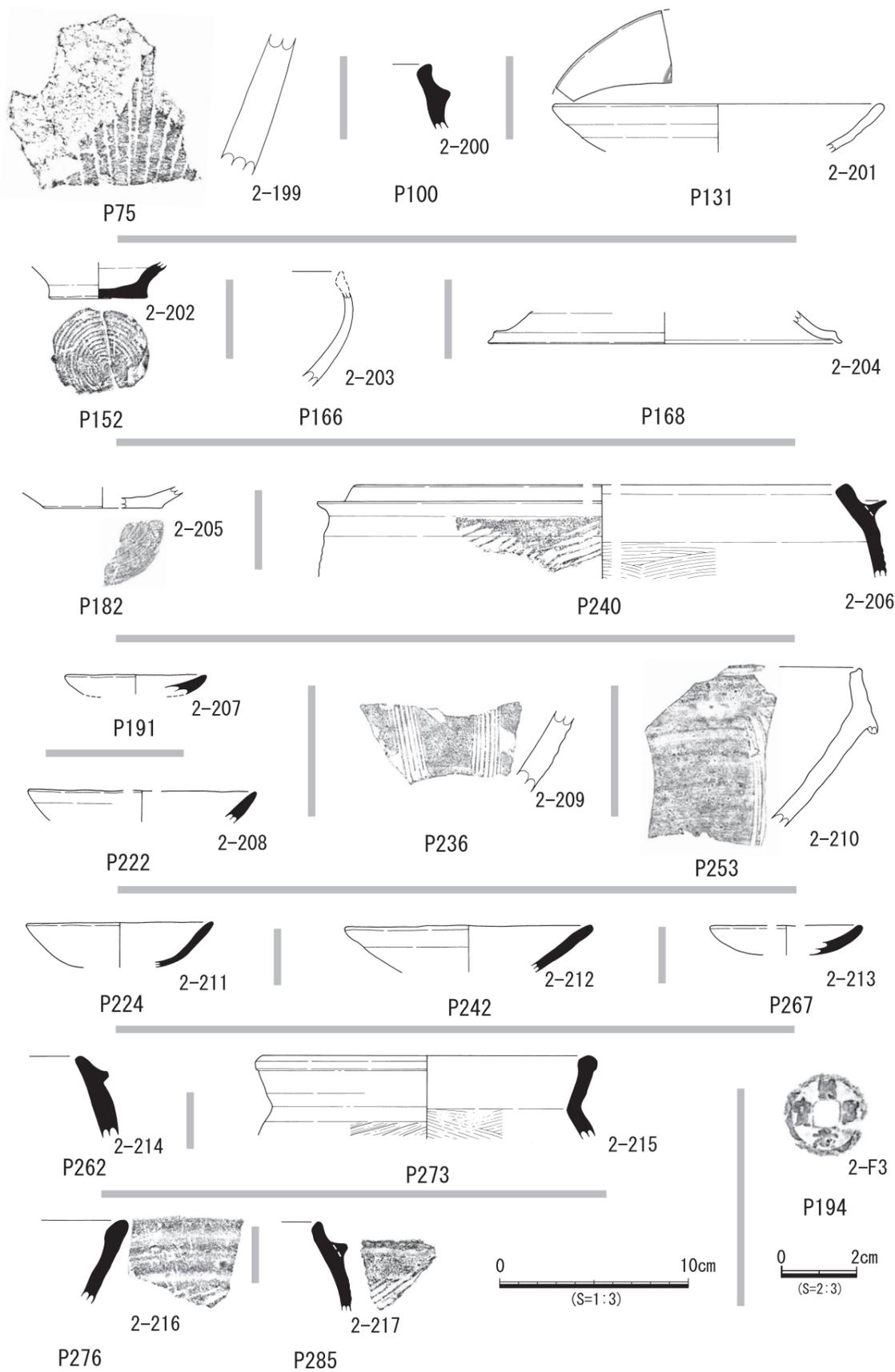
第2区全体の出土遺物を概観しつつ、全体の遺構の消長を確認しておこう。

まず、奈良時代末～平安時代初頭と、14～16世紀代の中世半ば～後半の大きく二時期のピークを指摘できる。建物で確認すると、掘立柱建物 5・9 が奈良時代末～平安時代初頭の第1次ピーク、掘立柱建物 8 が平安時代後期頃と推定されるものの、他の掘立柱建物 8 棟が中世半ば～後半の第2次ピークの所産となっている。第1次ピークはやや小さめの波形であるが、第2次ピークは大きな波形を呈し、茂利・宮の西遺跡を象徴する時期といえるであろう。

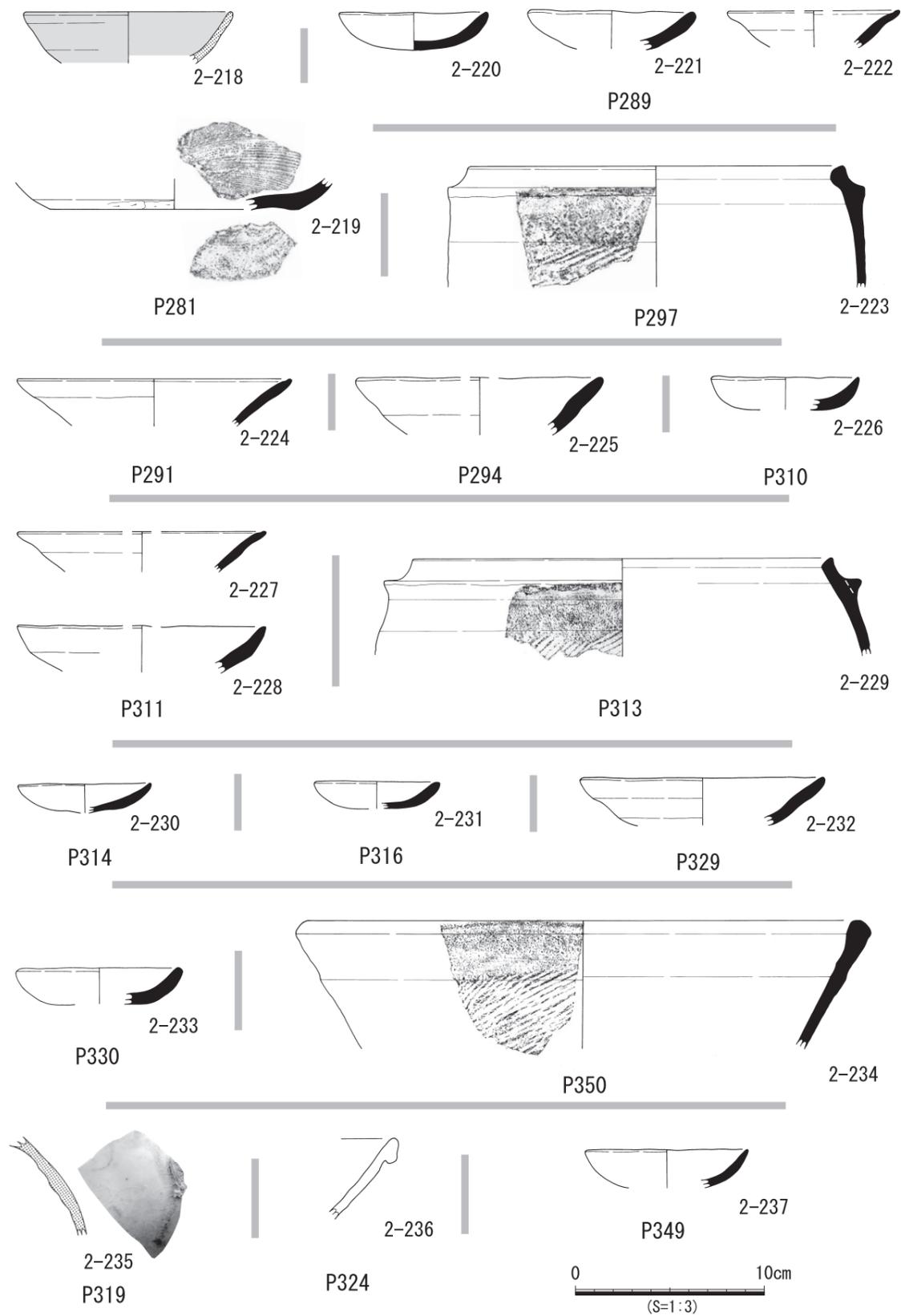
茂利・宮の西遺跡地区内での最古の遺物は、チャート製の石鏃(2-S3)で、縄文時代～弥生時代の所産である。但しこの石鏃と同時期の遺物は皆無である。その後第1次ピークの奈良時代末～平安時代初頭になると2棟の掘立柱建物とともに、溝 10 出土遺物や細片となった製塩土器等で一定量の遺構・遺物が確認できる。その後平安時代中頃～後半前後には1棟の掘立柱建物のほか、P420・P440の出土遺物や(2-295～2-300)の須恵器山茶碗の存在が、この地における活



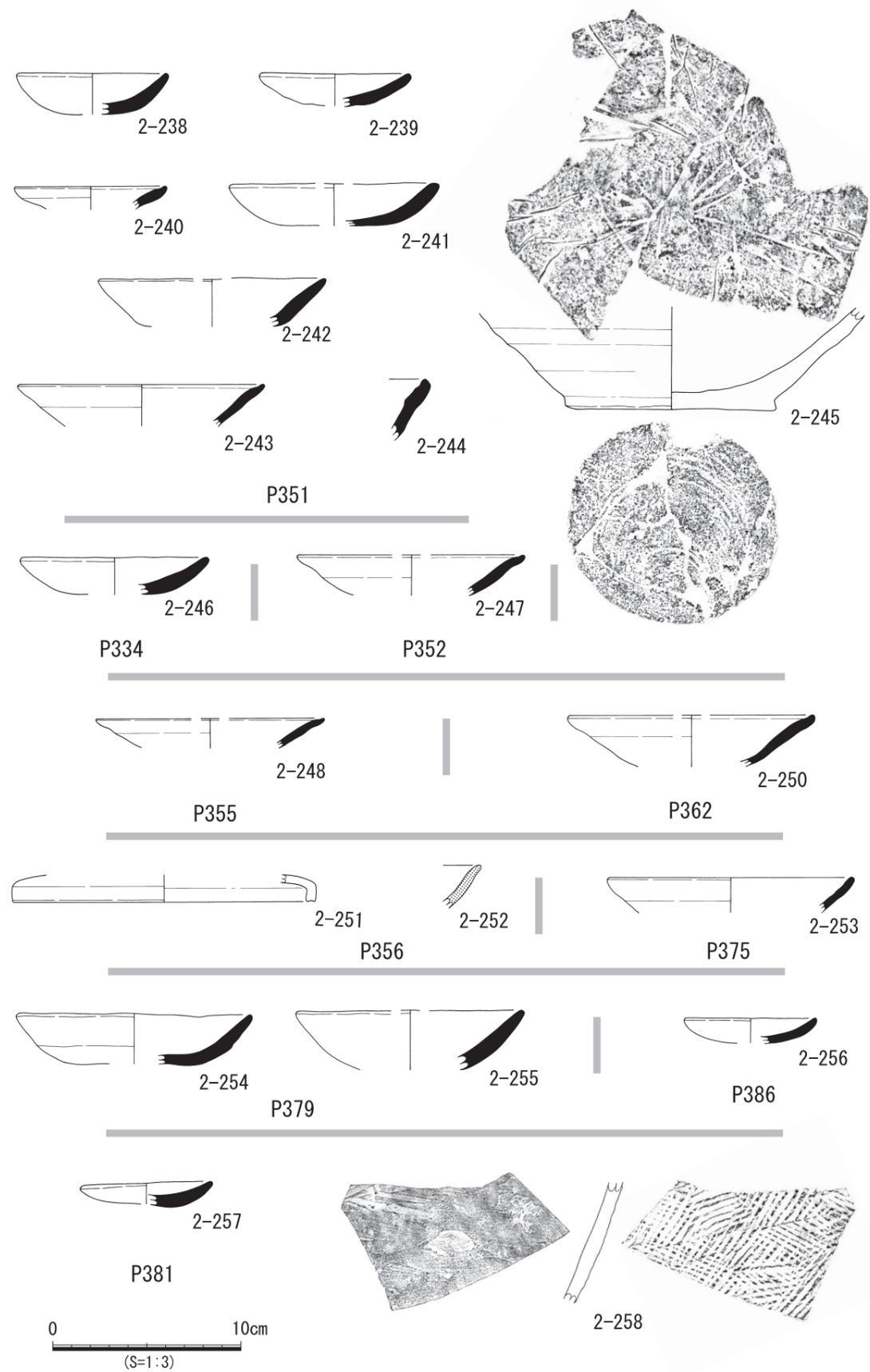
第45図 ピット出土遺物(1)



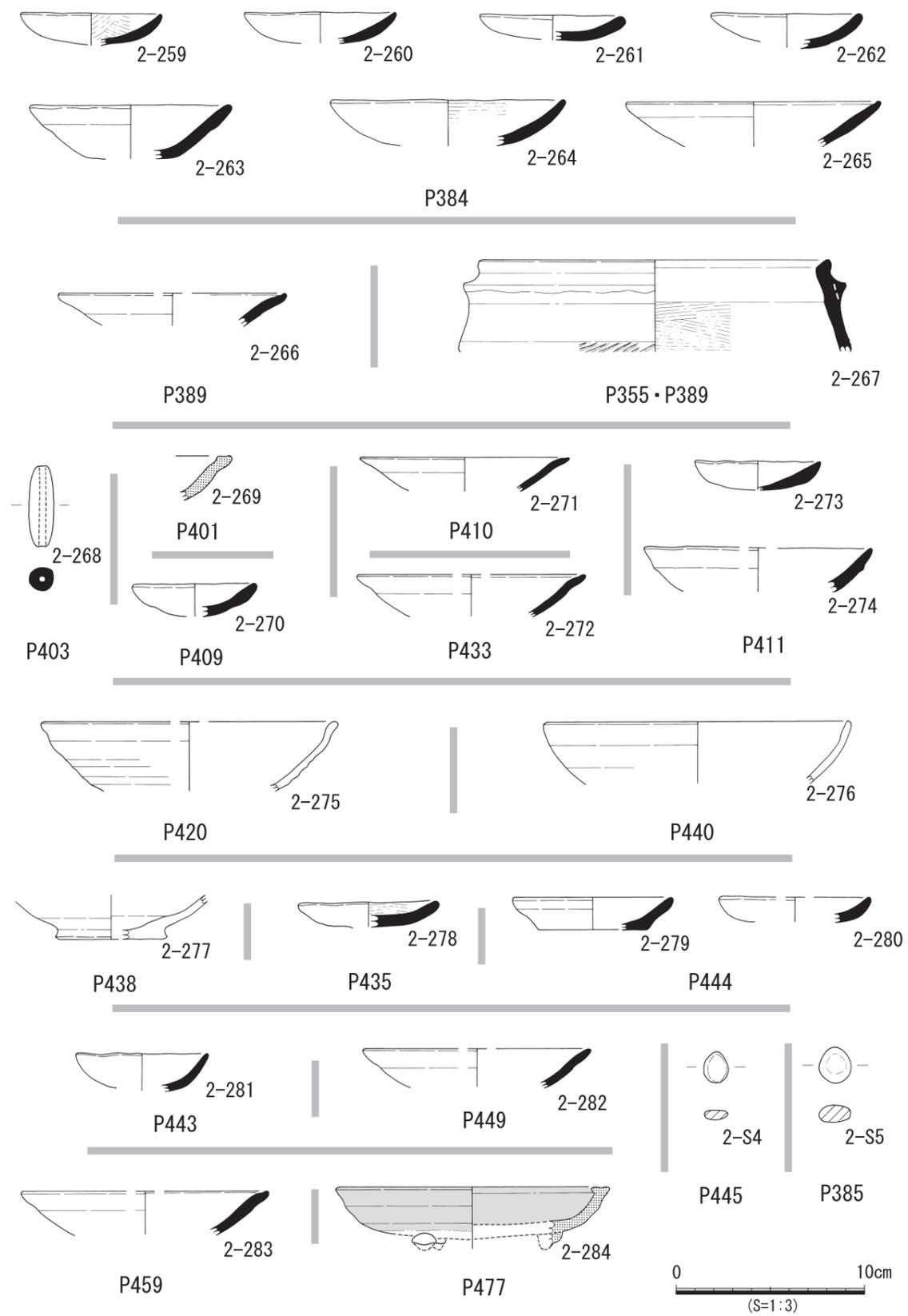
第46図 ピット出土遺物(2)



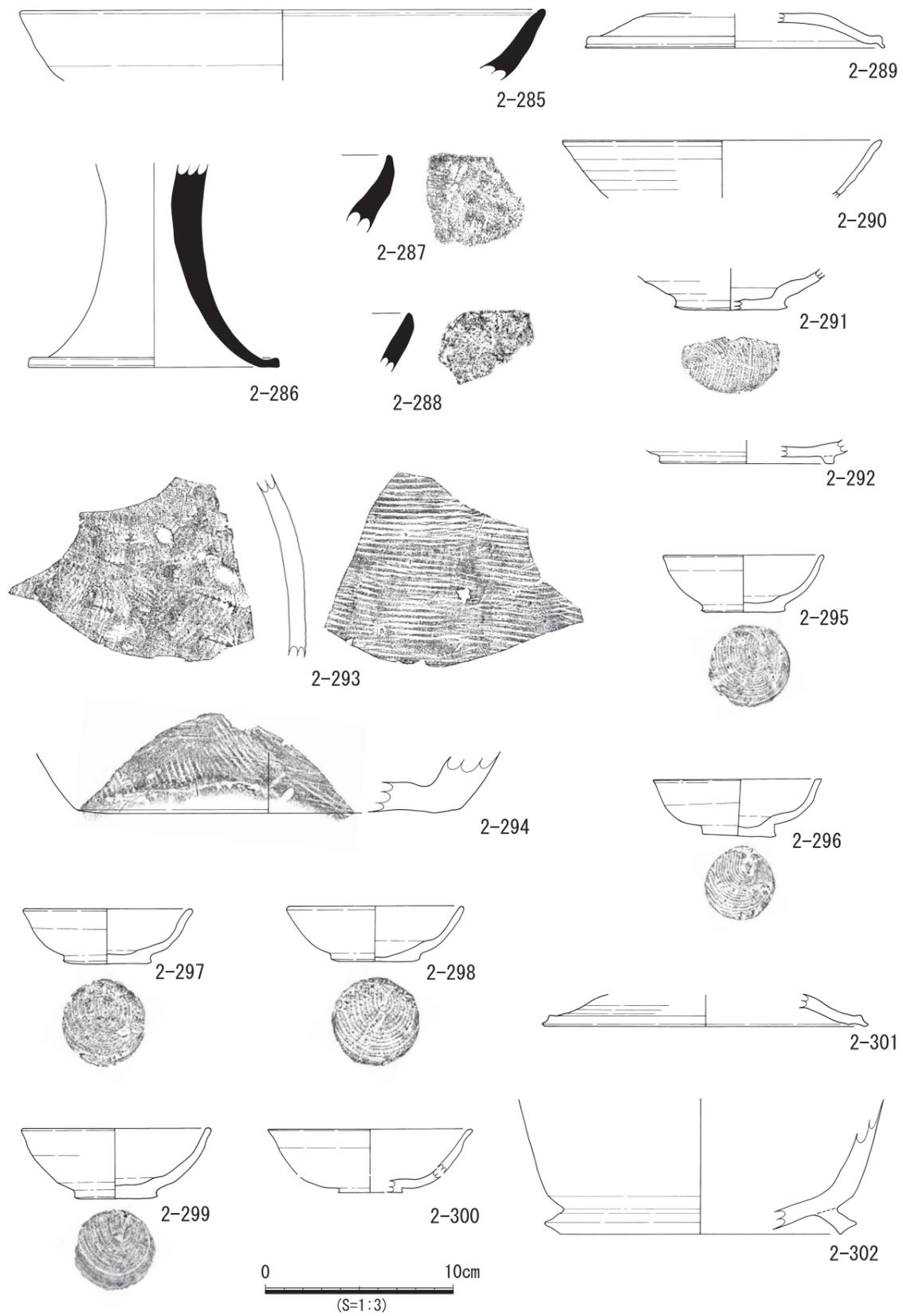
第47図 ピット出土遺物(3)



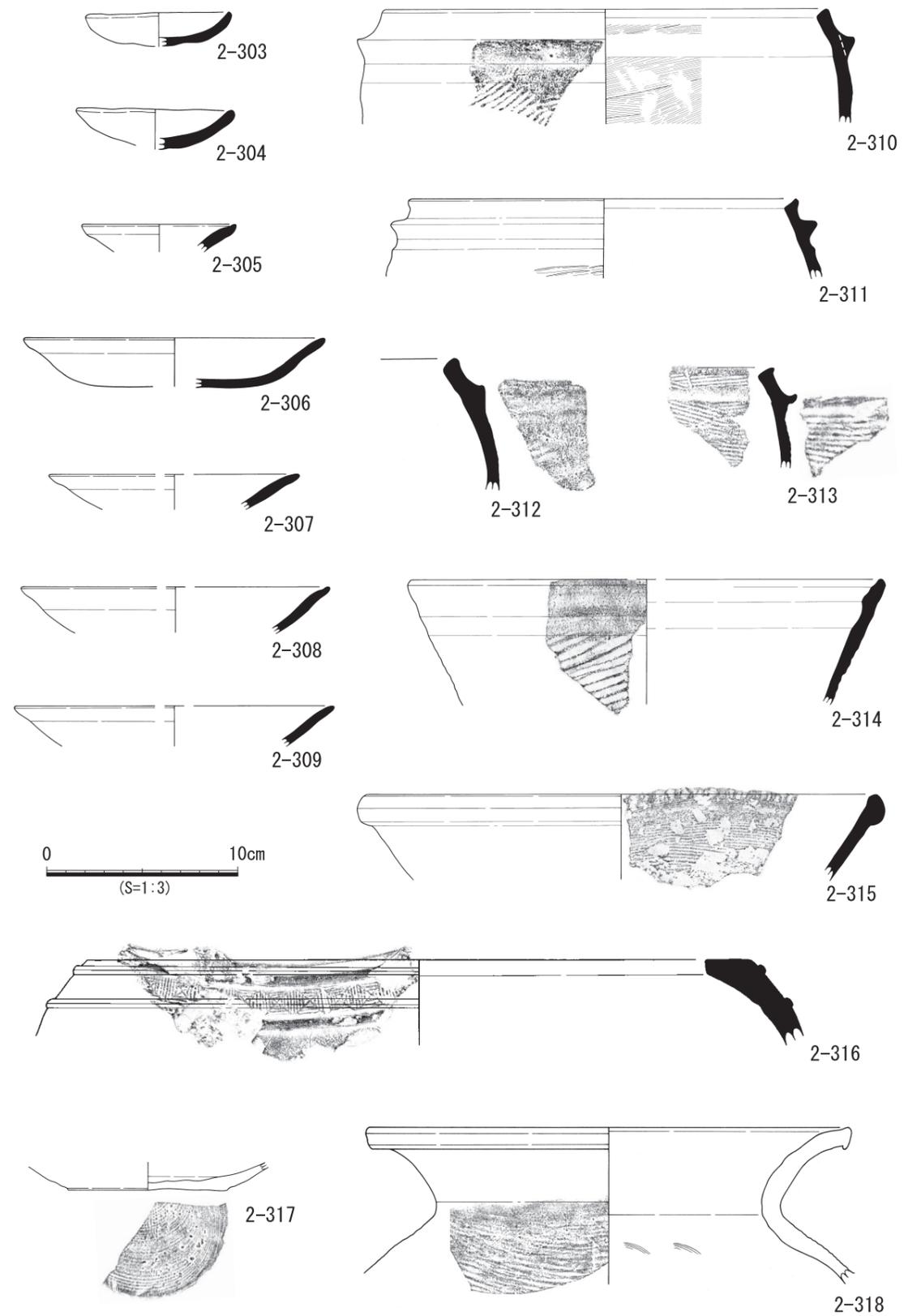
第48図 ピット出土遺物(4)



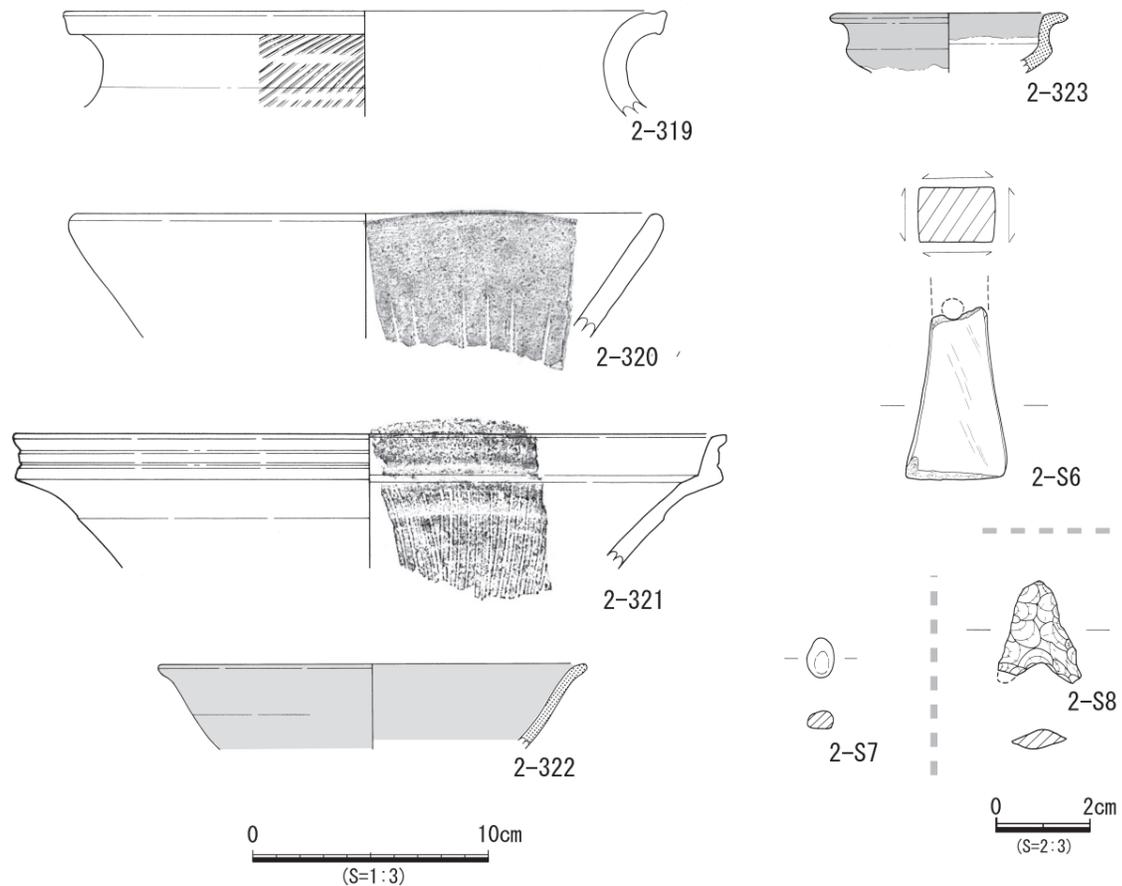
第49図 ピット出土遺物(5)



第50图 第2区出土遗物(1)



第51图 第2区出土遗物(2)



第52図 第2区出土遺物(3)

動痕跡を示している。平安時代末～中世前半には、井戸1・溝11等のほかに当該期の遺物が若干確認でき、第2次ピークへの導入的な状況となっている。そして14世紀の後半期にはいと大規模に活動が営まれ、16世紀前半頃まで引き続いている。後章で検討するが、鑄造関係の工房が営まれたのであろう。しかしながら、17世紀になると遺構・遺物は減少することから、茂利・宮の西遺跡の地は、水田化が推し進められたものと考えられる。

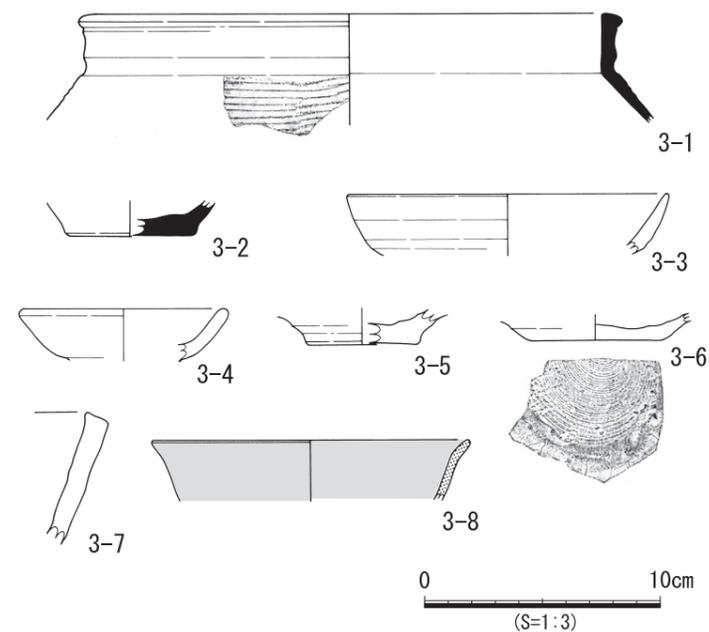
註 1) 『貝野前遺跡群』中町文化財報告10 中町教育委員会 1995

V 茂利・宮の西遺跡第3区

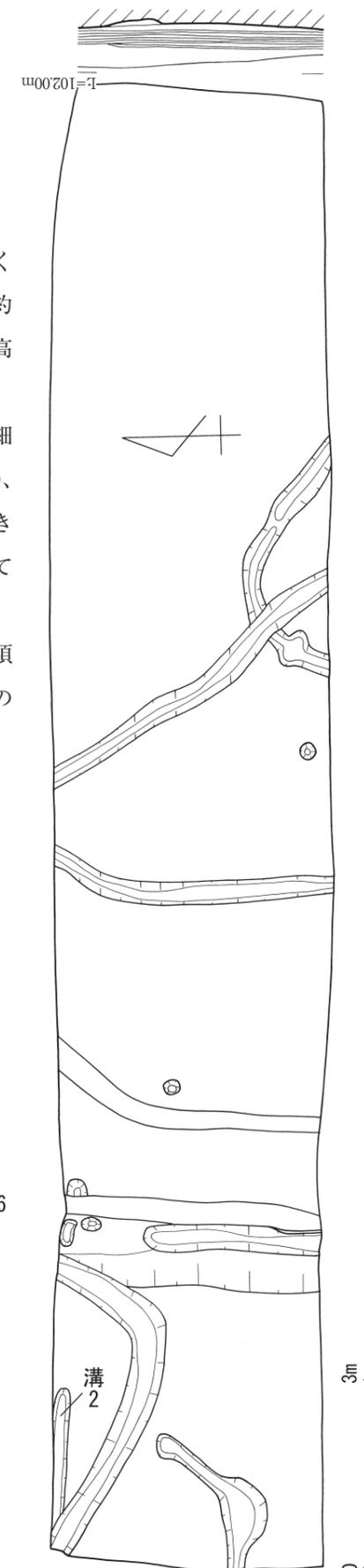
茂利・宮の西遺跡第3区は、調査対象地区内の南端近くに位置する。約4.3×23.5mの長方形調査区で、面積は約100㎡である。調査区内は西端が標高101.9m、東端は標高101.1mを測り、東西の高低差が約0.8mある。

検出された遺構は、溝7条である。溝からは少量の土器細片が出土するのみで、溝2で近世の遺物を包含するものの、他の溝では中世の所産と推定されるものばかりで、図化できたものはない。なお溝2では、近世後半のキセルが出土しているが、図化できなかった。

包含層出土で図化できた土器は、土師器山茶碗(3-2)、須恵器杯(3-3)、須恵器山茶碗(3-5)が古代の所産で、他の遺物は中世の所産である。



第54図 第3区出土遺物



第53図 第3区遺構図

VI 総括

1. 茂利・宮の西遺跡の性格

今回の発掘調査成果で最も注目されるのは、この茂利・宮の西遺跡の遺構群が、溝と掘立柱建物のあり方及び溝の堆積土の状況や出土遺物の検討から、中世の工房跡と推定される点である。そのあり様を再確認して、まとめておこう。

第2区A調査区では、溝2によって区画された範囲内に建物が検出されている。溝2は南側が調査区外に延びるため、全容を明らかにし得ないが東西の長さ約20m、南北の長さ約7m以上の三方を取り囲むように存在している。そして、溝2の東西軸の溝と平行して南側4mの位置に溝5が走っている。溝4は溝2で囲む範囲を2分割するように、南北に存在している。これらの溝の関係は、溝4が溝2と溝5を切っているため、最も新しい溝と判断できるが、溝2と溝5の直接的な関係は明らかでない。溝2で13～16世紀、溝4と溝5ではほぼ15世紀代の時期を示す遺物が出土している。そして、溝2の埋土内には、大量の炭・灰・焼土が包含されていたことを特筆できる。これらの溝からの出土ではないが、調査区内からは溶解炉の破片（裏表紙下の一部）が出土している。

この溝2に区画された範囲内に、掘立柱建物1～4の4棟の建物が確認されている。掘立柱建物1は、溝2によって区画される内側に沿うように構築された建物で、2×8間（5.0×17.2m）以上の規模を有する。そして溝2内の区画を溝4によって分割した西側に掘立柱建物3、東側に掘立柱建物2と掘立柱建物4が重複して存在する。それぞれの建物の時期は、掘立柱建物1が中

世中頃、掘立柱建物2は中世、掘立柱建物3は13～14世紀頃、掘立柱建物4は16世紀頃と少量の出土遺物からではあるが、建物の大まかな時期の提示ができる。

また、溝4と溝2・溝5の切り合い関係と、掘立柱建物と溝の位置関係を考慮すれば、溝4と溝5と重複する掘立柱建物1は、この2条の溝と同時期と考えるのは難しい。このため掘立柱建物1と建物を区画する溝2とがセットとなり、最も古い時期に該当するのであろう。その後、溝4を挟んだ東西に掘立柱建物2～4が再建されることになるが、出土土器からは掘立柱建物4が最も新しい建物と推定される。

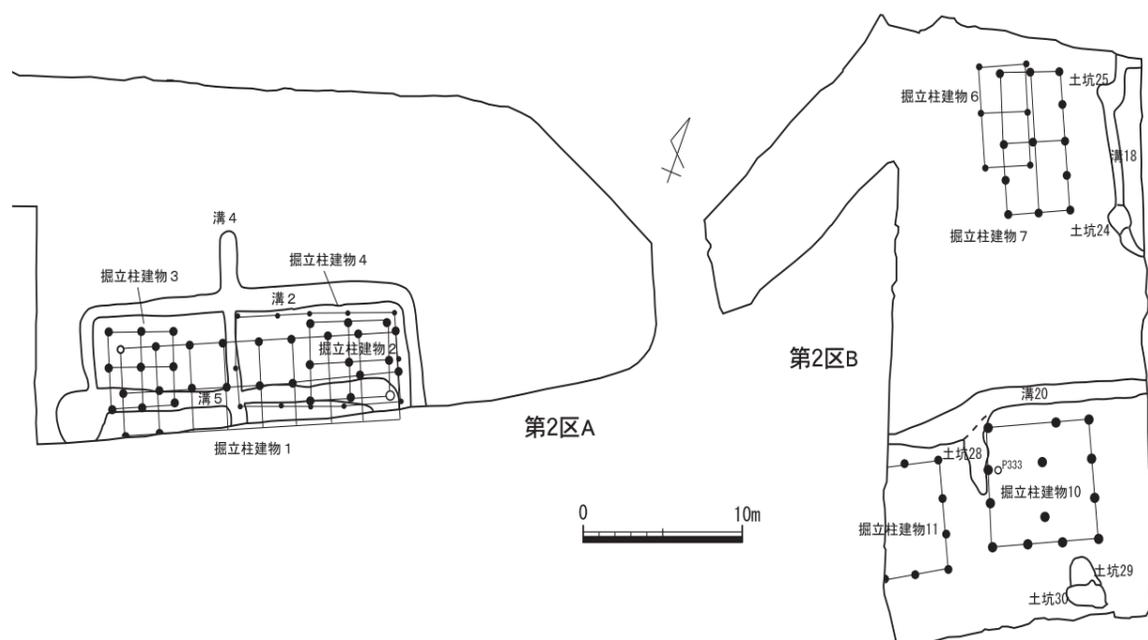
一方第2区B調査区に目を移してみると、土坑24・25と重複する溝18が存在し、これらの関係は明らかでないが、いずれの遺構からも鋳型片が出土している。溝18では下層で炭・灰が混じる砂質土が堆積する。土坑24では壁面が赤褐色に変容し焼土化した部分が確認でき、炭・灰・焼土が集中して出土している部分があるため、土坑内において火を使った作業が行われていた事は疑いない。土坑24では古代～中世の土器、溝18では中世と推定される土器が出土しているが、細片のため明確な時期をおさえがたいため、中世の所産としておきたい。なお土坑25においては、土器は出土していない。

この土坑24・25、溝18の西側に中世の所産と考えられる掘立柱建物6・7が重複して存在している。溝18の東側に掘立柱建物等の遺構が存在している可能性もあるが、掘立柱建物6・7が土坑24・25、溝18との関係を示すものとして取り上げておきたい。なお、これらの近くの遺構では、土坑23において溶解炉片が出土していることを補足しておきたい。

この第2区Bの南方では、東西に流路を有する溝20とその南側に掘立柱建物10・11が存在している。溝20にも埋土に炭・灰等が堆積しており、13～15世紀の土器が出土している。東側に位置する掘立柱建物10の平面形は正方形に近く、若干古代の遺物が混ざり込むが、14～15世紀の所産とされるものが大半を占める。掘立柱建物11も、出土遺物から15世紀頃の時期を与えることができる。掘立柱建物10と掘立柱建物11の間に位置し、溝20から南に接続する土坑28には、上層に少量の焼土と炭・灰が混じる暗灰黄色土が堆積し、若干古い時期の遺物を交えるが、15世紀を中心とした遺物が出土している。また、掘立柱建物10の南側の土坑29の埋土には炭・灰・焼土が多量に混じり、鋳型小片も出土している。土坑29と接する土坑30にも、少量の焼土とともに炭・灰が埋土に混じっている。

掘立柱建物10の建物範囲内に位置するP333では、多量の鋳型小片（図版28下）が出土している。また、この掘立柱建物10周辺の柱穴のP221・P345・P389・P398・P427・P461等では少量であるが、鋳型小片が出土している。

以上の提示した遺構群は、堆積土や時期的な検討を踏まえると、何らかの有機的な関連を有する遺構群と考えることができる。また炭・灰・焼土の遺構内の堆積、溶解炉片・鋳型片の出土から鋳造関係の作業がなされていたことが考えられる。すなわち、14～15世紀を中心とする時期に、鋳造関係の作業場＝工房がこの地に営まれていたのであろう。



第55図 鋳造関係遺構配置図

2. 茂利・宮の西遺跡の鋳物師

兵庫県教育委員会の発掘調査によって、茂利・宮の西遺跡は既に「大小の鍋の生産がおこなわれていることから、単純な出吹きでなく、ここに鋳物師の拠点があったことも考え得る」¹⁾事が指摘されている。今回の圃場整備に伴う調査地区（町教委調査）は、兵庫県教育委員会発掘調査地区とは直線距離で約150mと至近距離にあり、前項の発掘成果を勘案すれば、今回の調査地においても鋳物師が活躍していた事を追認できる。この地で活躍していたであろう鋳物師について、若干の検討を加えてまとめとしておきたい。

(1) 文献から見た仲山姓の鋳物師

まず、多可町内での鋳物師のあり方を示す最古の文献資料では、近世播磨地域の地誌として著名な『播磨鑑』²⁾を取り上げることができる。医者であり暦算家であった平野庸脩（ひらのようさい）によって、宝暦12年（1762）頃刊行された『播磨鑑』の多可郡高松山長明寺の条には、長明寺の頼政塚と源頼政の関係が記されている。ここに

「四十八燈を以て神明に捧げられはしるし有へしと云 時に壹人の鋳物師に仰付られ捧げると也 其後化鳥をやすやすと退治して頼政此處へ来られけり 彼鋳物師も頼政をたのみて爰に来たり其業をなす 末葉次第に榮へて當国神社佛閣の推鐘多くはかれか棟梁たり 往々に其銘多し當寺の梵鐘も其一也 今此子孫多賀郡中村に移りて家業をなし侍る」(下線報告者)

とある。すなわち、源頼政に従って当地に来た鋳物師の子孫が後世に榮えて、多く神社仏閣の梵鐘等を製作した。そしてこの長明寺の梵鐘もその一つであり、その子孫は現在多可郡中村に移住しているとされる。ここで、長明寺の梵鐘銘を確認しておこう。ただこの梵鐘は、第二次大戦中に供出されて、現存しない。

「-前略-

元和九年（1623）九月吉日 敬白

右筆者 覚 賢

銘 打 西禅坊

播州多可郡之内中村之町

鋳物師大工信濃守仲山九郎兵衛

藤原朝臣昌盛

同 大工仲山宗左衛門藤原朝臣家次

同 大工高田村九良左衛門藤原朝臣家次」³⁾(下線報告者)

源頼政との関係はともかく、梵鐘銘文からは江戸時代初期において、多可郡中村町に仲山九郎兵衛という鋳物師が存在していた事が判明する。

この長明寺梵鐘以外で、仲山姓を有した鋳物師の存在を確認できる資料が近年発見された。西

脇市黒田庄町黒田に所在する莊嚴寺の慶長十六年（1611）銘鰐口⁴⁾（裏表紙上）で、径27cm、厚さ8.5cmを測る。中央に蓮華撞座をおき、その周囲に2条の圏線、外周縁に沿って隣接2条圏線を配する。隣接2条圏線の内側に大日如来の種子を配し、右側に「奉掛鰐口播州多可郡黒田郷莊嚴寺本堂 本願者原五郎太夫」、左側に「于時慶長十六辛亥八月十五日 鋳物師大工中村町九郎兵衛尉 藤原朝臣家□」の銘が刻まれる。ここでも「中村町（仲山）九郎兵衛」の名を確認することができる。

以上2例の資料によって、近世初期において多可郡中村町（現多可町中区中村町）に仲山姓をもつ鋳物師が存在した事は疑いない。

(2) 「茂利」と「中村町」の関係

前項で確認できたのは、中村町に鋳物師が存在していた点である。それでは、発掘調査地の「茂利」とこの「中村町」の関係を検討しておこう。

まず、茂利と中村町の2つの村の位置関係は、大きく隔てられている訳でなく、隣接している。そして単に接しているのではなく、複雑な状況を示している。まず茂利地区内に位置する大歳神社は、茂利と中村町が氏子となっている。また中村町の墓地が茂利地区内に存在し、中村町が管理する善福寺薬師堂も茂利地区内に存在している。これらのあり方は、両村が地理的に隣接するだけでなく、それ以上の歴史的に深い関係にあることが推測できる。

この両村の関係を示唆するのが、江戸時代前半の村文書『乍恐謹而言上』（奥中所有文書9-2）である。天神郷の奥中・徳畑・茂利・中村町四ヶ村の郷社は、徳畑に位置する天神社であるが、この天神社における儀式での配席位置や宮山林の取扱について、元禄四年（1691）に熊野神社別当・奥中村・茂利村が、天神社神主・徳畑村・中村町に対して古法に背いていると訴えた資料がこの『乍恐謹而言上』である。この資料では、

「往古之中村郷と申ハ奥中村茂利村両村ニ而御座候得共 只今四ヶ村ニ罷成申候 中村町と申ハ先年式百年計以前 御公義様より道筋出し候様ニと被為仰付候故両村より出申 中村之郷新村ニ而御座候」

とあり、当時の為政者によって意図的に奥中村と茂利村から分村されたのが、中村町であるとされて、この分村時期は16世紀初頭前後とされている。この分村時期を検証する資料はないが、茂利と中村町は母村と子村という歴史的な関係を有していることを、神社・墓・堂のあり方が暗示していたのである。

(3) 多可郡中村郷の仲山鋳物師の消長

県教委及び当教委の発掘調査の成果によれば、鋳造関係とされる遺構・遺物は中世に限定され、近世には茂利・宮の西遺跡の調査地区内でそれを明確に窺うことはできなかった。一方で、梵鐘や鰐口に残された銘文は近世初頭の所産であり、またそれは茂利でなく中村町の住人であった。

こうしたことから、一つの仮説を提示することができる。中世には茂利・宮の西遺跡を中心とする地域で活躍していた鋳物師は、商業地として中村町が分離されたことにより、活動の中心を茂利から中村町に移したと考えることができる。そしてこの段階には、仲山姓を名乗っていたのであろう。

中村町の小字名を確認すると（第56図）、鋳物師の存在を示す「金屋西」が残されている。近世初頭に仲山鋳物師は、この「金屋西」若しくはその東側の「竹ヶ鼻」あたりに工房を構えたのであろう。残念ながら、仲山九郎兵衛が関わったことを示す資料は、長明寺の梵鐘銘が示す近世前半の元和九年（1623）で途切れている。また中村町内において鋳物師の活躍を伝える伝承等も残されていないことを考慮すれば、近世の比較的早い段階に中村町での鋳鉄鋳物生産は終焉を迎えたと推測されるのである。



第56図 茂利・宮の西遺跡周辺の小字名（太線は大字境）

中村町所蔵文書を見てみると、興味深い資料を見いだすことができる。長明寺梵鐘及び莊嚴寺鰐口に記された「(仲山) 九郎兵衛」の名前が、同時代性を有する検地帳で確認できる。『中村町慶長検地帳』慶長十九年（1614）は姫路藩主池田氏による検地帳で、田方検地帳と畑方検地帳の双方が残されている。この検地帳では、九郎兵衛は中村町における最大の地主で三町以上を有し、中村町全体の15%⁵⁾も占めている。また屋敷地では「九郎兵衛下人」とされる土地が2ヶ所も記されていることから、村内で指折りの有力者であったことを窺うことができる。

『中村町慶長検地帳』から約60年後の『中村町延宝検地帳』延宝五年（1677）では、九郎兵衛の土地は四反二畝二歩と減少し、中村町と同年に製作された『茂利村延宝検地帳』にも、「中村町 九郎兵衛」が出作人として、茂利村内に二反六畝二歩の田畑を所有していたことを確認できるが、総じて中位程度の土地所有者と判断され、慶長期のような勢いを窺うことはできない。なお、慶長期の茂利村検地帳は、残念ながら残されていない。

近世における中村町の土地所有状況を把握する資料は、この2点の検地帳以外に残されていない。このため近世の村内状況を把握する資料として、『村（差出）明細帳』を検討資料に追加しておく。中村町には、正徳四年（1714）・享保七年（1722）・延享三年（1746）・宝暦三年（1753）・宝暦六年（1756）・明和九年（1772）・安永八年（1779）・天明九年（1789）の18世紀代の8冊の『中村町（差出）明細帳』が確認できる。この中では宝暦三年（1753）・宝暦六年（1756）・明和九年（1772）の明細帳で、「鍛冶壺人 御座候」と記されるが、直接鋳物師の存在を示す資料は見あたらなかった。少なくとも18世紀代には、中村町における鋳物師が大規模な活動をしていた状況は確認できない。

以上をまとめると、源頼政を慕って多可郡の地に活動の地を求めたと伝えられる鋳物師は、鎌倉時代後半頃には、同郡中村郷茂利の地において積極的な生産活動をおこなった。この活動痕跡が、茂利・宮の西遺跡に残されている遺構・遺物群である。その後中世末頃に茂利から中村町が分村され、仲山姓を有した鋳物師は仲山九郎兵衛として中村町で更に生産活動を推し進める一方、田畑をも集約し中村町での有力者となった。すなわち長明寺の梵鐘や莊嚴寺の鰐口の生産時期は、仲山鋳物師として最も勢力を有していた時期と考えられる。しかしながら戦乱の世が明け、世相も安定した17世紀後半には、仲山九郎兵衛家の鋳物師としての活動は縮小の道をたどり、一般農民として生きることとなり、仲山鋳物師は終焉を迎えることとなった。

なお、現在の茂利地区内（世帯数約85軒）に「中山」姓は約20軒残されており、鋳物師「仲山」という姓に繋がる可能性がある。また、中村町には「中山」姓は存在しないことを付け加えておきたい。

長明寺の梵鐘や莊嚴寺の鰐口の銘の「中村町 仲山九郎兵衛」を、茂利・宮の西遺跡の調査成果と地域の文献資料等から追求した。中村町において、近世の早い段階に鋳鉄鋳物生産活動が停止されるようになった原因は明らかでないが、中世の中頃から近世初頭に、多可郡で仲山姓を有する鋳物師が比較的大規模に活動していたことを認識しておきたい。また今後、「仲山」の銘を有する鋳物の発見によって、更なる研究が促進されることを期待するものである。

遺物観察表

- 量高は () 現存高、- は不明である。
- 成形・調整等の (/) は (本数/mm) である。
- 調整の「手などで」は手持ちのなでを示す。

茂利・宮の西遺跡遺物観察表

遺物番号	実測番号	調査区	出土遺構	器種		法量 (cm)			色調	成形・調整等		備考	
				種類	器種	口径	器高	底・脚径		外面	内面		
1	8	T-22	P1	土師器	甕	27.4	(10.1)	-	にぶい黄橙	口縁部横なで、体部平行叩き(3/10)	体部なで	外面煤付着	
2	6			須恵器	山茶碗	17.2	(5.3)	-	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部重ね焼き痕あり	
3	7			〃	坏	-	(1.4)	10.0	灰	体部ロクロナデ、底部鋭切り	底部仕上げなで		
4	11	T-23	SD-1	土師器	皿	15.0	(2.6)	-	浅黄橙	口縁部手なで、体部未調整	手なで	京都系	
5	9			土師器	小皿	8.2	1.7	-	橙	未調整	手なで		
6	10			須恵器	山茶碗	16.4	(2.7)	-	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部重ね焼き痕あり	
7	12			〃	甕	-	-	-	灰	羽状叩き	なで?		
8	1	T-1	-	〃	蓋	17.2	(1.9)	-	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部重ね焼き痕あり	
9	2		-	土師器	土壺	22.8	(7.6)	-	橙	口縁部横なで、体部平行叩き(3/10)	体部当て具痕		
10	3	T-3	-	〃	土釜	20.2	(3.5)	-	橙	口縁部横なで、体部平行叩き(6/10)	横なで	外面煤付着	
11	4	T-5	-	土師器	甕	-	(3.3)	-	にぶい黄橙	口縁部横なで	体部鋭削り		
S1	5	T-6	-	石製品	砥石	残存長8.8cm		-	-	-	-	凝灰岩製	
12	13	T-26	-	須恵器	蓋	18.0	(1.6)	-	暗灰	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部重ね焼き痕あり	
13	16	T-35	-	土師器	土壺	25.0	(4.1)	-	灰褐～灰	口縁部横なで、体部平行叩き(4/10)	体部なで		
14	15		-	白磁	碗	16.4	(4.7)	-	(胎)灰白	-	-		
15	14	T-36	-	土師器	土壺	24.0	(5.7)	-	にぶい黄褐	口縁部横なで、体部平行叩き(4/10)	不明	外面煤付着	
16	17	T-42	-	須恵器	坏	-	(1.5)	12.0	灰	ロクロナデ	底部仕上げなで		
1-1	21	第1区	井戸1	土師器	皿	15.9	(2.4)	-	浅黄橙	口縁部手なで、体部未調整	手なで	京都系	
1-2	23			〃	土釜	22.2	(6.0)	-	にぶい赤褐	口縁部横なで、体部平行叩き(3/10)	体部刷毛(5/10)	外面煤付着	
1-3	24			〃	〃	-	(6.1)	-	橙	口縁部横なで、体部平行叩き(3.5/10)	体部刷毛(3/10)	外面煤付着	
1-4	25			備前焼	すり鉢	-	(5.9)	-	黄灰	体部ロクロナデ	すり目(7本/一単位)		
1-5	22			〃	〃	-	(5.4)	15.2	にぶい赤褐	体部ロクロナデ、底側面鋭削り	すり目(10本/一単位)		
1-W1	31			木製品	底板	残存長17.0cm、復元径20cm		-	-	-	-	-	
1-W2	30			〃	底板	残存長17.7cm、復元径18cm		-	-	-	-	-	
1-6	28			井戸1溝4	丹波焼	甕	-	(30.9)	21.0	褐～暗褐	体部ロクロナデ、底部なで	体部ロクロナデ、指頭圧痕	肩部に自然釉(灰オリーブ)
1-7	32			井戸1	〃	〃	-	(8.0)	20.4	にぶい赤褐	体部ロクロナデ、底部なで	ロクロナデ	
1-8	26			土坑1	備前焼	すり鉢	-	(3.7)	-	灰	ロクロナデ	すり目(7本/一単位)	
1-9	27	唐津陶器	皿		-	(2.6)	5.0	にぶい橙	底部糸切り後削り出し高台	ロクロナデ、軸葉蛇の目剥ぎ			
1-10	29	丹波焼	甕	44.0	(40.0)	-	赤褐～灰赤	ロクロナデ、上半部土部塗り	ロクロナデ				
1-11	1	第1区	東落ち	土師器	土壺	28.0	(9.0)	-	橙	口縁部横なで、体部平行叩き(3/10)	底部刷毛(2/10)	外面煤付着	
1-12	4			〃	〃	-	(4.1)	-	橙	口縁部横なで、体部平行叩き(2/10)	体部なで	外面煤付着	
1-13	3			〃	土釜	23.6	(5.2)	-	橙	口縁部横なで、体部平行叩き(4/10)	体部刷毛(2/10)	外面煤付着	
1-14	9			灰釉陶器	平碗	-	(3.3)	5.8	灰オリーブ	体部ロクロナデ、底部糸切り後削り出し高台	-		
1-15	7			陶器	すり鉢	-	(3.5)	12.0	にぶい赤褐	体部ロクロナデ、底部回転糸切り	すり目(5本/一単位)	ロクロ回転時計回り	
1-16	10			須恵器	甕	-	-	-	灰	羽状叩き	無紋当て具痕		
1-17	5			〃	こね鉢	-	(2.9)	-	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部重ね焼き痕あり	
1-F1	11			鉄製品	用途不明鉄製品	最大長7.5cm、最大厚0.6cm		-	-	-	-	-	保存未処理
1-18	15			溝4	土師器	土釜	21.0	(5.7)	-	橙	口縁部横なで、体部平行叩き(3/10)	体部なで	外面煤付着
1-19	14			〃	〃	小皿	8.0	(1.7)	-	にぶい橙	未調整	手持ちなで	歪みあり
1-20	19	溝5	〃	焙烙	33.0	(5.6)	-	にぶい褐	口縁部横なで、体部なで	体部なで、径約5mmの未貫通の穿孔2個1対あり	外面煤付着		
1-21	20	溝6	陶器	火入れ壺	11.6	(3.6)	-	灰	ロクロナデ	ロクロナデ			
1-22	16		土師器	皿	12.6	3.1	-	淡い橙	口縁部手なで、底部未調整	不明			
1-23	17		〃	〃	12.0	(2.4)	-	浅黄橙	口縁部手なで、体部未調整	手なで			
1-24	18		須恵器	こね鉢	-	(3.8)	-	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部重ね焼き痕あり		
1-25	13		P11	〃	甕	21.4	(2.7)	-	褐灰	ロクロナデ	頸部刷毛(8/10)		
1-26	12		P8	土師器	土壺	22.4	(3.3)	-	浅黄橙	横なで	横なで		
1-27	2	-	須恵器	山茶碗	-	(1.6)	-	灰	体部ロクロナデ、底側面鋭削り、底部回転糸切り	ロクロナデ			
1-28	8	-	白磁	碗	16.0	(3.3)	-	(胎)明オリーブ灰	-	-			
1-29	6	-	丹波焼	甕	56.0	(7.9)	-	にぶい赤橙	ロクロナデ	ロクロナデ			
2-1	84	第2区	井戸1	土師器	坏	13.2	3.4	-	淡黄	口縁部手なで、体部未調整、底部板目圧痕	手なで	歪みあり	
2-2	85			〃	小皿	8.2	1.5	-	浅黄橙	口縁部手なで、体部未調整	手なで	灯明痕跡あり	
2-3	86			須恵器	山茶碗	-	(1.7)	-	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	重ね焼き痕あり	
2-W1	144			井戸1	木製品	用途不明木製品	残存長21.5cm、最大径1.4cm、先端部を削り込む		-	-	-	-	保存未処理
2-4	88			井戸2	丹波焼	すり鉢	-	(4.6)	-	褐	口縁部ロクロナデ	すり目(7本以上/一単位)	
2-5	87				〃	甕	-	(4.1)	-	黄褐	ロクロナデ	ロクロナデ	
2-6	90				陶器	碗	-	(2.9)	4.8	淡黄	-	-	
2-7	89				丹波焼	すり鉢	-	(3.1)	16.4	褐	なで	すり目(7本以上/一単位)	
2-8	91				柴付	皿	-	(3.0)	17.0	(胎)灰白	体部圏線3条、底部圏線1条	草花文	
2-9	64				土師器	小皿	10.0	(1.7)	-	黄橙	口縁部手なで、体部未調整	手なで	京都系土師器
2-10	67	〃	〃	10.2	(2.3)	-	黄橙	口縁部手なで、体部未調整	手なで	京都系土師器			
2-11	65	〃	皿	-	(2.8)	-	黄橙	口縁部手なで、体部未調整	手なで	京都系土師器			
2-12	66	〃	〃	15.0	(2.5)	-	黄橙	口縁部手なで、体部未調整	手なで	京都系土師器			
2-13	68	〃	小皿	7.5	1.6	-	黄橙	体部指頭圧痕	手なで	灯明痕跡あり			
2-14	70	溝1	〃	土壺	25.0	(5.3)	-	明赤褐	口縁部横なで、体部なで	体部なで			
2-15	71		〃	土釜	21.6	(8.3)	-	にぶい褐	口縁部横なで、体部平行叩き(3/10)	体部なで	外面煤付着		
2-16	72		〃	土壺	33.0	(5.9)	-	橙	口縁部横なで、体部平行叩き(4/10)	体部なで	外面煤付着		
2-17	73		須恵器	山茶碗	15.0	(2.4)	-	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部重ね焼き痕あり		
2-18	74		〃	こね鉢	-	(2.5)	-	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部重ね焼き痕あり		
2-19	69		丹波焼	甕	-	(2.5)	-	橙	ロクロナデ	ロクロナデ			
2-20	75		土師器	小皿	7.8	1.5	-	黄橙	口縁部手なで、体部未調整	手なで			
2-21	76		〃	皿	11.0	(2.4)	-	橙	口縁部手なで、体部未調整	手なで			

註

- 1) 別府洋二『茂利・宮の西遺跡』兵庫県文化財調査報告第370冊 兵庫県教育委員会 2010
- 2) 『地誌 播磨鑑』播磨史籍刊行会 1983 復刻
- 3) 『中町誌』中町役場 1954
- 4) 実見に際し、荘厳寺住職 堀井隆海氏、前住職 桂 義一氏にお世話になった。
- 5) 桑村 寛「近世村々の成立」『中町史』中町役場 1991

参考文献

- ・森田 勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No2 日本貿易陶磁研究会 1982
- ・上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No2 日本貿易陶磁研究会 1982
- ・小野正敏「15～16世紀の柴付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No2 日本貿易陶磁研究会 1982
- ・小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年の研究」『研究紀要』第3号 京都市埋蔵文化財研究所 1996
- ・長谷川 眞「丹波」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～資料集』中央大学文学部 日本史学研究室 2005
- ・乗岡 実「備前」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～資料集』中央大学文学部 日本史学研究室 2005



作業風景

遺物番号	実測番号	調査区	出土遺構	器種		法量 (cm)			色調	成形・調整等		備考
				種類	器種	口径	器高	底・脚径		内面		
									外面	内面		
2-22	80	第2区	溝2	土師器	すり鉢	-	-	-	橙	なで	横方向刷毛(7/10)後すり目(7本以上/一単位)	
2-23	77			〃	土釜	19.6	(3.5)	-	橙	口縁部横なで、体部平行叩き(3/10)	体部横なで	
2-24	78			〃	〃	-	(5.3)	-	橙	口縁部横なで、体部平行叩き(3/10)	体部刷毛(5/10)	
2-25	79			〃	〃	-	(4.5)	-	橙	口縁部横なで、体部横なで	体部横なで	
2-26	81			須恵器	山茶碗	15.6	(2.6)	-	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	
2-27	83			灰釉陶器	香炉	10.8	(3.2)	-	(藍)オリーブ灰	-	ロクロナデ	
2-28	82			〃	碗	-	(2.4)	-	(藍)オリーブ灰	-	-	
2-29	26			土師器	すり鉢	-	(2.9)	-	にぶい橙	横なで	体部横方向刷毛(7/10)	
2-30	27			白磁	皿	-	(2.2)	-	(胎)灰白	-	-	多角坏
2-31	29			土師器	土塼	31.4	(9.2)	-	橙	口縁部横なで、体部平行叩き(3/10)	体部横なで	
2-32	28		〃	小皿	8.0	(1.3)	-	橙	未調整	手なで		
2-33	34		須恵器	蓋	16.0	(2.5)	-	灰	口縁部ロクロナデ、天井部鋭切り後ロクロナデ	ロクロナデ	重ね焼き痕あり	
2-34	45		〃	坏	10.4	4.0	7.4	灰	口縁部ロクロナデ、底部鋭切り	ロクロナデ	外面体部墨書あり(判読不明)	
2-35	32		〃	〃	15.2	(2.2)	12.6	灰	口縁部ロクロナデ、底部鋭切り	ロクロナデ		
2-36	31		〃	〃	16.8	(3.9)	-	灰	ロクロナデ	ロクロナデ		
2-37	42		土師器	皿	12.0	(2.5)	-	浅黄橙	口縁部手なで、体部未調整	手なで	歪みあり	
2-38	41		〃	〃	12.5	2.6	-	にぶい橙	口縁部手なで、体部未調整	手なで	歪みあり	
2-39	44		須恵器	山茶碗	16.4	(3.2)	-	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部重ね焼き痕あり	
2-40	43		〃	〃	15.4	(2.4)	-	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部重ね焼き痕あり	
2-41	39		〃	坏	-	(1.6)	9.0	灰	体部ロクロナデ、底部鋭切り	ロクロナデ		
2-42	33		〃	〃	15.6	(3.4)	-	オリーブ灰	ロクロナデ	ロクロナデ		
2-43	38		〃	〃	-	(2.9)	9.0	灰	体部ロクロナデ、底面調整、底部鋭切り	ロクロナデ		
2-44	37		〃	山茶碗	-	(1.8)	5.2	灰	体部ロクロナデ、底部回転条切り	ロクロナデ		
2-45	40		〃	壺	-	(4.1)	-	灰	ロクロナデ	ロクロナデ		
2-46	36		土師器	小皿	7.7	(1.6)	-	橙	口縁部手なで、体部未調整	手なで	歪みあり	
2-47	46		青磁	碗	-	(3.5)	-	(藍)灰オリーブ	-	-		
2-48	231		土師器	小皿	9.0	(1.7)	-	浅黄橙	未調整	手なで		
2-49	232		〃	〃	9.0	(1.7)	-	にぶい褐	未調整	手なで		
2-50	233		〃	〃	-	(2.2)	-	にぶい橙	未調整	手なで		
2-51	230		〃	〃	8.0	1.7	-	橙	口縁部手なで、体部未調整	手なで		
2-52	235		〃	皿	-	(2.1)	-	にぶい橙	口縁部手なで、体部未調整	手なで	京都系土師器	
2-53	234		〃	〃	-	(1.6)	-	にぶい橙	口縁部手なで、体部未調整	手なで	京都系土師器	
2-54	236		〃	土釜	19.2	(6.9)	-	にぶい黄橙	口縁部横なで、体部平行叩き(4/10)	体部横なで		
2-55	237		須恵器	こね鉢	26.0	(5.9)	-	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部重ね焼き痕あり	
2-56	241		〃	壺	-	-	-	灰	羽状叩き	青海波文		
2-57	242		灰釉陶器	平碗	15.4	(5.2)	-	灰白	体部回転鋭削り	-		
2-58	240		青磁	碗	16.4	(7.4)	-	(胎)明緑灰	底部軸剥ぎ取り	-		
2-59	243		白磁	小皿	9.2	(2.1)	-	(胎)灰白	-	-	二次焼成のため釉剥離	
2-60	239		〃	〃	11.2	(1.9)	-	(胎)灰白	-	-	断面に補修痕(膠?)	
2-61	238		〃	〃	11.4	(2.4)	-	(胎)灰白	-	-		
2-F1	249		鉄製品	釘	残存長5.8cm、頭部折り曲げ						保存未処理	
2-F2	250		〃	〃	残存長4.2cm						保存未処理	
2-62	245		溝22	土師器	土釜	21.8	(3.5)	-	黒褐	横なで	体部(麓)なで	
2-63	244		須恵器	山茶碗	-	(1.6)	6.0	灰	体部ロクロナデ、底部回転条切り	ロクロナデ		
2-64	247		土師器	皿	-	(2.9)	-	にぶい橙	横なで	横なで	手の字状口縁	
2-65	248		溝23	須恵器	山茶碗	-	(1.4)	5.4	灰	体部ロクロナデ、底部回転条切り	ロクロナデ	
2-66	246		溝25	土師器	土釜	-	(3.3)	-	橙	横なで	体部横なで	
2-67	47	〃	〃	-	(4.4)	-	黄橙	口縁部横なで、体部平行叩き(3/10)	体部横なで			
2-68	48	〃	土錘	全長3.7cm			黄灰	なで	-			
2-69	49	須恵器	こね鉢	-	(3.9)	-	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部重ね焼き痕あり		
2-70	50	丹波焼	壺	-	(6.0)	-	明赤褐	ロクロナデ	ロクロナデ			
2-71	52	〃	〃	-	(26.7)	19.0	暗褐	なで	なで			
2-72	51	備前焼	壺	14.6	(13.7)	-	外・暗褐、内・灰白	ロクロナデ、肩部に髷目文(7本以上/一単位)	ロクロナデ			
2-73	57	土坑8	土師器	小皿	9.2	(1.7)	-	橙	未調整	手なで		
2-74	58	土坑9	土師器	土釜	20.6	(4.4)	-	にぶい橙	口縁部横なで、体部平行叩き(3/10)	体部横なで		
2-75	59	染付	碗	9.7	7.1	5.0	(胎)灰白	寿字文	-			
2-76	60	丹波焼	すり鉢	-	(3.5)	13.4	褐	なで	すり目(7本/一単位)			
2-77	61	土坑10	染付	碗	-	(3.0)	4.3	(胎)灰白	色絵	-		
2-78	62	瓦	丸瓦	全長31.8cm			暗灰	凸面-縦方向の(板)なで	凹面-ムシロ目	外面煤付着		
2-51	63	石白	上白	復元径36cm、高さ7.6cm			-	引き手差し込み孔あり	-	凝灰岩製		
2-79	224	土坑21	白磁	皿	15.0	(2.0)	-	(胎)灰白	-	-		
2-80	225	土坑22	須恵器	坏	-	(1.2)	7.6	灰	ロクロナデ	底部仕上げなで		
2-81	210	土師器	小皿	6.0	1.4	-	橙	未調整	手なで			
2-82	209	〃	〃	7.0	(1.6)	-	橙	未調整	手なで	灯明痕跡あり		
2-83	201	〃	〃	8.2	1.5	-	橙	未調整	手なで			
2-84	206	〃	〃	8.6	2.0	-	にぶい橙	未調整	手なで	歪みあり		
2-85	203	〃	〃	8.8	(1.5)	-	外・橙、内・褐灰	未調整	手なで			
2-86	202	〃	〃	8.8	(1.6)	-	橙	未調整	手なで			
2-87	204	〃	〃	8.4	1.7	6.2	浅黄橙	未調整	手なで			
2-88	211	〃	〃	-	(1.7)	-	浅黄橙	未調整	手なで	歪みあり		
2-89	207	〃	皿	9.6	(1.6)	-	浅黄橙	未調整	手なで			
2-90	212	〃	〃	10.0	1.9	-	橙	未調整、指頭圧痕顕著	手なで			
2-91	208	〃	〃	10.0	(1.9)	-	浅黄橙	未調整	手なで			
2-92	205	〃	〃	9.2	2.4	-	褐灰	未調整	手なで			
2-93	213	〃	〃	13.0	(2.3)	-	橙	口縁部手なで、体部未調整	手なで	京都系土師器		
2-94	214	〃	小壺	-	(3.9)	-	にぶい黄橙	口縁部横なで、体部横なで	体部横なで	外面煤付着		
2-95	217	〃	土釜	-	(5.6)	-	橙	口縁部横なで、体部平行叩き?	体部横なで			

遺物番号	実測番号	調査区	出土遺構	器種		法量 (cm)			色調	成形・調整等		備考
				種類	器種	口径	器高	底・脚径		内面		
									外面	内面		
2-96	218	第2区	土坑28	土師器	土塼	20.0	(6.8)	-	外・黒褐、内・橙	口縁部横なで、体部平行叩き(3/10)	体部当て具痕	
2-97	215			〃	〃	21.0	(7.2)	-	にぶい褐	口縁部横なで、体部平行叩き(3/10)	体部横なで	外面煤付着
2-98	219			〃	〃	-	(4.4)	-	にぶい黄橙	口縁部横なで、体部平行叩き(2/10)	体部横なで	外面煤付着
2-99	216			〃	〃	28.0	(9.5)	-	橙	口縁部横なで、体部平行叩き(2/10)	体部下半部刷毛(5/10)	外面煤付着
2-100	223			灰釉陶器	おろし皿	20.8	(3.6)	-	暗赤褐	ロクロナデ	おろし目	
2-101	221			青磁	碗	-	(4.3)	5.4	(胎)灰白	-	-	
2-102	222			備前焼	すり鉢	31.0	(11.8)	-	にぶい赤褐	ロクロナデ	すり目(9本/一単位)	最下部粘土継ぎ目で剥落
2-103	226			土師器	土釜	-	(4.6)	-	橙	口縁部横なで、体部平行叩き(3/10)	体部横なで	
2-104	227			須恵器	山茶碗	-	(2.1)	-	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	
2-S2	228			石製品	砥石	残存長10.2cm			-	-	-	砂岩製、2次焼成
2-105	229		土坑31	瓦質土器	火鉢	40.0	17.5	-	暗灰	口縁部横なで、体部中位なで、下部鈍磨き、脚台部鈍磨き、輪花状スタンプ文	口縁部鈍なで、体部中位指頭圧痕、下部鈍削り	脚台個数不明
2-106	112		独立柱建物1P76	土師器	皿	-	(2.3)	-	にぶい橙	口縁部手なで、体部未調整	手なで	
2-107	108		独立柱建物3P66	〃	小皿	8.0	(1.0)	-	橙	未調整	手なで	
2-108	100		独立柱建物3P37	須恵器	壺	42.0	(9.6)	-	灰	口縁部横なで、体部平行叩き(3/10)後羽状叩き	頭部鈍なで、体部横なで	
2-109	30		独立柱建物4P107	備前焼	壺	14.0	(5.1)	-	にぶい赤褐	横なで、肩部自然釉溶着	横なで	
2-110	125		須恵器	蓋	20.0	(2.7)	-	黄灰	口縁部ロクロナデ、天井部鋭切り	天井部仕上げなで	口縁部重ね焼き痕あり	
2-111	134		〃	〃	18.8	(1.6)	-	にぶい黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部重ね焼き痕あり	
2-112	127		〃	坏	16.6	(6.7)	9.9	灰	ロクロナデ	ロクロナデ		
2-113	124		〃	〃	-	(4.6)	10.0	外・にぶい褐、内・灰	ロクロナデ	ロクロナデ	内面墨痕あり	
2-114	123		〃	〃	-	(1.7)	9.2	灰	ロクロナデ、底部鋭切り	ロクロナデ		
2-115	120		〃	〃	13.0	2.8	9.4	褐灰	口縁部ロクロナデ、底部鋭切り	ロクロナデ		
2-116	121		〃	〃	14.6	2.9	11.0	灰黄	口縁部ロクロナデ、底部鋭切り	底部仕上げなで		
2-117	118		〃	〃	15.6	(2.6)	12.2	灰	口縁部ロクロナデ、底部鋭切り	ロクロナデ		
2-118	126		〃	〃	15.6	2.2	12.2	灰	口縁部ロクロナデ、底部鋭切り	底部仕上げなで		
2-119	119		〃	〃	15.6	2.3	12.2	にぶい黄橙	口縁部ロクロナデ、底部鋭切り	ロクロナデ		
2-120	122		〃	〃	14.4	(2.5)	-	褐～黄灰	ロクロナデ	ロクロナデ		
2-121	117		土師器	〃	-	(1.4)	6.6	橙	体部ロクロナデ、底部鋭切り	ロクロナデ		
2-122	135		須恵器	壺	28.0	(7.1)	-	灰	口縁部ロクロナデ、体部平行叩き(4/10)後なで	体部青海波文		
2-123	138		〃	蓋	16.4	(1.3)	-	灰	口縁部ロクロナデ、天井部鋭切り	天井部仕上げなで	口縁部重ね焼き痕あり	
2-124	139		〃	〃	16.0	(1.6)	-	灰	口縁部ロクロナデ、天井部鋭切り	ロクロナデ	口縁部重ね焼き痕あり	
2-125	140		〃	〃	-	(1.9)	-	灰褐	口縁部ロクロナデ、天井部鋭切り	ロクロナデ	口縁部重ね焼き痕あり	
2-126	141		〃	後碗	16.0	(4.3)	-	外・オリーブ黒、内・灰	ロクロナデ	ロクロナデ		
2-127	136		〃	坏	17.2	2.7	14.4	灰	口縁部ロクロナデ、底部鋭切り	ロクロナデ		
2-128	137		〃	〃	-	(1.8)	15.2	灰	体部ロクロナデ、底部鋭切り	底部仕上げなで		
2-129	146		〃									

遺物番号	実測番号	調査区	出土遺構	器種		法量 (cm)			色調	成形・調整等		備考	
				種類	器種	口径	器高	底・脚径		外面	内面		
2-170	277	第2区	P299	土師器	小皿	-	2.2	-	浅黄橙	未調整	手なで		
2-171	288			〃	〃	7.0	(1.3)	-	にぶい黄橙	未調整	手なで	重みあり	
2-172	304			白磁	皿	-	(1.9)	-	(胎)灰白	-	-	-	
2-173	306			須恵器	山茶碗	15.6	(1.6)	-	灰	口ロナデ	口ロナデ		
2-53	369			石製品	砥石	残存長10.9cm		-	灰白	擦り切り技法による切断	凝灰岩製		
2-174	270			P264	土師器	小皿	8.8	(2.2)	-	にぶい黄橙	口縁部手なで、体部未調整	手なで	
2-175	283			P277	〃	〃	8.6	2.0	-	橙	未調整	手なで	
2-176	294			P304	須恵器	山茶碗	-	(1.3)	-	灰	体部口ロナデ、底部鈍切り	口ロナデ	
2-177	35			T-20.P1	〃	壺	9.4	-	-	灰	口ロナデ	口ロナデ	
2-178	9				〃	甕	24.4	(7.8)	-	灰	口ロナデ	口ロナデ	
2-179	92				P2	青花	皿	13.6	2.9	5.8	(胎)灰白	圏線2条	草花文
2-180	93			染付		碗	9.6	(3.4)	-	(胎)灰白	馬の目文	-	
2-181	94			P9	土師器	土錘	全長3.5cm		-	灰黄	なで	-	
2-182	95			P10	陶器	唐津皿	14.0	(1.8)	-	にぶい橙	口ロナデ、釉色灰オリーブ	口ロナデ	
2-183	96			P20	丹波焼	すり鉢	-	(3.7)	-	灰黄	口ロナデ	口ロナデ、甕状工具によるすり目	
2-184	97			P36	土師器	小皿	7.6	1.0	-	浅黄橙	未調整	手なで	重みあり
2-185	107			P55	青磁	碗	-	(6.8)	-	(胎)灰白	鈍描文様不明	鈍描文様不明	
2-186	114			P108	〃	〃	16.0	(2.2)	-	(胎)灰白	雷文	-	
2-187	98			P42	備前焼	すり鉢	-	-	-	灰	口ロナデ	すり目(8本/一単位)	
2-188	99				須恵器	甕	-	-	-	灰白	羽状叩き	口ロナデ	
2-189	101			土師器	小皿	8.0	1.9	-	浅黄橙	指頭圧痕	手なで	重みあり	
2-190	102				〃	〃	7.8	1.8	-	浅黄橙	未調整、底部板目圧痕	手なで	
2-191	103			〃	〃	〃	7.8	1.4	-	橙	未調整	手なで	重みあり
2-192	104				〃	〃	8.0	1.6	-	橙	未調整	手なで	
2-193	105			P46	〃	〃	8.4	(1.3)	-	淡黄	未調整、底部板目圧痕	手なで	
2-194	54				〃	〃	8.5	(1.2)	-	浅黄橙	未調整	手なで	
2-195	55				〃	〃	7.8	(1.8)	-	淡黄	未調整	手なで	
2-196	56				〃	皿	-	(2.5)	-	橙	不明	手なで	
2-197	53			〃	〃	-	(2.5)	-	橙	未調整?	手なで		
2-198	110			P71	瓦質土器	羽釜	-	(4.6)	-	暗灰	鈔部横なで、鈔部を挟み込むように粘土補充、補充粘土に葉脈圧痕残存。体部鈍削り	刷毛(8/10)	
2-199	111			P75	丹波焼	すり鉢	-	-	-	浅黄橙	口ロナデ	甕状工具によるすり目	
2-200	113			P100	土師器	土釜	-	(3.4)	-	橙	横なで	横なで	外面煤付着
2-201	115			P131	須恵器	山茶碗	17.4	(2.5)	-	灰	口ロナデ、墨書あり(判読不明)	口ロナデ	口縁部重ね焼き痕あり
2-202	128			P152	土師器	山茶碗	-	(1.9)	5.2	淡黄	体部口ロナデ、底部回転系切り	口ロナデ	口クロ回転時計回り
2-203	132			P166	須恵器	鉄鉢形	-	-	-	灰白	上部鈍磨き、下部口ロナデ	口ロナデ	
2-204	133			P168	〃	蓋	18.6	(1.7)	-	灰	口ロナデ	口ロナデ	
2-205	252			P182	〃	山茶碗	-	(1.1)	6.4	灰	口ロナデ、底部回転系切り	口ロナデ	口クロ回転時計回り
2-206	268			P240	土師器	土釜	-	(4.9)	-	橙	口縁部横なで、体部平行叩き(3/10)	体部刷毛(6/10)	
2-207	253			P191	〃	小皿	7.4	(1.0)	-	にぶい黄橙	未調整	手なで	重みあり
2-208	263			P222	〃	皿	-	(1.6)	-	浅黄橙	不明	不明	
2-209	266			P236	備前焼	すり鉢	-	-	-	にぶい赤褐	口ロナデ	すり目(7本/一単位)	
2-210	274			P253	〃	〃	-	(8.5)	-	灰	口ロナデ	すり目(4本以上/一単位)	
2-211	264			P224	土師器	皿	9.8	(2.3)	-	橙	不明	手なで	
2-212	269			P242	〃	〃	13.0	(2.4)	-	にぶい橙	口縁部手なで、体部未調整	手なで	京都系土師器
2-213	276			P267	〃	小皿	-	(1.5)	-	にぶい黄橙	未調整	手なで	
2-214	275			P262	〃	土釜	-	(4.3)	-	にぶい黄橙	横なで	体部なで	外面煤付着
2-215	278	P273	〃	土塙	18.0	(4.4)	-	橙	口縁部横なで、体部平行叩き(3/10)	体部刷毛(6/10)			
2-216	280	P276	〃	〃	-	(4.4)	-	橙	口縁部横なで、体部平行叩き(3/10)	体部なで	外面煤付着		
2-217	281	P285	〃	土釜	-	(4.7)	-	にぶい赤褐	口縁部横なで、体部平行叩き(3/10)	体部なで			
2-F3	255	P194	銭貨	銅銭	径2.2cm		-	-	紹聖元宝(北宋、1094年初鑄)か	-	保存不良、保存未処理		
2-218	282	P281	陶器	唐津皿	11.0	(2.7)	-	(胎)にぶい黄橙	-	-			
2-219	279		土師器	すり鉢	-	(1.6)	13.0	黄灰	底側面鈍削り、底部回転系切り	刷毛(7/10)、炭化物付着			
2-220	284	〃	小皿	7.8	2.0	-	橙	未調整	手なで				
2-221	285	P289	〃	〃	8.8	(2.0)	-	橙	未調整	手なで	京都系土師器		
2-222	286		〃	〃	-	(1.9)	-	にぶい橙	口縁部手なで、体部未調整	手なで			
2-223	290		〃	土釜	20.0	(6.3)	-	橙	口縁部横なで、体部平行叩き(3/10)	体部なで	外面煤付着		
2-224	287	P291	〃	皿	14.4	(2.5)	-	にぶい黄橙	口縁部手なで、体部未調整	手なで	京都系土師器		
2-225	289	P294	〃	〃	-	(3.0)	-	にぶい黄橙	口縁部手なで、体部未調整	手なで			
2-226	296	P310	〃	小皿	7.8	(1.7)	-	にぶい橙	未調整	手なで	重みあり		
2-227	298	P311	〃	皿	-	(2.1)	-	にぶい黄橙	口縁部手なで、体部未調整	手なで	京都系土師器		
2-228	297		〃	〃	-	(2.4)	-	橙	不明	不明			
2-229	299	P313	〃	土釜	22.2	(5.1)	-	明赤褐	口縁部横なで、体部平行叩き(3/10)	体部なで、炭化物付着			
2-230	300	P314	〃	小皿	7.0	(1.5)	-	橙	未調整	手なで	重みあり		
2-231	301	P316	〃	〃	6.6	(1.4)	-	にぶい褐	未調整	手なで	重みあり		
2-232	310	P329	〃	皿	12.8	(2.5)	-	浅黄橙	口縁部手なで、体部未調整	手なで			
2-233	311	P330	〃	小皿	8.7	(1.9)	-	浅黄橙	未調整	手なで	重みあり		
2-234	316	P350	〃	土塙	30.4	(6.7)	-	暗褐	口縁部横なで、体部平行叩き(3/10)	体部なで	外面煤付着		
2-235	303	P319	白磁	壺?	-	-	-	(胎)灰白	-	-			
2-236	309	P324	須恵器	こね鉢	-	(4.2)	-	灰	口ロナデ	口ロナデ	口縁部重ね焼き痕あり		
2-237	317	P349	土師器	小皿	8.6	(2.0)	-	にぶい黄橙	未調整	手なで	重みあり		
2-238	320		〃	〃	〃	8.0	(2.1)	-	浅黄橙	未調整	手なで	重みあり	
2-239	318	〃	〃	〃	8.0	(1.7)	-	橙	未調整	手なで	重みあり		
2-240	322	P351	〃	〃	8.0	(1.2)	-	浅黄橙	口縁部手なで、体部未調整	手なで	京都系土師器		
2-241	319		〃	皿	-	(2.2)	-	浅黄橙	未調整	手なで			
2-242	323		〃	〃	-	(2.5)	-	浅黄橙	未調整	手なで			
2-243	321		〃	〃	13.0	(2.2)	-	浅黄橙	口縁部手なで、体部未調整	手なで	重みあり、京都系土師器		
2-244	324	〃	土塙	-	(3.2)	-	橙	横なで	横なで	外面煤付着			

遺物番号	実測番号	調査区	出土遺構	器種		法量 (cm)			色調	成形・調整等		備考		
				種類	器種	口径	器高	底・脚径		外面	内面			
2-245	220	第2区	P351	丹波焼	すり鉢	-	(5.4)	11.2	淡黄	体部口ロナデ、底部回転系切り	甕状工具によるすり目	口クロ回転時計回り、2次焼成ため剥落顕著		
2-246	312			P334	土師器	皿	10.0	(1.9)	-	橙	未調整	手なで	重みあり	
2-247	325			P352	〃	〃	-	(2.1)	-	浅黄橙	口縁部手なで、体部未調整	手なで	京都系土師器	
2-248	326			P355	〃	〃	-	(1.5)	-	にぶい黄橙	口縁部手なで、体部未調整	手なで	京都系土師器	
2-249				欠番										
2-250	327			P362	〃	皿	-	(2.7)	-	浅黄橙	口縁部手なで、体部未調整	手なで	京都系土師器	
2-251	329				P356	須恵器	蓋	16.0	(1.4)	-	灰白	口ロナデ	口ロナデ	
2-252	328			灰釉陶器		碗	-	(2.2)	-	(胎)灰白	-	-		
2-253	332			P375	土師器	皿	13.0	(1.8)	-	にぶい黄橙	口縁部手なで、体部未調整	手なで		
2-254	335			P379	〃	〃	12.4	(2.6)	-	にぶい褐	口縁部手なで、体部未調整	手なで	なで方向時計回り	
2-255	334				〃	〃	-	(3.1)	-	橙	口縁部手なで、体部未調整	手なで		
2-256	346			P386	〃	小皿	7.0	(1.3)	-	にぶい黄橙	未調整	手なで		
2-257	344			P381	〃	〃	7.0	(1.1)	-	橙	未調整	手なで	重みあり	
2-258	336				須恵器	甕	-	-	-	灰	羽状叩き	なで		
2-259	339			P384	土師器	小皿	7.4	(1.7)	-	にぶい褐	未調整	刷毛(5/10)		
2-260	340				〃	〃	8.0	(1.6)	-	橙	未調整	手なで		
2-261	338				〃	〃	7.6	(1.3)	-	橙	未調整	手なで		
2-262	337				〃	〃	8.0	(1.8)	-	にぶい黄橙	未調整	手なで		
2-263	341				〃	皿	10.6	(2.8)	-	橙	口縁部手なで、体部未調整	手なで		
2-264	342				〃	〃	12.4	(2.4)	-	灰白	未調整	刷毛(5/10)		
2-265	343				〃	〃	13.4	(2.4)	-	にぶい褐	口縁部手なで、体部未調整	手なで	京都系土師器	
2-266	347				〃	〃	-	(1.7)	-	橙	口縁部手なで、体部未調整	手なで	京都系土師器	
2-267	348				P355.P389	〃	土釜	18.6	(4.8)	-	にぶい黄橙	口縁部横なで、平行叩き(4/10)	体部刷毛(6/10)	
2-268	350				P403	〃	土錘	全長4.3cm		-	褐灰	なで	-	
2-269	349			P401	灰釉陶器	おろし皿	-	(2.3)	-	(胎)灰白	-	-		
2-270	351			P409	土師器	小皿	6.6	(1.7)	-	にぶい黄橙	未調整	手なで	重みあり	
2-271	352			P410	〃	皿	11.0	(1.8)	-	にぶい黄橙	口縁部手なで、体部未調整	手なで	京都系土師器	
2-272	359			P433	〃	〃	-	(2.2)	-	橙	口縁部手なで、体部未調整	手なで	京都系土師器	
2-273	354			P411	〃	小皿	6.6	(1.5)	-	橙	未調整	手なで	重みあり	
2-274	353				〃	皿	-	(2.3)	-	にぶい黄橙	口縁部手なで、体部未調整	手なで		
2-275	356			P420	須恵器	山茶碗	-	(3.6)	-	灰	口ロナデ	口ロナデ	口縁部重ね焼き痕あり	
2-276	362			P440	〃	〃	16.2	(3.3)	-	灰	口ロナデ	口ロナデ	口縁部重ね焼き痕あり	
2-277	361			P438	〃	〃	-	(2.3)	5.8	灰	体部口ロナデ、底部回転系切り	口ロナデ		
2-278	360			P435	土師器	小皿	7.4	(1.3)	-	にぶい黄橙	未調整	刷毛(6/10)	重みあり	
2-279	364			P444	〃	〃	8.4	1.7	5.6	にぶい黄橙	口縁部口ロナデ、底部回転系切り	口ロナデ		
2-280	365				〃	〃	-	(1.3)	-	にぶい黄橙	未調整	手なで	重みあり	
2-281	363			P443	〃	〃	7.0	(2.0)	-	橙	未調整	手なで		
2-282	367			P449	〃	皿	-	(2.0)	-	淡黄	口縁部手なで、体部未調整	手なで	京都系土師器	
2-283	368			P459	〃	〃	-	(2.3)	-	にぶい黄橙	口縁部手なで、体部未調整	手なで	京都系土師器	
2-284	372			P477	灰釉陶器	おろし皿	14.4	(3.2)	-	灰白	口ロナデ	口ロナデ	脚台個数不明	
2-54	366			P445	石製品	基石	全長1.6cm、重量2g		-	暗灰	-	-		
2-55	345			P385	〃	〃	全長1.9cm、重量4g		-	白	-	-		
2-285	381			-	土師器	高坏	28.0	(3.7)	-	外黒灰、内灰白	口縁部横なで、体部不明	横なで、口縁部下口線1条	須恵器か?	
2-286	383			-	〃	〃	-	(10.8)	13.1	灰白	不明	不明	須恵器か?	
2-287	16			-	〃	製塩土器	-	(4.1)	-	にぶい黄褐	指頭圧痕	なで	不明	

遺物番号	実測番号	調査区	出土遺構	器種		法量 (cm)			色調	成形・調整等		備考	
				種類	器種	口径	器高	底脚径		外面	内面		
2-315	382	第2区	-	土師器	すり鉢	27.0	(4.4)	-	黄灰	ロクロナデ	体部刷毛(8/10)、炭化物付着		
2-316	25		-	瓦質土器	火鉢	35.0	(4.4)	-	灰~暗灰	口縁部横なで、口縁部直下2条の凸線、凸線間に2個1対の三掛文スタンプを巡らせる	横なで		
2-317	384		-	須恵器	山茶碗	-	(1.4)	8.2	灰	体部ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ、見込み仕上げなで	ロクロ回転時計回り	
2-318	11		-	〃	甕	25.4	(8.1)	-	灰	口縁部ロクロナデ、体部平行叩き(4/10)	体部当て具痕		
2-319	386		-	〃	〃	25.6	(4.4)	-	灰	口縁部ロクロナデ、頸部平行叩き(4/10)後ロクロナデ	ロクロナデ		
2-320	21		-	丹波焼	すり鉢	25.2	(5.2)	-	橙	ロクロナデ	籠状工具によるすり目		
2-321	22		-	〃	〃	30.2	(5.6)	-	にぶい赤褐	ロクロナデ	すり目(7本/-単位)		
2-322	387		-	青磁	碗	18.0	(3.6)	-	(胎)灰白	-	-		
2-323	251		P333	鉄釉(東海系)	香炉	10.0	(2.5)	-	(胎)灰白	-	-		
2-S6	24		-	石製品	砥石	残存長7.4cm、最大幅4.2cm			浅黄	上部に0.9mmの穿孔あり		流紋岩製	
2-S7	389		-	〃	碁石	全長1.7cm、重量2g			黒	-		頁岩製	
2-S8	390		-	〃	石鎌	全長2.1cm、重量1g			灰白	凹基式		チャート製	
3-1	2		第3区	-	土師器	土塀	23.0	(4.6)	-	灰	口縁部横なで、体部平行叩き(4/10)	体部なで	還元炎焼成
3-2	3			-	〃	山茶碗	-	(1.5)	5.6	浅黄橙	体部ロクロナデ、底部不明	ロクロナデ	
3-3	6	-		須恵器	坏	13.6	(2.6)	-	灰	ロクロナデ	ロクロナデ		
3-4	7	-		〃	小皿	8.8	(2.2)	-	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部重ね焼き痕あり	
3-5	4	-		〃	山茶碗	-	(1.5)	4.8	灰	体部ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	ロクロ回転時計回り	
3-6	5	-		〃	〃	-	(1.1)	5.4	灰	体部ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	ロクロ回転時計回り	
3-7	8	-		〃	こね鉢	-	(5.6)	-	灰	ロクロナデ	ロクロナデ		
3-8	1	-		青磁	碗	13.4	(2.6)	-	(胎)灰白	-	-		



(南西から)



(南東から)



T-21 (南から)



T-22 (南から)



T-22 P1



T-24 (北から)



T-32 (南東から)



T-42 (北西から)



井戸1



土坑1 (北から)



土坑1土器出土状況



(西から)



(北から)



井戸1



井戸2



溝1断面



溝2断面



溝4断面



溝10・11断面



溝18断面



溝20断面



土坑24 (北から)



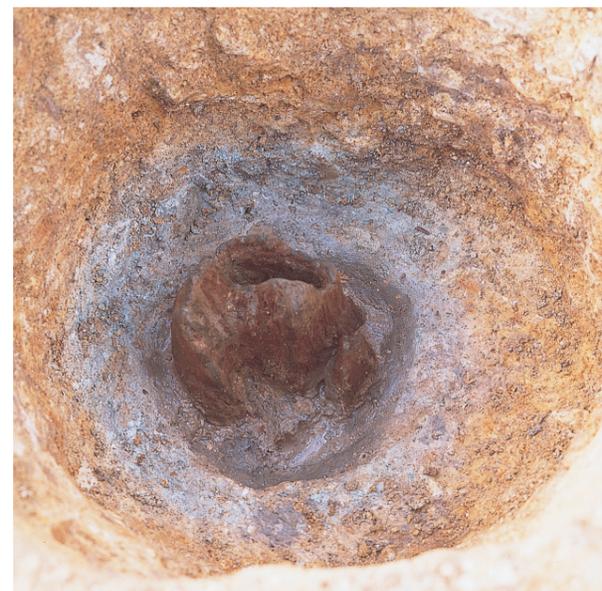
土坑25 (南から)



溝20土器出土状況



掘立柱建物1 P117



掘立柱建物2 P111



掘立柱建物4 P96



掘立柱建物5 P141



掘立柱建物5 P172



掘立柱建物5 P174



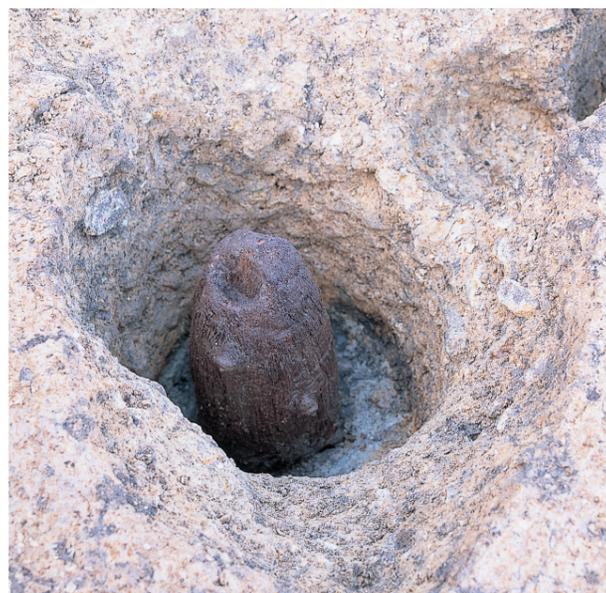
掘立柱建物9 P200



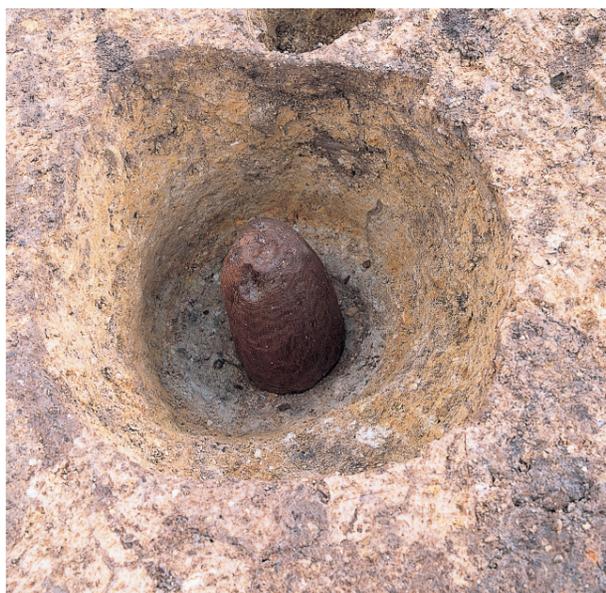
P157



P277



掘立柱建物10 P323



掘立柱建物10 P326



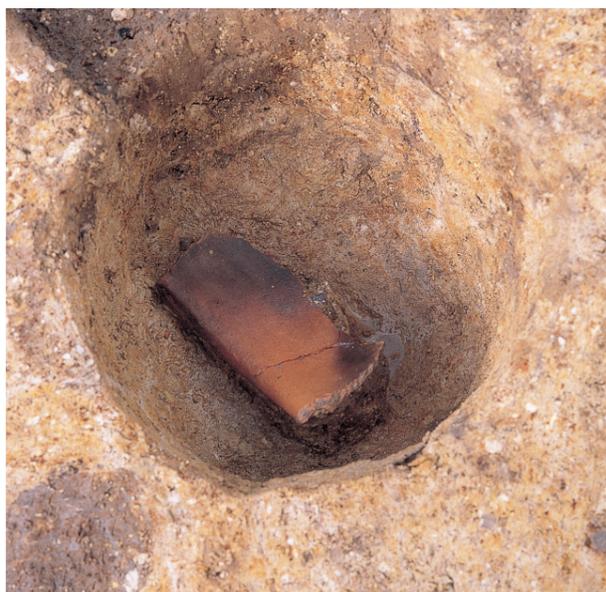
P53



P3



P54



P68



P264



P304



掘立柱建物1~4及び区画溝 (西から)



第2区B北側 (東から)



掘立柱建物1~4及び区画溝 (南東から)



第2区B南側 (東から)



第2区A全景(西から)



第2区B全景(南から)



第2区A全景(東から)



第2区B全景(北から)



(西から)



(東から)



1-1



1-22



2-1



1-6
(S=1:5)



2-13



2-20



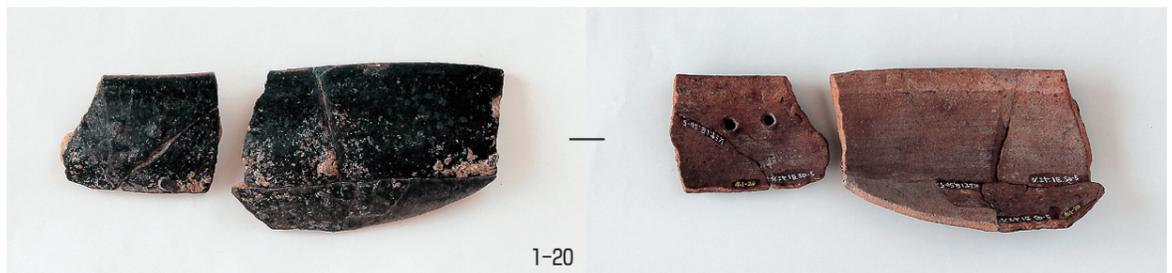
2-51



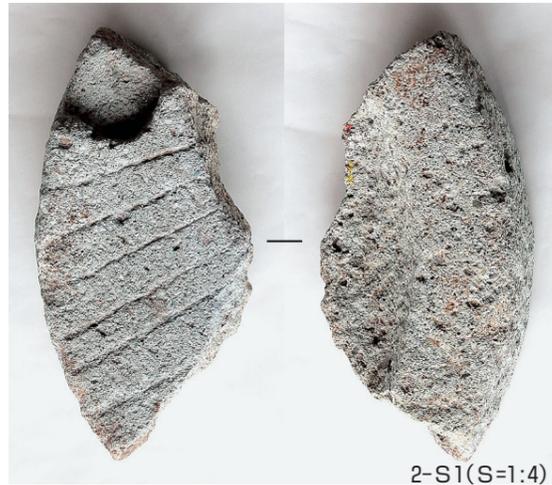
2-90

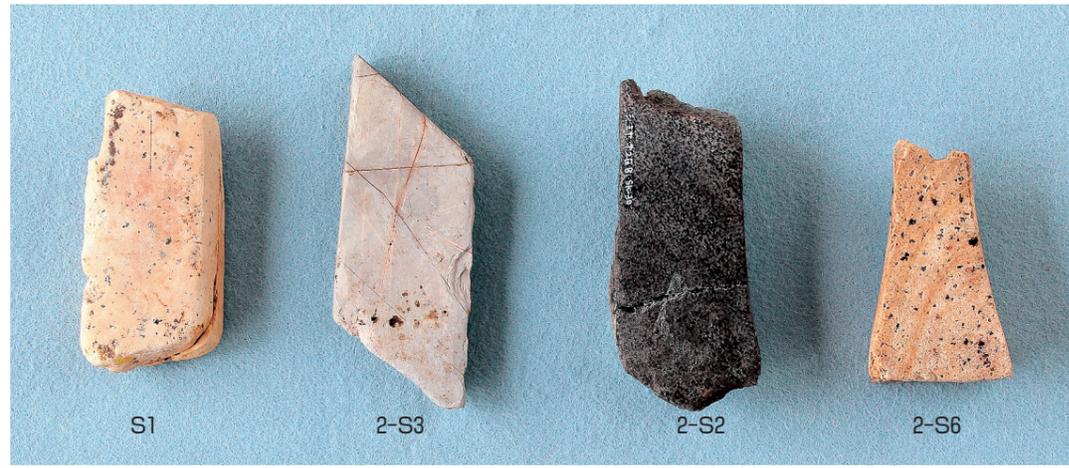


1-10
(S=1:5)



1-20

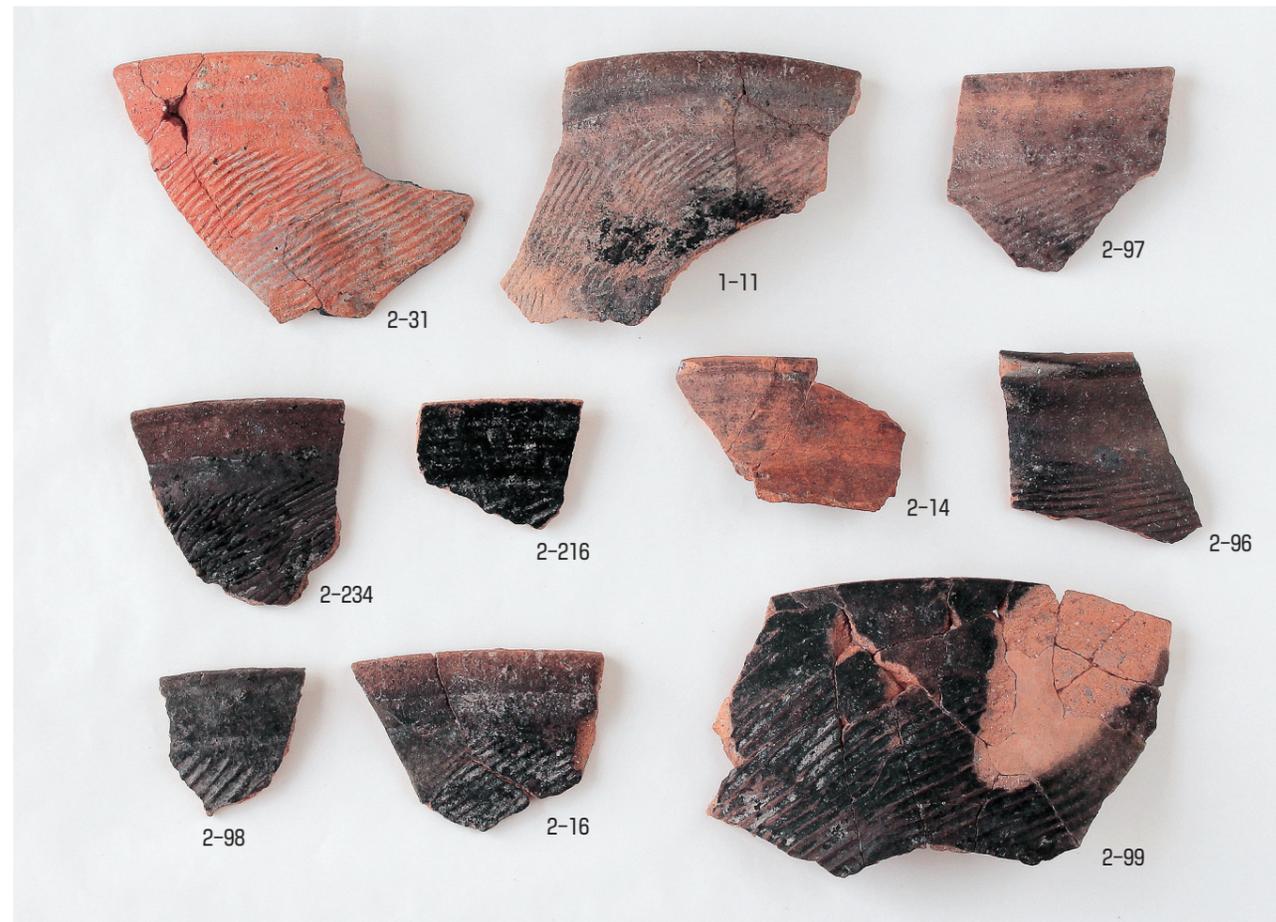


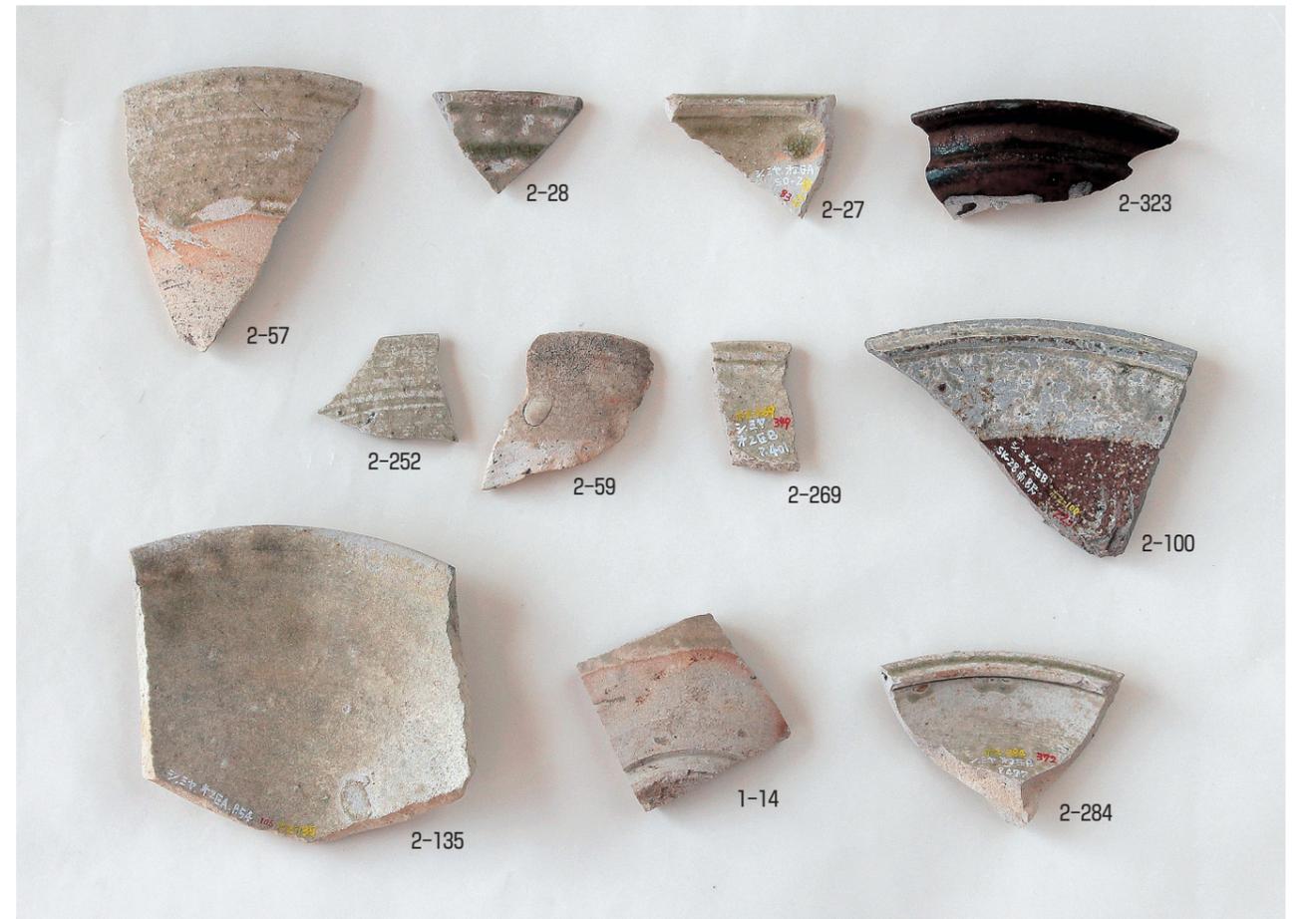
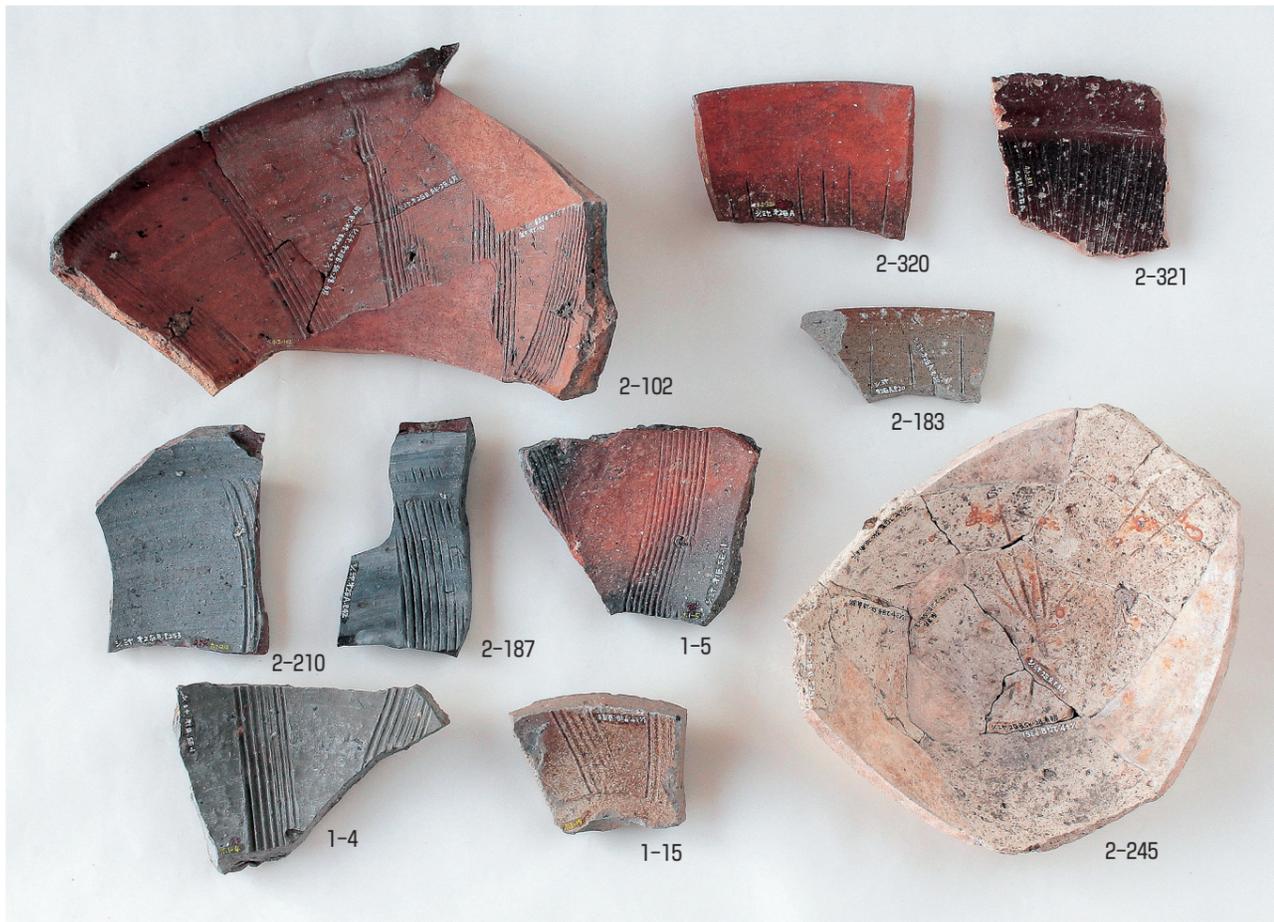
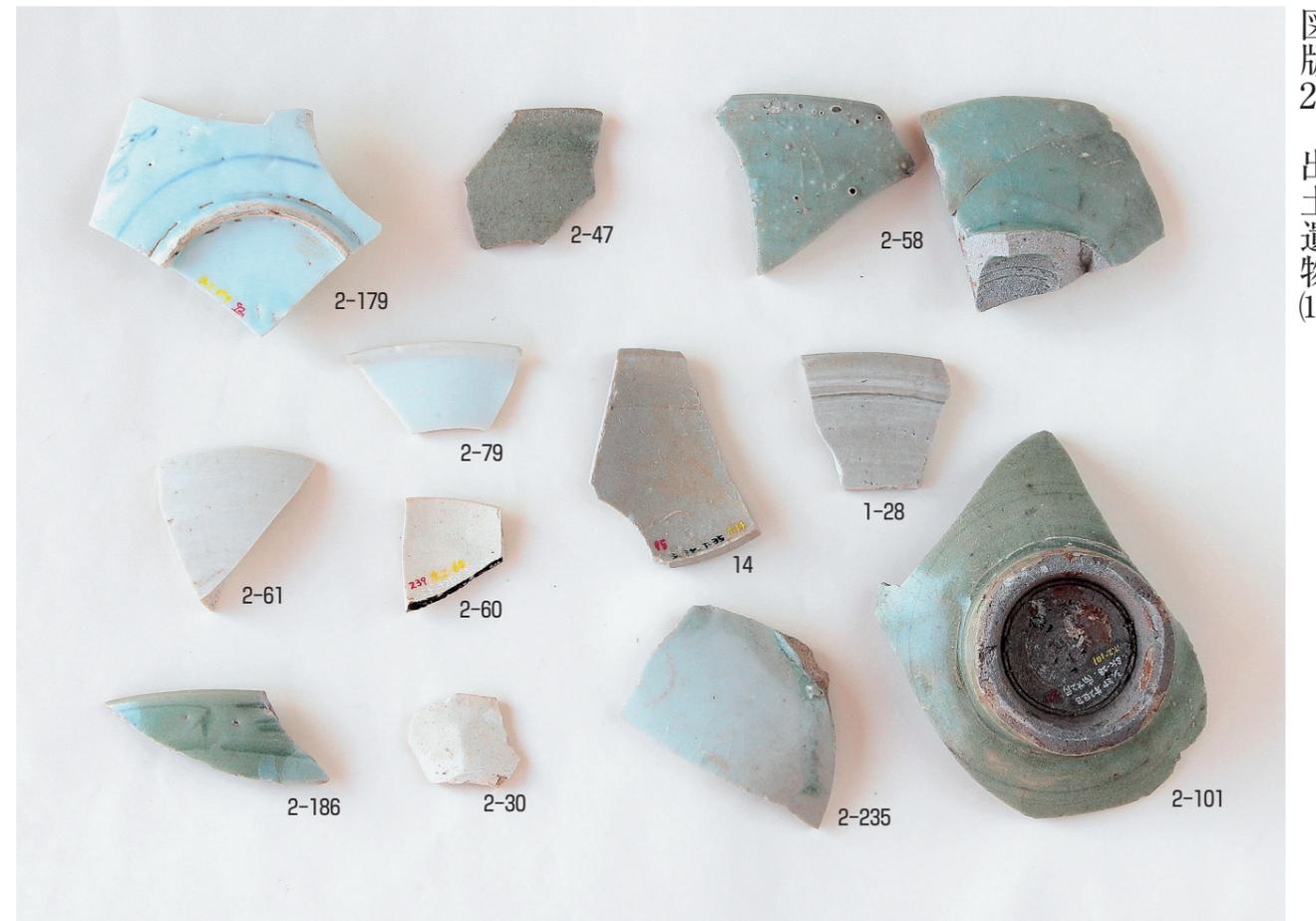
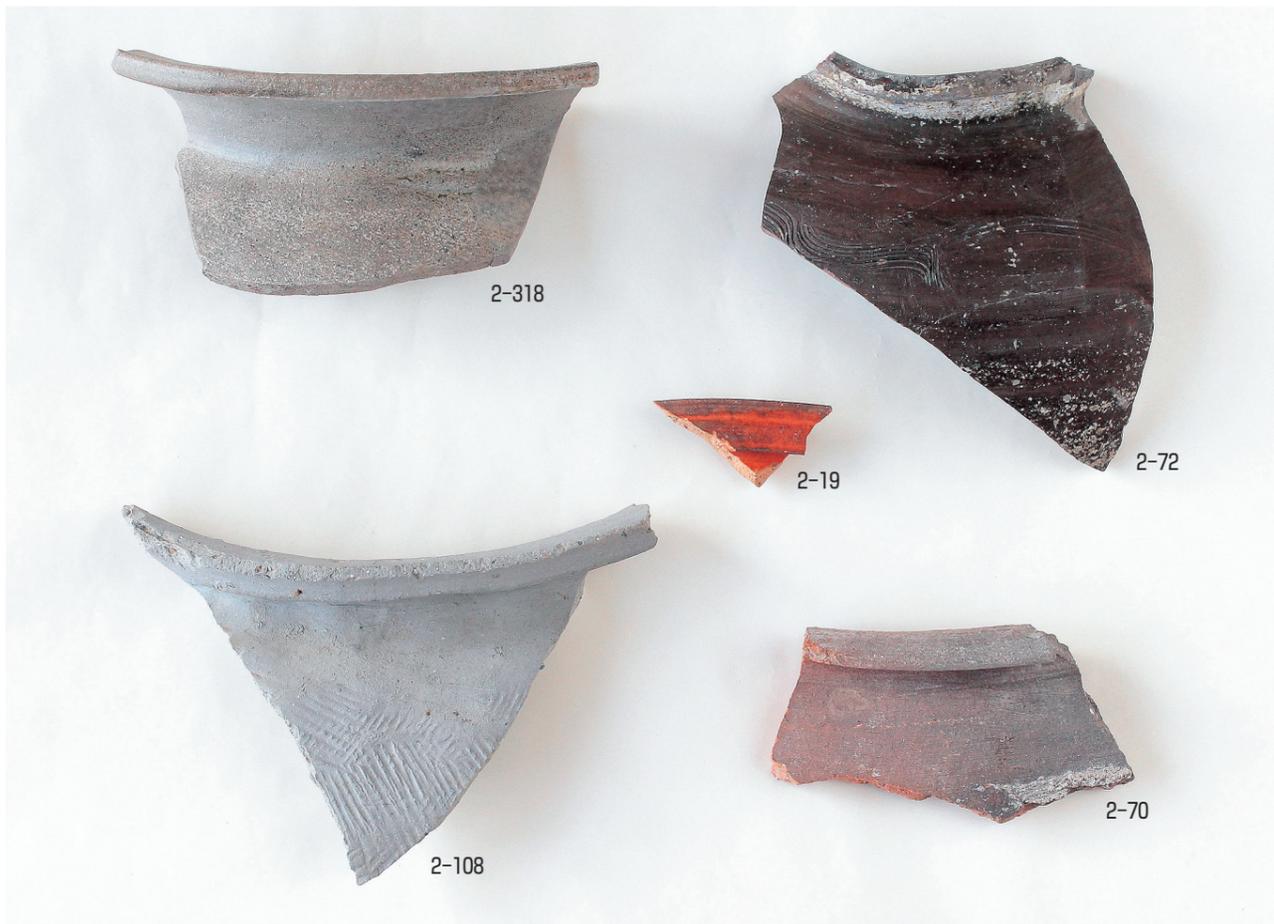


取り上げられた柱痕











土坑25・溝18出土鑄型片



P333出土鑄型片

茂利・宮の西遺跡木製品の樹種について

茂利・宮の西遺跡で検出された柱根11点について、徒手により可能な限り木口、柾目、板目の切片を採取し、カナダバルサムで包埋し、永久プレパラートに仕上げ保存している。同定は光学顕微鏡下で行なっている。撮影した写真の倍率できていない。

《同定根拠》

・ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl.

木口には樹脂細胞が散在し、柾目の放射組織にはヒノキ型で1分野に1-2個の分野壁孔が認められ、板目の放射組織は単列で15細胞高程度が看取された。

・スギ *Cryptomeria Japonica* D.Don

木口には樹脂細胞が散在し、柾目に確認される分野壁孔はスギ型で、1分野に1-2個の壁孔が存在し、板目の放射組織は単列で10細胞高程度が看取された。

・クリ *Castanea crenata* Sieb.et Zucc.

木口の孔圏部には大型の単穿孔道管がみられる。道管は孔圏外で急激に大きさを減じて、火炎状に配列する環孔材である。放射組織は単列ですべて平伏細胞からなる同性である。

《まとめ》

同定によりヒノキ9点、スギ1点、クリ1点が確認された。

掘立柱建物の柱材としては、ヒノキが一般的に使用されており、当遺跡も同様の傾向を示しているといえる。ただ、1材ずつではあるがスギ・クリが確認されたことは、柱材として必ずしも厳密に選択されていたとはいえない事例と理解したい。

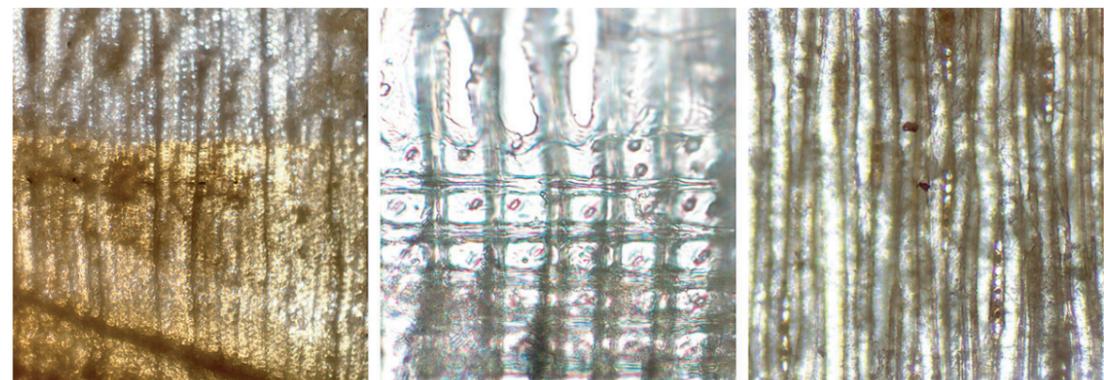
(加東市教委 森下)

参考

- 嶋倉巳三郎 「手引表により古木材の種別識別」
- 島地 謙ほか 『図説 木材組織』地球社 1982
- 佐竹義輔ほか 『日本の野生植物 木本I』平凡社

出土地	番号	樹種	出土地	番号	樹種
2区A	P035	ヒノキ	2区B	P349	ヒノキ
2区A	P111	ク リ	2区B	P376	ヒノキ
2区B	P264	ス ギ	2区B	P387	ヒノキ
2区B	P304	ヒノキ	2区B	P424	ヒノキ
2区B	P323	ヒノキ	2区B	P459	ヒノキ
2区B	P326	ヒノキ			

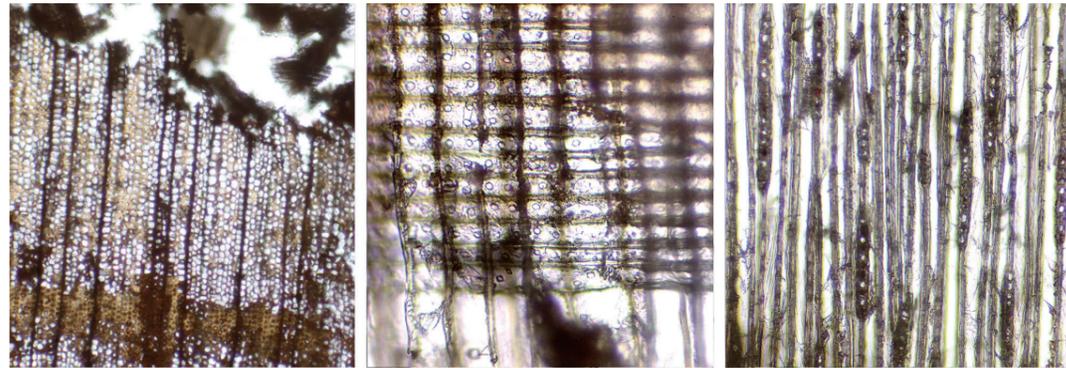
表1 樹種同定一覧表



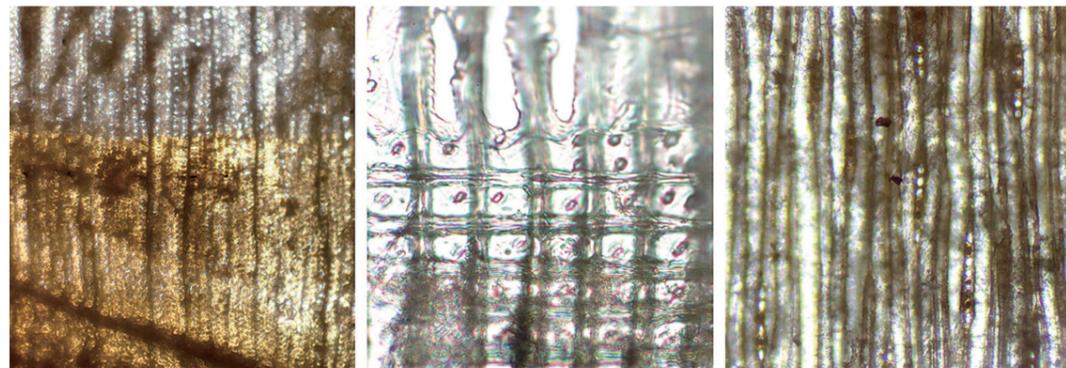
P111 クリ 木口

柾目

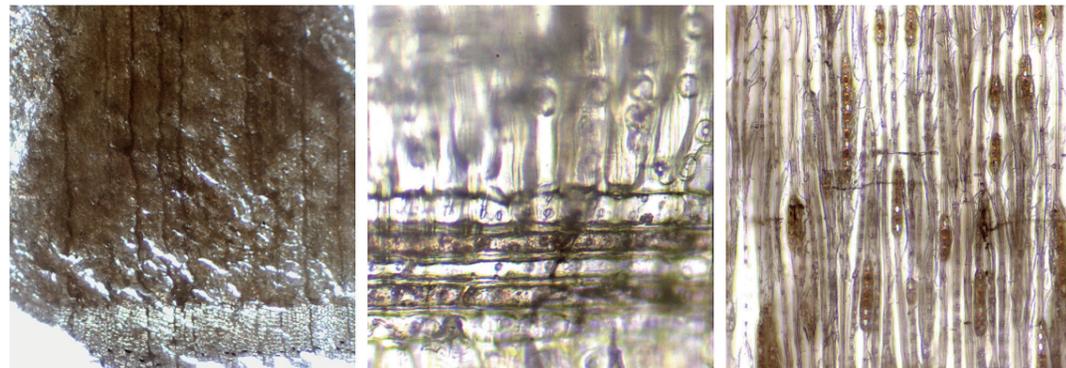
板目



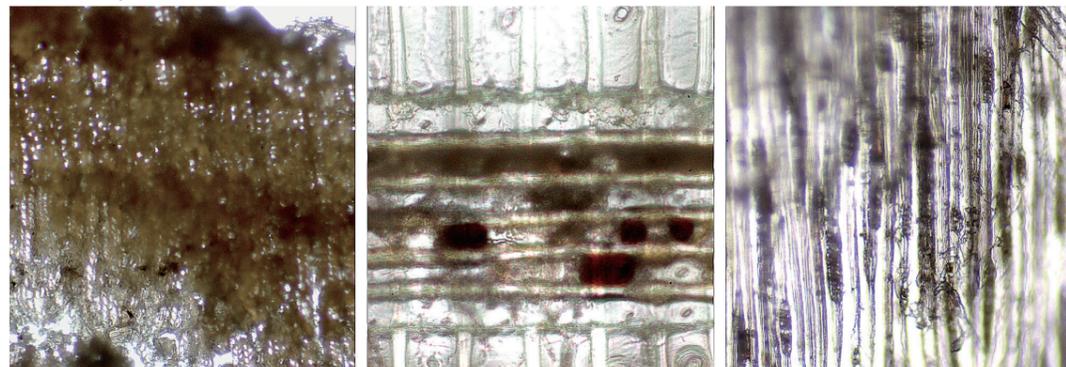
P264 スギ



P304 ヒノキ



P323 ヒノキ



P349 ヒノキ

樹種写真(左より 木口 柱目 板目)

報告書抄録

ふりがな	しげり みやのにしいせき							
書名	茂利・宮の西遺跡Ⅱ							
副書名								
シリーズ名	多可町文化財報告							
シリーズ番号	21							
発行機関	兵庫県多可郡多可町教育委員会							
編著者名	宮原文隆、森下 大輔							
編集機関	多可町教育委員会 那珂ふれあい館							
所在地	〒679-1134 兵庫県多可郡多可町中区茂利20 TEL0795-32-2385							
発行年月日	西暦2013年(平成25)3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査 期間	調査 面積	調査 原因
		市町村	遺跡番号					
しげり みやのにし 茂利・宮の西	ひょうごけん たかくん 兵庫県多可郡 たかちょうなか 多可町中区 しげりあざみやのにし 茂利字宮の西	2833	中区 306	35度 02分 37秒	134度 55分 24秒	19920420～ 19920520 19921030～ 19921107 19921110～ 19921226 19921226～ 19930106	確認調査 約340㎡ 第1区調査 約200㎡ 第2区調査 約1600㎡ 第3区調査 約110㎡	川西北地区 土地改良総 合整備事業 に係る事前 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
茂利・宮の西	集落跡	奈良時代～ 近世	柱穴群、溝、 土坑、井戸等		須恵器、土師器、 鋳型・溶解炉片、 木製品等		鋳造工房跡と推定 される建物・区画溝 と関連遺物の検出。 有銘資料と古文書の 検討から仲山鋳物師 の存在を検証。	

多可町文化財報告21

しげり みやの にしい せき
茂利・宮の西遺跡Ⅱ

2013年3月

発行 多可町教育委員会

〒679-1105 兵庫県多可郡多可町中区東山639-3番地

TEL. (0795) 32-0685

印刷 ウニスガ印刷株式会社

■データー 紙質 表紙 アートポスト 220kg
見返し 色上質 藤色 特厚口
本文 クリームキンマリ 57.5kg
カラー図版 アート 93.5kg
文字 モリサワ 14級
写真 スキャナー分解
製本 無線トジ